
私と小さな未来抗争

ムライリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と小さな未来抗争

【Nコード】

N5662Q

【作者名】

ムライリカ

【あらすじ】

小中望美はその日暮らしを送っていた34歳。クリスマススイブの日、路地裏で倒れていた少女を助ける。少女にマリアと名付けた数日後、未来人と名乗る二人組のケイとアイがマリアを連れ戻しにやってくる。二人が言うには、マリアは未来の兵器だと言う。勿論そんな事信じられない望美は、マリアと一緒に監視生活から逃れようと決心するが……。

止まっていた筈の時の歯車が徐々に動きだす。未来をかけた小さな争いが今、始まるうとしていた。

time 1・クリスマスイブ

鼓膜が破けるほどの大きな爆発音が後ろではじけ、激しい衝撃で前に突き飛ばされた。同時に白い何かが目の前に飛び出す。それがエアバックだと気付いた時にはもう、小中望美の身体は思い通りに動かせなくなっていた。

全身が酷く痛い。何とか頭だけを起こすと、目の前には粉々になったフロントガラスと、大きくへしゃげたガードレールが見えた。頬に何かがつたる。望美がそれに触れると、べっとりとした血のような物が付着した。

何の冗談だろうか。

「愛美っ！」

望美は後部座席に居るはずの娘、愛美を探して振り返ろうとした。しかしエアバックと座席に身体を見事挟まれて動けない。

「愛美っ……愛美っ！」

自分の痛みに耐えながら、叫ぶ。首だけでも後ろを向かせようと躍りになっていると、突然ドアが開いた。

「大丈夫ですか！今助けますから動かないで下さい！」

赤い服の人が無理矢理座席を引っ張り上げると、もう一人の赤い服が望美を車内から外へ引きずり下ろす。白服の人も現れて望美をタクシーに乗せてその場から離れようとする。

その時望美は信じられない光景を目の当たりにした。自分の乗っていた車がトラックと衝突していたのだ。しかも車の後ろ半分は原型が無いほど押し潰されている。

「愛美

っ！愛美

っ！嫌あ

っ！！」

気がつくと望美は全身に汗をかいていた。鼓動が随分早くなっている。胸に手を当てると、見慣れた茶色い天井に焦点が合う。

またこの夢か。望美はゆっくり身体を起こすと、すぐ側に置いてあるデジタル時計を見た。午前四時四七分。とんだ真夜中に目が覚めたものだ。

パジャマが汗を含んで気持ちが悪い。布団から一步外に出ると底冷えするような寒さで、一秒でも早く元の暖かな布団に潜りたい。べたつく髪を掻き上げると、素早く床に脱ぎ捨ててタンスから新しい下着とパジャマを取り出した。

ふと窓の外を見ると景色が白に変わっていた。雪が降っているらしく、雨よりも遅い白粒が空から止めどなく落ちてきている。どつりで寒いわけだ。望美はゆっくりと落ちる雪を目で追った。京都の、しかも南でここまで積もるのも珍しい。マンションの四階から見える東寺の五重塔が、もみの木に見えなくもない。

今年は数年に一度のホワイトクリスマスになるようだった。

愛美が亡くなってからもう一年が経とうとしていた。そして週に一度、あの時の夢を必ず見る。

望美は未だ去年のクリスマススイブから抜け出せずにいた。あの日は雪なんて幻想的な物は降っていなかったが、この寒さは殆ど変わらない。

望美は愛美と二人でクリスマスプレゼントを買いに市外にあるショッピングモールに出かけていた。愛美と遠出したのは随分と久しぶりの事で、当時小学四年生の愛美は大はしゃぎでおもちや屋を駆け巡っていった。

結局プレゼントを一つに絞ることが出来なくて、愛美は駄々をこねて全部買わせようとした。

「お母さん、これも欲しいなあ。ねえ、三個まで買ってもいい？」

「もう、仕方ないわね……今回だけよ、そんなゲームばかり買って。冬休みの宿題もしなきゃ駄目だからね」

望美はカゴの中に入っている箱を覗みつけた。

「勿論やるよ！やった！」

愛美が嬉しそうにまたゲームコーナーへと走っていった。愛美がゲームに走るのも、自分が家に居ないせいなのだ。その事を十分に理解していた。

望美はシングルマザーだった。愛美が小学一年生の時に旦那と別れて以来、愛美を女手一つで育ててきた。普段はパートで朝から夜ま

で働き詰めの毎日。愛美と一日一緒にいてやれるのも久しぶりだった。

「お母さん……あとこれも欲しいんだけど……」

そう言って抱えていたのは大きなクマのぬいぐるみ。望美はもう全部買ってあげるわよと笑ってぬいぐるみとゲームソフト、合わせて五点を買いあげた。

そんなご機嫌な愛美と家に帰る途中の事故だった。原因はトラックの運転手による居眠り運転。その怒りをぶつける相手すら、この世から居なくなっていた。勿論愛美もない。

あの事故のあった日から、望美は何をするわけでもなく、まるで抜け殻のようにその日暮らしをしていた。進む道も、戻る道も見当たらない。立ち尽くしている内に一年という時間だけが過ぎてしまった。

あの夢からどうにも寝付けなくなった望美は、もういつその事起きてしまおうと布団から這い出た。寒さで身が縮む中、こたつとテレビを付ける。テレビのニュースでも今年はホワイトクリスマスなどとほざいていた。

望美はクリスマスだからと浮かれている世間に、憤りを感じてリモコンを投げ飛ばした。それは激しく音を立てて落ちる。リモコンの電池が飛び出してしまった。それがあの時の事故を関連付けているかのように感じて、望美は涙を流した。

愛美が死んだと言うのに、世間はクリスマスだと浮かれている。許せなかった。何が許せないかと言うと、あの事故で自分だけが生き残ってしまったのが許せなかった。いつそ愛美と死ねば良かった。一緒に天国まで行って遊んでやれば良かったのに。それも出来ずに自分は、今までならだと生きて過ごしている。

愛美が近くで自分を責め立てているに違いない。でなければあの夢を頻繁に見るはずもなかるう。望美は全て原因が自分にあるように思えてきて、朝から大声で泣いた。

今年のクリスマスイブはそうして始まった。

time 2・路地裏の少女

何もしなくてもお腹は空く。つけっぱなしのテレビが午前七時をお知らせしていた。

泣き疲れてそのまま寝てしまった望美は身体を起こすと、冷蔵庫の中を漁った。しかし自分の食べたい物が見つからない。ここ一年で自炊をしなくなった証拠に、冷蔵庫の中身は殆ど酒で埋め尽くされている。

軽く舌打ちをすると、コンビニで何か買ってこようとダウンジャケットと、化粧をしていないので頭にニット帽を深く被って外に出た。雪は既に止んでいたが、手袋無しではかじかむような寒さだった。ポケットに財布ごと手を捻じ込むと、急ぎ足で近くのコンビニへと向かった。

簡素なお弁当と、缶コーヒーを買って自宅のマンションに戻る。マンションの前の公園では、朝から子供たちが積もった雪で雪合戦をしていた。

寒いのに元気なことだ。望美は思わず愛美を探している自分の目を慌てて塞いだ。いくら探してもここには居ないのだ。涙が急にせり上がり、公園から遠ざかるように路地裏へと入った。ここからでもマンションには戻れる。遠回りになるが望美は気にしなかった。

路地裏は汚い。常にゴミが散乱しているのは、同じマンションにすむマナーの悪い輩がここに投げ捨てているからだ。望美は知っていた。左右には人工の茂みが植えつけてあるのでゴミ等を隠すのもつてこいの場所だ。

車も入れない程狭いので、マンションの若い奴らが夜たむろしているのを何度か見かけた事がある。流石にこんな朝方からはいなかっ

たが。今日が土曜日なのも手伝って、マンション周辺は静まりかえっていた。

吹きつけて来る風に取り除かれてみると、何か汚い布切れを踏んだ。思わず足が止まる。茂みの中から布切れが路地裏にはみ出していた。望美がなんだろうと茂みの中を覗いた瞬間、思わず悲鳴を上げそうになった。

人の白い手が見えたからだ。

望美が唾を飲み込んで、息をするのも忘れてもう一度覗く。今しがた見たものを嘘だと信じ込む為だ。しかし、はっきりと捕らえただけだった。

子供の手だ。子供が倒れている。

「貴方、大丈夫？」

望美が茂みをかき分けると、布切れに身を包んだ黒髪の少女が横たわっていた。慌てて身体を起こすと、この少女が何も衣服を身につけていない事に驚いた。しかも全身所々に痛々しい痣が浮き出ている。

「ちょっと、どうしたのよ！ねえ、何があったの、起きなさいよ！」

懸命に少女に呼びかけるがピクリとも動かない。望美が慌てて胸に耳を付けると微かに音が聞こえた。良かった、生きている。死んではいないが、このままではまずい。

望美は少女の身体を軽く叩くと、自分の来ていたダウンジャケット

を汚い布の代わりに着せてあげ、少女を持ち上げようとした。しかし、見た目以上に少女は重い。どこにこんな重さがあるとも言っただろうか。

「ほら、しっかり立ちなさい！」

望美は少女にそう叫ぶと、仕方なく肩に手を回して引きずるように茂みから脱出した。

体力は人並みにあるつもりだが、重すぎる。愛美と同じ年くらいに見えるが、それでも愛美よりだいぶ重く感じた。

望美はマンションの誰かに見られまいとニット帽をしっかりと押さえつけ、少女にフードを被せてあげると急いでエレベーターに乗り込んだ。しびれた手でボタンを押す。そして誰とも乗り合わせる事が無いようにと祈った。

祈りが通じたのか、四階のフロアには誰もいない。望美がもう一踏ん張りで一番奥の自宅に着く頃には、寒いのに汗を掻いていた。それ程までに少女は重かったのだ。

玄関の鍵をかけると、少女を床に座らせ急いで暖房器具を付けて回る。こんな寒い中、ほぼ全裸で横たわっていたのだ。凍傷になってはいないだろうか。

望美は布団から毛布を引っ張りあげて、電気ストーブを付けると少女をその前に横たえさせた。ダウンジャケットを脱がして全裸にさせると、どうしても痣に目が行く。

この子に何があったのだろうか。

痛々しい痣を横目に、少女の身体を調べていく。外傷はないようだ。手足もしもやけ程度に赤るんでいるだけで、ちゃんと呼吸をしてい

る。大丈夫そうだ。

少女に毛布を被せてあげる途中、ふと首に紐がかけられていることに気がついた。たぐり寄せると先端に金属のタグが付いており、そこにはローマ字で『M A R I A』と刻まれている。

「何よ……これ……」

裏返してみると、そこにも文字が刻まれている。1036。何の数
字だろうか。

望美は少女を抱きながら、これからどうすべきか考えていた。とりあえず暖はとらせたが、念の為に病院に連れて行った方がいいだろう。勢いでこの子を連れて帰ってしまったが、親が心配しているに違いない。

「……………」

もしかして、この子の親がこんな風にしたのではないのだろうか。全身あちこちにある痣。まるで虐待を受けていたかのようじゃないか。寒空の下、どういう理由かは知らないが、全裸同然にさせられていたのだ。この子の親はどうかしている。ひよっとすると、その親から逃げ隠れていたのかもしれない。

望美はとりあえず少女が目覚めるのを待った。病院はそれからでも遅くはないだろう。少女の黒髪を撫でてやると、望美は何となく、自分の被っていたニット帽を少女の頭に被せてやった。少女の寝顔が愛美を思い出させる。まるで愛美そのものだった。背丈も、長い黒髪もそっくりだ。なんだか複雑な気持ちで少女を抱き続けた。

ふと、お腹が鳴った。この時になってお弁当と缶コーヒーを、路地裏に忘れてきた事に望美は気がついた。

time 3 少女の目覚め

あれからお昼を過ぎ、夕方になったが少女が一向に目を覚ます気配はない。

望美は不安になった。やっぱり病院へ連れて行ったほうが良かったかもしれない。しかし、この子の親が虐待を働かせているのなら、場所を知らせてはまずいのではないのか。

どうすべきか分からないこの状況が腹ただしい。望美は眠っている少女の手を握りながらこう言った。

「もう、早く起きてなさいよ。親はどうしたのよ、親は。貴方の親がこんな酷い事をしたの？」

その瞬間、少女が目を開けた。

「ん……」

虚ろな目を泳がせて、ここが何処か認識しかねている。その目を見た瞬間、望美は少女を強く抱きしめた。

「よかった！……もう、心配かけてっ……」

望美は涙を流した。このまま永遠に眠り続けるのではないかと思っただからだ。

そんな望美を尻目に、少女は不思議そうに宙を眺めていた。

「……は……？」

「ここは私の部屋よ。路地裏で倒れていた貴方を、ここまで運んできたのよ」

「……路地裏？」

「そう、このマンションのすぐ裏にある道よ」

「……誰？」

少女に訊かれて、望美がああそうかと思い直した。

「私は小中望美。貴方は？」

「私？……私は……」一瞬にして少女の顔が歪んだ「……誰でしょうか」

「誰って、自分の名前、わからないの？」

少女は目を細めて懸命に思い出そうという素振りをしてみせる。しかし、頭を押さえて振り始めた。

「大丈夫、大丈夫だから。ゆっくり思い出しましょう」

一時的な記憶喪失なのかもしれない。

何かしらのショックでこうなってしまった人を、望美はドラマの中で見たことがあった。無理もない、この状況だ。そうとう酷い事でもされてきたのだろう。

「もう寒くない？大丈夫？」

望美は少女の頭を撫でながら聞く。少女は「はい」と頷いた後、自分が裸なことに不審を抱いた。

「望美さん、どうして私、服を着てないのですか？」

「ああ、ごめんね、恥ずかしいわよね」望美が少女の身体から目線をそらした。「貴方の服、濡れていたから勝手に脱がせてもらったよ。風邪引いちゃうと思って」

流石に全裸だったとは言えない。言い終わると、望美は思いついたように立ち上がった。まだ愛美の服がある。この子なら余裕で着られるだろう。

隣の部屋の襖を開けると、手付かずに散らかっている物を避けながら洋服タンスを開けた。あの時と同じ、冬服のままだった。当たり前か。望美は皮肉にも感謝しながら愛美の服を少女に手渡した。

「これ着て頂戴、下着は新しいの無いからお古で申し訳ないけど」

「ありがとうございます」少女は毛布から手をもぞもぞと取り出して受け取った。「お手洗いはどちらですか？」

「ああ、私が出てくからいいわよ。寒いからそこで着替えて頂戴」

望美はリビングを出ながら、少女の敬語を不気味だと感じていた。他人行儀過ぎる。愛美と同一年くらいの女の子が、敬語で自分を尋ねるだろうか。見た目は女の子なのに、口調からは女の子らしさを感じられなかった。そういう風に話せと、親に仕付けられたのかもしれない。

終わりましたと声が聞こえたので、望美はリビングに戻った。愛美の服が少女にぴったり収まっている。何だか不思議な気持ちだった。自分は、この子に一体何をしようと言うのだ。この子は愛美ではない。それは分かっている筈だ。

「あの、これは付けていたみたいですけど……」少女が金属のタグを持つ。「何でしょう?」

『MARIA』と彫られたタグを見せる。

「それ、最初から貴方がしていたわよ。……もしかしてそれ、貴方の名前じゃない?」

「……これが?」

「マリアって彫ってあるわ。いい名前ね。ぴったりじゃない」

マリアが不思議そうに金属のタグを眺めた。そしてこの部屋全体を見回す。

「あの……私はどうすればいいのですか?」

マリアの質問に、望美が首を傾げる。

「どうするって、何を?」

「私、何かすべき事があったのです。ですけど……」マリアが泣くんだ。「すみません、思い出せそうにもなくて」

「そんなの、私に聞かれても困るわよ。貴方の名前だってマリアか

どうか分からないのだし……そう言えば、貴方の親はどうしたの？」
親と聞かれて、マリアは更に顔を崩した。望美はしまったと口を押さえた。今、親の事を問いただすべきではない。

「すみません……私、何も思い出せなくて……でも、何かすべき事が……」

マリアが頭を押さえつける。望美が慌ててマリアを抱きすくめた。

「とりあえず、お腹空いてない？何処かで夕食でも食べましょう」
ね、とマリアに笑いかける。マリアも自分のお腹に手をあてて「はい」と頷いた。

マンションから徒歩五分の所に、二四時間営業のファミレスがあった。世の中は便利になったものだ。望美はマリアにそれなりの格好をさせてやると外に出た。結局自分は朝から何も口にしていない。外に出て、この子の親にあつたらどうしようかとも考えたが、外に出れば何か思い出すのではないかという期待もあった。すぐ側の路地裏で倒れていたのだ。先程拭いてやった足も、それ程汚れてはいなかった。きつと近所の子供なのだろう。

望美はマリアの手を引きながら路地裏に入ってみた。まだ、汚い布が落ちている。

「マリアが倒れていたのはあそこよ」

そう言つて汚い布辺りに指を差した。マリアが不思議そうにその先を見つめる。

「……何か思い出せそう?」

激しく首を振つて望美にしがみついた。……駄目か。

望美は「ごめんね」と頭を撫でると、急いでその場を後にした。

ちようど夕食時であつて、店内は賑わっている。

店員に案内されて望美とマリアはツリーの側の席に案内された。そうだ、今日はまだクリスマスイブだった。

「何でも好きなもの頼んでいいわよ。今日がクリスマスの事すっかり忘れてたわ。ごめんね、こんな安いお店で」

望美がツリーを見ながら言った。マリアがそんな事ないと慌てて頭をふる。

「いえ、お食事までさせて頂きありがとうございます。望美さん」

やっぱり変だ。こんな子供に敬語で話されるのは気持ちが悪い。

「望美さんだなんてやめてよ。望美でいいわよ、望美で」

「でも、目上の人を呼び捨てには出来ません」マリアは少し考えて「何て呼べばいいですか」と尋ねた。

お母さん、とは呼ばせなくなかった。呼ばせてしまえば、マリアがたちまち愛美の代わりになってしまう。そういう関係にはなれない。望美は悩んだ拳句「お姉ちゃん」かなあと呟いた。

「お姉さ……お姉ちゃん」

英単語を覚えるかのようにマリアが何度も呟く。自分て言っときながら、随分と年の離れた妹だと笑った。

「マリアは何頼むか決めた？」

「えっと……このハンバーグセットがいいです」

「その敬語も禁止。私とマリアは記憶が戻るまで、今日から姉妹。いいわね」

望美はそう言いながらマリアの頭を撫でた。サラサラと真っ直ぐで、くせ毛の無い髪。自分とは正反対だった。

マリアが嬉しそうに白い歯を見せる。久しぶりに笑顔になれたクリスマスイブの事だった。

time 4・マリアのルート

この日を境に望美とマリアの不思議な共同生活が始まった。

親が見つかるまで、望美がマリアの面倒を見なくてはならない。お腹いっぱいにして帰ってきた望美は、安心させるようにマリアに言った。

「しばらくの間は、私がマリアの面倒を見るから何も心配しないで。必要な物があったら言って頂戴。とりあえずこの部屋の物は勝手に使っても構わないから」

そう言つて、当時の面影を残す愛美の部屋を開けた。マリアが後ろからひよっこりと顔を覗かす。

「うん、わかった。でもこの部屋に居た人はどうしたの？」

不意にマリアに聞かれて、望美は顔を顰める。

「……この部屋の人はいないのよ。だから気にせず好きにして」
「やった！」

無邪気に喜ぶマリアに、望美は正直怒りを抱いた。知らないのは罪だ、と言つてやりたい。

しかし相手は子供。望美は怒りを左右に振って誤魔化した。

「ゲームが沢山あるから、それで遊んでもいいわよ。しばらくしたらお風呂に入りましょう」

ゲームをやりだすマリアを部屋に残して、望美はお風呂場を掃除し、湯をはり始めた。身体の芯まで温まれば、もうマリアは大丈夫だろう。しかし、問題はこれからだ。マリアの親と、マリアが何処から来たのかを見つけないてはならない。

……とりあえず今日はお風呂に入ってもう寝よう。いろいろあって疲れた。肩首を回しながら、湯が充分にはるのを待つ。

望美がマリアに「お風呂一緒に入ろうよ」と誘った時には、既にマリアは一ステージをクリアしていた。

翌日、望美はマリアのルート探しを試してみる事にした。

いつまでも自分がマリアを預かっているわけにもいかないだろう。マリアの親が、虐待を働かせているかどうかは別にして、心配しているには違いないのだから。

望美は出掛ける身支度をすると、マリアの部屋を覗いた。まだ気持ちよさそうに眠っている。本当に愛美そっくりだ。もしかしたらマリアは、神様がくれたクリスマスプレゼントなのかもしれない、と望美が思い込んでしまう程だった。

「マリア、体調の方はもう大丈夫？」

寝ているマリアにそっと話しかける。その声に反応してマリアが目を開けた。眠そうに目をこする。

「どこか痛いところとか、ある？」

「……ないよ、大丈夫」

「一応病院に行こうか？」

「病院は嫌っ！」

そうやって布団を被ってしまった。望美はマリアの態度に驚いた。そんなに病院が嫌いなのだろうか。

「……わかった。これから少し出かけてくるけど、一人でお留守番出来るかしら？」

頭だけ布団から出して頷いてみせる。望美は一応、マリアに聞いてみた。

「何か、思い出したりした？」

ううん、と首を横に振る。本人から情報を聞き出すのは、まだ難しそうだった。

望美はマリアに留守を言い聞かせると、近くの病院へと足を運ばせた。病院を嫌がる態度からして、ひよっとして病闘生活から逃げ出してきたのかもしれないと思ったからだ。

マリアの体調は一見万全のようだったが、やはり素人では判断しかねる。このマンションから歩いていける範囲で、大きな病院は一つしかない。望美は病院内にある総合受付で聞いてみることにした。

「あの、すみません」

「はい、何でしょうか」

カーデガンを羽織った年配の女性が笑顔で答える。望美はどう切り出そうか考えたが、素直に聞くしか方法は思いつかなかった。

「この病院から、女の子が逃げ出した……なんて事、ないですよね？」

「はい？」年配の女性が露骨に顔を顰める。「それはどう言った意味でしょうか？」

「いえ……その、突然居なくなった患者さんとか……いませんよね？」

あははと望美は笑って誤魔化す。駄目だ、これでは完全に怪しい人ではないか。望美はきびすを返すようにして、病院を後にした。

それから望美は警察署に出向いたりもした。もしかしたらマリアの親が、マリアを捜索願に出しているかもしれないと思ったからだ。しかし、最近この辺でそんな物騒な事件は起こっていないと言う。

おかしい。マリアの親は、自分の子が居なくなったというのに、探もしめないのか。望美は名前も顔も知らない相手に苛立ちを覚えながら、マリアは何処から来たのだらうと考え始めた。

発見当時、確かマリアの身体には汚い布だけで、殆ど雪は付着していなかった。おそらく雪が止んでから路地裏で倒れたのだろう。自分が昨日、あの夢で朝方起きた時には雪は降っていた。しかし、コンビニへ行く時には止んでいた。この短時間のどこかで、マリアは倒れた事になる。

マリアが遠くから連れてこられた可能性もないとはいえない。しかし地元の人しか知らないような道に、あのマンションの路地裏に、わざわざ遠くから捨てに来るだろうか。雪も降り積もっている。車も入れないし、そもそもあんな所に捨てる理由がわからない。死んでいるのならともかく、マリアは痣だらけではあったが、生きていた。……こうなったら、近所を一軒一軒尋ねて回るしかないのか。

一息着こうと、望美は近くの喫茶店に入る。店員にコーヒーを頼んでそれをすすりながら、銀行に後どれくらい残っていただろうかと考え始めた。愛美が亡くなってから望美は、あの事故の損害賠償で生活してきた。自分がどれくらい使ったのかなんて把握していない。そんな必要が無いと思っていたが、これからはお金が必要になるかもしれない。マリアは本来、小学校に通っている年頃なのだ。

急に現実が望美の頭上をかすめた。そうだ、小学校だ。この近辺の小学校に行けば、マリアが何処の家の子かわかるかもしれない。あたってみる価値はありそうだ。

望美は携帯でマンション近くの小学校を探し始めた。この範囲で通いそうな所が四箇所見つかった。

望美はとりあえず、マンションから一番近い小学校をあたってみることにした。

time 5 小学校訪問

どうマリアの事を聞き出そうか。マリアだと見せつけられる物を、自分は持っていない。写真の一枚でも撮ってから来るべきだったか。望美はどうしようかと校門前でうろろろしていたが、迷っていても仕方が無い。腹をくくると冬休みの中、閑散とした校庭を横切つて、来客用のインターホンを押した。

『……はい、何の御用でしょう』

「すみません、この小学校にマリアと名前のつく女の子、何人いるでしょうか？」

『……あの、どう言ったご用件で？』

やっぱりそうなるわよね。望美は髪を掻き上げた。やはり変な人だと思われているだろう。

「えっと、前にランドセルをしまったマリアという女の子にお世話になったので、その子にお礼をしたいのですが……その、この小学生の生徒だったかな……と」

嫌な汗が出てきた。なんて無理のある用件なんだろう。インターホンの向こうでざわざわと音が聞こえる。もういつその事、逃げだしてしまいたい衝動に駆られた。

『……どうぞお入りください。二階の来客室へどうぞ』

すぐ側で鍵の開く音がした。望美は外の空気で冷やされた銀色の取

っ手を強く引く。風とともに校舎の中に入り込むと、激しく乱れた髪の毛を手でとがす。スリッパに履き替えながら、自分は何をしているのだろうと嘲笑った。

来客室へ入ると、眼鏡をかけた事務員らしき男性が席を立つ。

「どうぞ、外は寒かったですでしょう。こちらにお掛け下さい」

にこやかに席に座るよう指示をされ、望美は一礼してから座った。

「すみません、突然変な用件でお邪魔してしまつて……」

「いえいえ。何でもマリアとつく名前の生徒を、探していらつしゃるそうで」

「はい。先日財布を拾っていただいたので、是非お礼をしたいと思つています」

「……そういう事は、交番で教えてくれなかつたのですか？」

言つてしまつてから、確かにと自分でも毒突く。望美は慌てて付け加えた。

「それが、直接手渡されたものだから、名前しか聞けなかつたのです。でも、どうしてもお礼がしたくて、私……」

わざわざ財布ごときで、ここまでお礼にこだわる人はいないだろう。自分でもおかしいと思ひながら口元を押さえた。もしかしたら笑つていたかもしれないからだ。

「そうですね……」男は眉間を寄せて腕組みをする。「顔は覚えてらっしゃいますか？」

「はい。真っ直ぐな長い黒髪で、体型は標準だと思います」

「わかりました。では写真を見てもらう方が早いでしょう。今学期のクラス別の写真を持ってきますので、少々お待ち下さい」

「すみません、ありがとうございます」

「いえいえ、うちの生徒が良い事をしたのには違いありませんから」にこりとそう言われて、望美の胸は大変痛んだ。申し訳ない嘘をついてしまった。口の中が酸っぱい。

しかし、これで MARIA がこの小学校に通っていたかどうか分かる。望美はそう思い直す事にして、背筋を伸ばした。

男の持ってきた十数枚の写真を何度も眺めてみるが、どこにも MARIA らしい人物は写っていない。

「MARIA と名の付く女生徒は、うちでは四人いるみたいです。どの子が MARIA までわかりかねますが……どうでしょう？」

「はい……」望美は高学年辺りの写真を何度も見直す。「すみません、どうやらこの小学校にはいないみたいです」

「そうですね。まあその写真も春に撮ったものですから、髪型なんて変わっているかもしれないですね」

男にそう言われて望美は MARIA の顔を思い描いた。それでも当ては

まりそんな人物は見あたらない。

「……やっぱりいなさそうです。わざわざ写真まで見せていただき、ありがとうございますでした」

「そうですか。お力になれなくて残念です」

「いえいえ、こちらこそ突然お邪魔してすみませんでした」

望美は深々と男に頭を下げると、居心地が悪くなったので急ぎ足で校舎を出た。

もしかしたら職員室の窓から自分を見ている人がいるかもしれない。望美はそう考えると怖くて振り向けなかった。

それから望美は近所のスーパーで遅い昼飯の弁当を二つ買い、自宅のマンションに戻った。流石にあれから他の小学校にまで足を運ぶ気にはなれない。訪ねても、マリアの手がかりが得られるとも思えなかった。

何故、マリアは路地裏で倒れていたのか。マリアに何があったのか。すべき事がわからないと言っていた、そのすべき事とは何か。

望美は考えれば考えるほど混乱してきた。最初は近所の子供だと楽に考えていたが、どうやら事はそう単純では無いらしい。親さえいるのかどうかかわからない。マリアが何か思い出してくれるのを、しばらく待つしかないのか。

マリアの部屋を開けると、よっぽどそれが気に入ったのか、ゲームをしているようだった。

「あ、お帰りなさい、お姉ちゃん！」

パジャマ姿のまま、笑顔でマリアが振り返る。

「ごめんね、お腹すいたでしょ。お弁当買ってきたからお昼にしよう」

望美がそう言ってちらっと画面を見ると、もうエンディングのスタッフロールが流れている所だった。

あのゲーム、愛美が難しいからと、自分にもやらせたゲームだった気がする。いや、そうに違いなかった。

「マリア、もうあのゲームクリアしちゃったの？」

お弁当を開けたマリアがうん、と頷く。

「凄く面白かったよ！」

顔を見て、望美は寒気が走った。ただの小学生には見えなかったからだ。

time 6・過去への到着

先程こちらの京都に着いたケイとアイは、少し焦げた臭いのする車内で揺れていた。

車は都心に向かって走っている。外では雪がまだあちこちで白を見せおり、アイが試しに息を吐くと白く濁った。

「こっちは今、冬なんだ。もっと厚着してこればよかったかなあ」

アイがぴっちりとした黒のモビルスーツを抱えて言う。車内は二人乗りと窮屈だったが、アイにとっては嬉しかった。何せ憧れの上司との任務なのだ。

「はあ、とにかく人が多い事。見て、まだ京都タワーなんて物がある。すごい！」

はしゃいで手を叩く。そんなアイの様子を、ケイは運転しながら横目で一瞥した。

若そつに見えても、アイが今年で28を迎えたばかりなのを知っている。

「遊びに来ているわけじゃない。そうはしゃぐな」

サングラスをかけ、栗色の髪をオールバックで携えるケイが静かに言った。

「いいじゃない、別に。どのみち次の転移には一週間もかかるんだから、もっと過去を楽しみましょうよ、ケイ。それにもうそのダサいサングラスは必要ないでしょ」

そう言つてケイのサングラスを勝手に取り上げる。ケイは一瞬顔を顰めたが、またすぐに正面を向いた。

「……確かにそうだな。こちらの金は幾らか持つてきている。場所はわかるんだ、そう焦る必要もないだろう」

懐からお金の束を一つ掴むと、それを助手席の前に投げ置く。アイがあまりの金額にびっくりして、慌ててその束を掴んだ。

「ケイの馬鹿！幾ら持つてきたのよ！これ、あたしたちの給料から引かれちゃうのよ！」

「ふん、せつかくの機会だ、過去で遊び尽くすのも悪くないだろう」
そう言い放つケイの横顔は勇ましい、とアイは思った。やっぱりサングラスは無い方がいい。

「とりあえずしまつてよ、これ」アイが札束をケイに押し付ける。
「で、墜落現場の座標軸まで後どれくらいなの？」

ケイが車に設置された特殊なグラフを見る。グラフには赤と緑の点が点滅しており、それがすぐ重なる位置にまで来ていた。

「もうすぐだ。おそらく、あのマンションの裏側辺りだろう」

ケイが指を差す。公園が目の前にあるマンションだった。横手に回つてみるが、車がとても入れそうなスペースではない。

「おい、ここで降りるぞ……駐車禁止ではないよな？」

アイと共に確認する。大丈夫そうだ。二人がシートベルトを外して外に出ると、アイが寒そうに身体を震わせた。

「もう、何でよりによってあたしの嫌いな冬なのさ！」

「お前は夏も嫌いだったろうが。文句を言っな、行くぞ」

ケイが先にマンション裏の細い路地に入って行く。アイも遅れずにその後が続いた。

「見て、布切れが落ちてるわ！」アイが駆け足で茂みの中にあつた布切れを拾い上げた。「駄目、中身がない！」

「墜落から四日経過しているんだ、無理もない」

ケイは茂みに近寄った。地面を見ると、最近何かを引きずったような跡がある。

「もしかして、自分で起動しちゃったのかしら？」

「いや、それはないだろう」ケイは地面を指さす。「ここに何かを引きずったような跡が残っている。誰かが1036を運び出した」

ケイは後ろ手にそびえているマンションを見上げた。

「とにかく一度車に戻るぞ。こんな所を誰かに見られるとまずい」

二人は足早に狭い車内に戻った。ケイがエンジンをかけ、二人で再びグラフを確認する。

「墜落現場は今の所で間違いない。しかし、これを見ても1036はあそこから数メートル動いた地点にいる。……X軸は同じ、おそらくあのマンションの何処かにいるのだろう」

アイが何か見えないだろうかと、双眼鏡を取り出して確認する。昼間から電気の付いている部屋は四階だけのようだ。

「で、どうするの？一軒一軒訪ねて回るの？」

「……それしか無いだろう。とりあえずホテルを探すぞ。あと上着か何か欲しい。この格好では目立つ」

「了解。寒くてしょうがないよ」

アイが身体を震わせた。車が静かに発進する。

time 7・接触

クリスマススイブから四日も経過したが、結局マリアが何処の子か、また何処から来たのかわからなかった。

何もしなかった訳ではない。望美もマリアの写真を用いて、あちこちの施設や、学校、病院等を手当たり次第に訪ねては写真の子を知っているかどうか聞いて回った。しかし誰一人としてマリアを知る者はいない。

何故、どうして。そう誰かに叫びたい気持ちでいっぱいだった。

「マリア、夕飯の買物に行ってくるね。……何か食べたい物ある？」

「ううん、大丈夫。寒いから気をつけてね」

「ありがとう」

望美は嬉しくてつい笑みをこぼした。未だに記憶を思い出せないでいるが、マリアはこんなにも優しい子。こんな少女を路地裏で置き去りにするなんて許せない。貯金もまだ二千万近く残っていることだし、このまま親が見つからなければ自分がマリアを育てようと思っていた。施設に預ける考え自体も持ちあわせてはいない。マリアは、望美の為に神様が用意したプレゼントだったのだと思い込む事にした。

駅前のスーパーは人混みで賑わっていた。鯛に数の子、黒豆とめでの食材が並ぶ。新しい年明けが、目の前まで迫ってきているよう

だ。そんな光景に自分にもようやく新しい年明けが訪れるものだと感じた。去年と違い、今年は二人だ。

今夜は鍋にしようと、食材を買ってマンションに戻ってきた時だった。望美は公園の前に黒い車が停まっているのに気が付いた。完全な二人乗り専用らしく、トランク部分が見当たらない。変な車だ、何処の車種だろうか。

思わず運転席を覗いたが、誰も乗っていないようだった。速度メーターの所にわけのわからないスイッチがいっぱい詰まっている。所謂改造車なのだろうか。望美は不審に思いながらもその場を後にし、急いでエレベーターに乗り込んだ。四階のボタンを押すが、三階の所で二人の男女が乗り込んでくる。

「ああ、すみません」

オールバックの男が軽く頭を下げる。続いて入ってきたショートカットが少しずれたような女は、望美を見るなり顔を背けてしまった。どう言う組み合わせなのだろうか。夫婦やカップルではなさそうだった。望美が二人の関係を目で探っている内に、四階のドアが開いた。

「ここで降ります、すみません」

スーパーの袋をぶら下げた望美は大きく前に出た。鍵をポケットから取り出して部屋の前に立つ。

が、背後で先程の二人が自分の後を追うように望美に近寄った。

「奥様は、こちらにお住まいの方ですか？」

男がにこやかに尋ねる。

「はい、そうですけど」望美が上から下まで二人を見下ろしてから言う。「……何の用でしょうか？」

一瞬何かのセールスかと思いきや、そうでは無いことが服装から知れた。男は真っ黒なロングコートで身を隠しているが、その下はスーツではない。女の方は真っ白なダッフルコートを着ていて、その下はぴっちりとした光沢のある黒いパンツ。

どちらも、手に何も持っていない。

「小学生くらいの女の子、知りませんか？」

男が目を見て言った。その目は鋭く、自分を探っているのだと望美は感づいた。

「それは……何処のお子さんの事でしょうか？」

このマンションで暮らしている小学生は十人といない。しかし誤魔化さなければならぬと望美の頭が疼く。

「長い黒髪の女の子です。ご存知ないでしょうか？」

「……いえ。近所とあまり関わり合いがないものですから、わかりません」

食材を持つ手が痺れてきた。早くこのドアの向こうに入りたい。

「そうですか。しかしこの住人から、あなたが女の子の知り合いを探していると聞きましたが」

目が笑っていない。一昨日、マンションの住人にも写真で聞き込みをした事がばれている。

望美はその場からどう逃げようかと目を配ったが、唯一の通路で二人に板挟みされている。おまけにこの荷物。言い逃れは出来ないようだった。

「……貴方達が、あの子の親なの？」

望美が睨みつけるように双方を見る。

「いえ、親と言うよりは管理者と言った方が正しいですね。部屋、上がらせてもらいますよ」

男が青いゼリー状の玉を取り出すと、それを鍵穴に差ししてひねる。かちゃんと、鍵の外れた音がした。

「やめて！何考えてるのよっ！」

望美が荷物を落として男に突進しようとしたが、後ろから腕を掴まれる。

「手荒なマネはしないわよ、安心して」

ダッフルコートを着た女だ。望美はその腕から必死に逃れようともかくが、女は微動だにしない。それでも必死に抵抗を試みる。

「あの子について少し話したい。部屋に上がっても構わないだろうか」

「嫌よ、その手を話しなさいよ！」

望美がドアノブにかけられた手を、思いっきり蹴り上げようと足を振り上げた。男が素早くその手を引っ込ませる。

「俺達は話し合いに来たんだ。暴力をふるうつもりはない」男が周囲に人がいないのを確認しながら言った。「ここで騒いだらご近所の目に触れるだろう。アイ、離してやれ」

男に言われてアイとよばれた女が望美の身体を離れた。望美は力が奪われたようにその場にしゃがみ込む。

「貴方達、何者なの？マリアに何の用よ！」

マリアと言われて男の表情が一瞬崩れた。アイがクスクスと笑い出す。

「あの子を引取りに来たのよ。元々あの子は、あたし達の所の子なの」

この人達の子？訳がわからない。

「とにかく部屋に上がるのはやめて、マリアには記憶がないのよ！」

望美の言葉に二人は顔を見合わせた。二人とも驚いている。

「……どうするのよ、ケイ。あたし達の事覚えてないだなんて」

ケイと呼ばれた男は顔を顰めた。何か考えているようだ。

「だから知らない人とマリアを引き合わせる訳にはいかない、とにかく帰って！」

望美が声を張り詰めて叫んだが、二人とも動こうとはしない。ケイが顔を上げた。

「いや、帰るわけにもいかない。とにかく貴方だけでもあの子について知る必要がある。……何処か場所を移しましょうか、それなら貴方も文句ないでしょう」

望美に手が差し伸べられたが、それを掴む気にはなれない。ケイを睨み続けていると、後ろからアイに抱き上げられた。

「あの子が何者が知りたいでしょ、早くその荷物しまつてきなさいよ」

二人に後押しされて望美は落ちた鍵を拾い上げ、ドアノブを捻った。

「ここで待っていますから、五分以内に出てきて下さい。逃げ出さうなんて馬鹿な考えは捨てた方がいい」

後ろからケイにそう言われたが、望美は返事をすることなく部屋に入った。とりあえず買ってきた食材を冷蔵庫に入れる。玄関のドアを睨みつけながら、望美は何とかして二人でここから逃げられないだろうか考えた。

窓から逃げるにもここは四階。それは出来ない。逆に閉じこもっていたとしても、あの変な道具で開けられてしまうだろう。マリアの管理者だと二人は名乗っていた。どう言う事なのか。

望美はマリアの部屋を開けると、ゲームに夢中のマリアに小声で話

しかける。

「マリア、友人と少しお茶してくるから、その間に三泊ぐらいの荷物をまとめて頂戴。出来るわね」

いつになく真剣な顔で言われて、マリアは何事かと顔を顰める。

「お姉ちゃん、何かあったの？」

マリアもつられて小声になる。望美は面倒な友人に見つかつたから、三泊ぐらい何処かで外泊しようと告げた。あながち間違つてはいないだろう。

「え、外でお泊りするの？」

「そう、私が帰って来てからね。私の分もお願いしてもいいかしら」

マリアがいたずらっぽく笑った。夜逃げするみたいだと呟いている。

「夜までには戻ってくるから、マリアはいつでも外に出られる格好でいて。この鞆に荷物を適当に詰めて待っていて」

「わかった。気をつけてね」

マリアがこれは自分に与えられた任務だと、厳しい顔で鞆を受け取った。望美が小さく頷く。

「早めに戻ってくるから。心配になっても家から出ちゃ駄目よ、いい子でね」

マリアの頭を撫でてやる。望美はいざと言う時の為に、現金と走りやすい靴に履き替えて玄関の覗き窓から二人を探った。やはりドアの前で待っている。

マリアが心配そうにこちらに来てくれたが、望美は大丈夫だからと部屋に戻らせた。今、マリアを見られる訳にはいかない。どういう理由であれ、あの二人がマリアを置き去りにしたのだ。

望美は気合を入れて頬を軽く叩いた。玄関のドアを開けると、先程の二人が自分に気がついて振り向く。

「わりと時間かかりましたね。心配しましたよ」

ケイが不審な目で望美に話しかけた。

「お手洗いに行っていたのよ」

「そうですか。この辺りに喫茶店か何かありますか？そこでお茶でもしましょう」

ケイが先頭をきってエレベーターのボタンを押した。望美の後ろではアイが見張るようになって来る。望美は嫌な気分でもエレベーターに乗った。無言で降りる箱の中は大変息苦しかった。

time 8・マリアの秘密

歩いて五分のファミレスに望美は案内した。クリスマスイブにマリアと来た所だ。残念ながらツリーはもう無い。

「我々は食事をとらせてもらっても構わないだろうか。何も食べていないので」

メニューを見ながらケイが言った。望美はどうぞと言って自分はコーヒーを頼む。

「あたしこのヘルシーな奴にしよう」と！

アイがケンの隣でメニューを指さしている。望美は二人と向かい合うように座らされていた。

四時半という中途半端な時間では、自分達の他に客がぼつぼついるだけだった。

店員に注文をし終わると、二人は改まって望美と向かい合った。

「自己紹介が遅れました。俺はケイ、でこちらが部下のアイだ」

「どうも」

ショートカットのずれたアイが素っ気なく返事をする。望美は二人を見比べてどういう上下関係なのかと疑った。

「貴方の名前は？」

「……小中望美よ」

「小中さん、率直に言いましょう。我々は未来から来ました」

「は？」

お水を飲もうと伸ばした手が止まる。

「今から、約150年先の未来からこちらに来たのです。目的は1036の捕獲」

1036？未来から来た？何を真剣に言っているの？

「つまり黒髪の少女……貴方がマリアと呼んでいる子を捕獲しに来たのです」

捕獲？マリアを？

「……どうしてよ」

「あの子は、我々の世界で言う、スパイ兵器なのです」

スパイ兵器？マリアが？

望美はケイの話がちゃんちゃら可笑しくなって笑った。

「笑うなんて失礼ね！」

アイが怒りを露にして机を叩く。ケイが仕方ないだろうとアイを制した。

「まあ信じないのも無理はない。突然怪しい二人組が来て、未来から来たと言う。貴方からしたら、頭のおかしな連中だ」

「そうね。まるでSF映画だわ」

「今はそう思ってくれて構わない。これは作り話だと思って聞いてくれ」ケイが目の前の水を手にした。「今、我々の世界。貴方の所で言う未来の日本は、東日本と西日本に別れて国内戦争をしている。第三次世界大戦の最中だ」

「第三次世界大戦?」

「そう、我々は西日本側の人間。そしてあの子、マリアは東日本リダーの娘のコピーでもある」

「コピーって……」望美が釈然としない表情で呟いた。「マリアは生きているのよ?」

「ああ、生きている。しかし中身はプログラムだ。あの子は東日本の娘の、クローンを元に作られた」

「クローン……」

「そして東日本の本拠地で、自爆するのがあの子の任務だ」

「自爆ですって?」望美が驚いてケイの顔を見つめた。「マリアになんて酷い事させようとしているのよ!」

一息つこうとケイが水を飲む。ケイが話している間、アイは黙って窓の外を見ていた。

「あの子はその為に作られた。歩く時限爆弾とでも言おうか。とにかくあの子が死ねば、この京都なんて一瞬にして消える。核までとはいかないが、それ相応の破壊力はある」

「その話を……私に信じると?」

「信じてもらうしか無い。現に貴方もマリアがどこから来たのか掴めなかった。当たり前だ、あの子は未来から来た兵器だしな」

「……………」

望美は複雑な面持ちで俯く。ケイが言うには、マリアは150年先の未来から来たロボット……いや、サイボーグと言った方が近いのだろうか?とにかくマリアの知り合いが見つからないのはそういう事らしい。

「お待たせ致しました、ステーキセットと、ヘルシーグラタンセットのお客様」

タイミングを見計らったかのように店員が食事を持ってきた。ケイとアイが一言詫びてから食べ始める。望美はコーヒーのお代わりを頼んだ。

「……………食べる時くらい、コート脱いたらどうなの」

暖房が効いているにも関わらず、二人はコートを脱いではいなかった。何かを隠しているようだ。

ケイが目立つのが嫌だが、確かに食べづらいなと苦笑しながらコートを脱いだ。コートの下は二人とも、ぴっちりとしたモビルスーツ

を着用している。

「これで信じてもらえるだろうか？」

ケイが冗談を含んだ笑いで望美に聞く。望美は少し笑った。

「何だか特注のコスプレみたいね。……それが未来人の格好なの？」

「まあ軍隊に属している人はみな、この格好だ」ステーキを口に頬張る。「筋肉の動きまでしなやかにサポートしてくれる」

ふーんと言って望美は二人の格好を探った。軍隊という割には銃とか、そんな危なっかしい物をぶら下げている様子もない。まあ懐から折り畳み銃、なんてものを出されたらお終いだが。

「そつえば、貴方達はどうやってきたのよ」

「我々は次元移動装置を備え付けた車に乗ってこちらに来了。本来はあの子が来た数時間後くらいを予定していたのだが、数日の誤差が出てしまったようだ」

ケイが一気に水を飲み干した。

「じゃあマリアは？マリアはマンションの裏道で倒れていたのよ」

「あの子は……施設にあった次元移動装置で、何者かに強制転移させられたのだ。あの子は西日本の切札。誰もが狙っていた。しかし転移先が過去だとは思わなかったな」

「……………」

「記憶が無いのは、こちらも予想外だった。おそらく生身で転移させられた為、データが破損してしまったのだろう」

「データって」望美は鼻で笑った。「マリアがアラレちゃんでも言いたいわけ？」

「……アラレちゃん？」

二人が目を丸くする。

「ドラえもんの方が分かるかしら？とにかく貴方達はマリアを道具扱いしてきた。全身にある痣は何？今までよっぽど酷い事してきたんじゃないの！」

二人が顔を見合わせる。そこには動揺がはっきりと見てとれた。

「大体今の話自体信じられないわ。未来からきたですって？マリアはロボット？馬鹿馬鹿しい！結局貴方達の仕打ちが酷いから、マリアが逃げてきただけじゃないの？」

「……………」

二人は押し黙ってしまった。チャンスだ。望美はこれ見よがしに伝票をもぎ取る。

「もう来ないで下さい、さようなら」

「待て、勝手な事をするな！」

ケイが席を立つて望美の肩を掴んだ。数人の客が何事かと振り返る。

「離してよっ！」

「とにかくもう一度座るんだ、こんな所で逃げてもらっては困る」

周囲を見渡すと、自分達と関わりたくないの、みな目を伏せて見て見ぬふりをしていた。自分だってこんな訳のわからない連中と関わりたくはない。

望美は掴む肩の強さに屈して、もう一度座りなおした。勢いで出て行く作戦は失敗のようだ。

「正直に言うと、あの子に対して酷い事はしてきている。実験も多々あった。しかし、我々の目的は東日本の壊滅。その為にあの子には犠牲になってもらうしか無い」

「酷い……酷いわ」望美は小さく呟いた。「マリアを殺すなんて」

「あの子は人間ではない。そう動くようプログラムされている、人の形をした兵器だ」

兵器、と言われても望美には全く実感が無かった。マリアはしゃべりもするし、ゲームだってしている。今でも家でしている事だろう。どう考えても普通の十歳くらいの女の子にしか見えない。

「マリアが兵器なんて……信じられない……」

「無理もない。人間らしく振る舞い、東日本リーダーの娘になりますのが目的で作られている」ケイは望美の様子を伺いながら、遠

慮がちに言った。「……あの子に会わせてくれないだろうか」

「……………」

望美はしばらくケイと見つめ合った。どちらとも、何と言おうか迷っている。

「貴方の会わせたくない気持ちも分かる。しかし、我々はあの子を連れ帰りに来たのだ。本来居るべき所に戻らなくてはならない」

望美は考えるように顔を顰めた。どう Мария に会わせるかではなく、どうしたらこの場から逃げ出せるかだった。勢いでそのまま飛び出すだけでは、先程と同じようにすぐ捕まってしまうだろう。その証拠にアイがあればから自分の足元を見ているのにも気が付いていた。

「……………今すぐ、ですか？」

「いや、次の転移が出来るまで一週間はかかる。その間、申し訳ないが俺とアイが交代で貴方を見張らせてもらう」

「えっ」

「えっ……！」

望美よりもアイの方が驚いてみせた。どうやらそんな話は聞かされていなかったのであるらしい。

「嫌よ、何でこんなオバサンまで見張らなくちゃいけないのさ」

「お……………」望美は目を丸くした。「おばさんですって？」

アイと言う女が幾つかは知らないが、34の自分がおばさん呼ばわりされるとは思ってもみなかった。

「せっかく過去に来たんだから、遊ぼうって言ったのは誰よ！」

「だから交代すると言っているだろう」

ケイがいらいらした様子で腕を組んだ。この二人が自分の家に交代で見張りに来る？冗談じゃない！

「ちょっと待ちなさいよ、勝手に話を進めないで。何で私まで見張られなきゃいけないのよ！」

「先程のように逃げ出されては面倒だからだ。悪いけどここは譲らない。俺も貴方も、どうやら信用していないみたいだしな」

再び望美とケイは見つめ合った。ケイの心意を探ろうとしたが、その目は黒く淀んで何を考えているのかわからない。望美は大きくため息をついた。

「とりあえず今日は俺が見張る。アイはホテルでのんびりしているといい」

そう言ってケンがホテルの鍵をアイに渡した。アイが呆然とその鍵を見つめる。

「え、ちょっと待ってよ。じゃあケイはこの女と一緒に一晩過ごすって言うの？信じられない、何考えてるのよ！」

「お前こそ何を考えているんだ。これは見張りだ、任務だ。明日はお前が見張るんだから早く帰って寝ろ」

行くぞ、と腕を無理矢理掴まれて望美は立たされた。引きずるられるように店を後にする。

「ちょっと、あの子置いてきちやって大丈夫なの？」

「ふん、子供でもあるまいし一人で何とかするだろう。それより離れずについて来てくるんだ。靴を変えたのは逃げ出す為か？」

気付かれていた。その辺りは抜かりないらしい。

望美は心の中で舌打ちしながらも、自分がまだお店の伝票を握りしめていた事に気が付いた。

time9・残されたアイ

二人が出て行った後、一人残されたアイはつまらなさそうにスパゲッティとパフェを頼んだ。ヘルシードリアなんかでこの腹が満たされる訳ない。ケイの前だからと、遠慮していた自分が馬鹿らしくなった。後から上乘せして請求してやる。

「そもそもどうしてあの女まで見張る必要があるのよ」アイはスパゲッティに勢い良くフォークを突き刺しながら呟いた。「さつさとあの女から、マリアだけ連れて帰ればいいじゃない」

ケイは変な所で平和主義者だったのを思い出した。戦場にいる時は情け容赦なく敏腕スナイパーぶりを発揮するのに、一度戦場から戻れば争い事や、賭け事を好まない奇妙な人になる。そこがまたケイのいい所でもあり、悪い所でもあるとアイは考えていた。ケイとの付き合いは長い方だと思っているが、まだまだ分からない事が多い。元々は東側の人間だったと言う噂もあるし、第一、自分はケイの本名を知らない。

アイは勿論コードネームだ。本名を知っているのは自分と、上の連中しか知らない。本名を名乗れるのは自ら死を覚悟した時か、信頼の置けるパートナーが出来た時のみだと教えられてきた。何度かケイに聞き出そうとした事もあったが、今の所自分は信頼出来るパートナーには選ばれて無いらしい。悔しさを噛み締めるようにスパゲッティを食べ終えた。

さつさと1036だけを拘束して、自分達は一週間遊び呆ければいい。何故そうしないのか。

アイは望美の事も気にくわなかった。具体的な理由はないが、ケイ

の関心を持って行かれたのは事実だ。あの女には自分にはない、負の色気が備わっているように感じた。それにまああの美人でもある。……面白くない。本当なら今頃ケイと二人で遊び尽くす予定だったのに。

アイはいらいらしながらパフェも綺麗に食べ終えた。

「お姉さん、可哀想だね」

後ろから突然可哀想と言われて、アイは一瞬殺意に近いものが沸いて振り返った。後ろの席で若い男三人が自分の事を見ている。

「あの男も酷い事するよな、暇なら俺達と遊ぼうよ」

見るからに遊んでいそうな男連中だ。アイは一瞥すると、後ろの席に移動した。

「でしょ？もう頭にきちやう！可哀想なあたしと遊んでよ」

このままホテルに戻るのも癪なので、アイはこの低俗な男共と遊んでやることにした。

ついでに今の食事代も出してもらおうという寸法だ。

「ノツてきたねえ。お姉さん、名前は？」

「アイよ」

「年はいくつ？」

「25」

これくらいのサバ読みは許容範囲だろう。アイは作り笑いを浮かべた。

「若いね、てかその格好すげえな」

アイの隣にいた男が指摘する。アイは自分のスタイルに関しては自身があつた。思わず胸を張る。

「そう？変かしら？」

「いや、何か時代の最先端と言うか、女スパイみたいでカッコよ
な」

うんうん、と他の男も頷いた。なかなか解ってるじゃない、この人達。

アイは未来から来たのよと言いつらしたい衝動を抑えた。

「それよか何処で遊ぶ？カラオケでも行くか？」

「ならラウワン行こうぜ、俺ボウリングもしてえよ」

「ラウワン？」

「よし、決まりだな。アイちゃん行こうぜ」

ラウワンの意味がわからなかったが、とにかく楽しそうだ。アイはわくわくしながら男達の後について行った。

どうしてこんな事になったのだろうか。望美は後ろからぴったりとついて来るケイに、嫌気をさしながら考えていた。

マリアを取り返しに来たのなら、自分から力づくでも取り返せばいい。そんな事くらい容易いだろう。自分まで見張る必要は無いはずだ。もしかして、自分が二人の事を言いふらすのを恐れているのだろうか。いや、それはない。あんな話、誰も信じてはくれないだろうから。

「少し片付けるから待っていてもらえる？逃げたりしないから」

部屋に入るなり急いで鍵をかけ、マリアの部屋を開ける。マリアはやはりゲームをしていた。自分が帰ってきたのが嬉しいのか、笑みをこぼしている。……これもプログラムだと言うのか。先程聞かされた現実味のない事実は、とても信じられなかった。

「作戦変更よ、マリア。今日から友人が泊まりに来ることになったわ。出掛けるのはとりあえず後回し！」

マリアがまとめてくれた荷物を、そのまま押入れに突っ込んだ。マリアがどうすればいいの？とあたふたしている。

「とにかくマリアも会ってくれるかしら。少し挨拶するだけでいいわ」

不安気な顔のマリアを望美は立たせた。顔を見せてあげるだけではないからと言って、リビングのこたつに座らせる。

「でも、嫌な人なんでしょ？」マリアは顔を強ばらせる。「お姉ちゃん大丈夫なの？」

「大丈夫、隙を見て一緒に逃げましょう。それまでは大人しくすることにしたから」

相手の手の内がわからない以上、逃げるのは難しいだろう。未来人だか軍人だか知らないが、とにかく一週間があちらの滞在期間らしい。逃げるなら最終日辺りを狙うのが妥当だ。望美はマリアを返す気など毛頭ない。あの二人に返せば、マリアが殺されてしまうだろう。それだけは絶対にさせない。

マリアの心配を他所に、望美はかつて母親だった自分の威厳を取り戻そうと躍起になっていた。自分は五年前、夫から愛美を守ったのだ。今回もマリアを守りぬいてみせる。そう決意してから玄関のドアを開けた。

「お邪魔します」

ケイが丁寧に靴をしまって、リビングに上がり込む。マリアと目が合った瞬間、ケイは顔を背けた。

「マリア、この人はケイさん。えっと……」

「君の父親の親友だ。いきなり押し入ってすまない」

ケイが一礼した。マリアも慌てて立ち上がり、同じように挨拶する。

「マリアです。あの……私のお父さんの事、ご存知なんですか？」

「ああ。一緒に戦った戦友だ。実に素晴らしい人だよ」

笑顔で話すケイに、マリアは安心の顔を浮かべた。望美も安心する。

「マリア、ちよつとこの人と話しがあるから、部屋に戻って頂戴。ご飯出来たらまた呼ぶから」

はい、とマリアはケイを一瞬見してから自分の部屋に籠った。望美はケイを睨む。

「貴方、マリアの両親の事知っているのね」

「勿論、オリジナルの方の話だが……あの子、自分の名前はわかっていたのか？」

ケイが部屋の向こうを見つめている。望美はマリアにぶら下がっていた金属のタグを見て付けたと説明した。

「そう言えば……1036って、何の数字？」

「ああ、あれは製品番号だ。あの子の前にも人型では無かったが、色々作られた」

「それじゃマリアは物扱いね」望美が冷たい目でケイを見つめた。
「私が拾って良かったわ」

「……とにかく保護してくれてありがとう。感謝するよ」

ケイが握手を求めて手を差し伸べる。望美は曖昧に返事をしてその手を握った。どう言う真意なのだろう。

「少し立ち入った話をしてもいいか？貴方の事も知りたい」

ケイが真剣な表情になったので、望美は思わずドキツとした。変なモビルスーツを着ている以外は、普通に格好いい三十代の男だ。そう言えば自分がしばらく男性との接触を避けていたことに気が付いた。夫と別れて以来、男性と二人きりになるのは初めてかもしれない。望美は警戒した。

「私も貴方の事が知りたいわね。こたつにどうぞ。緑茶は大丈夫かしら？」

ケイが何も言わないので、勝手に二人分の暖かいお茶を用意してやる。望美はケイの反対側に座った。

「そう言えば旦那や、お子さんはいないのか？」

ストレートな質問に、望美は嫌な顔をする。この男に遠慮や配慮はないのか。

「……主人とは五年前に離婚しました。娘が一人いたけど、去年の交通事故で亡くなったわ」

「そうか、悪い事聞いたな。……では、あの子が来る前まではずっと一人で？」

ケイが一人暮らしには大きい2DKの部屋を見渡した。

「ええ。他に行く所も無いですし」望美はお茶を啜る。「貴方は結婚しているの？」

「いや、俺はずっと独り身だ。軍隊に属した頃から、そういう煩わしい感情は持たないようになっている」

「へえ」望美は馬鹿にしたように言った。「だから女性の扱いが下手なのね」

ケイの顔が歪んだ。望美はそれが面白い事のようにもって言うてる。

「アイちゃんって子も可哀想。任務じゃなきゃ、誰も貴方と一緒に居たくないわ」

ケイは望美を睨んだ。望美はそれに動じることなく構えている。

「つまり、何が言いたい」

「私は男の人は信用してないって事。先程聞かされた話も勿論信じてない。非現実的過ぎるもの」

「しかし、事実だ。嘘についてはいない」

「そう。だったら今すぐマリアを連れ帰ったらどうなの？女一人ねじ伏せるのは簡単でしょ？そっちのホテルで監禁でもすればいい話じゃない。どうして私とマリア両方見張るのを選んだのよ」

「……………」

「マリアに、何か特別な思い入れでもあるのかしら」

ケイは望美の質問に鼻で笑った。

「まさか。俺はあの子の好きなようにいさせてあげてもいいと考えたまでだ。手荒なマネは好きじゃない。どの道一週間はこちらにいてはならない。ホテルにしようが、ここにしようがどちらでも構わないさ。一週間は自由にしてやるよ、あの子も、あんたもな」

「……但し見張り付きの範囲で、って事かしら」

「そつだ。下手に遠出されては面倒だ」

望美はケイの表情を見た。相変わらず何を考えているかよくわからない。しかし、あのアイって女以上に、ケイはマリアと何かしらの関係がある。それだけは見えてきた。

「……晩御飯の準備をしてもいいかしら。今日は鍋にするけど、貴方もどう？」

「いや、遠慮しておく。それよりここにある本、読んでもいいか？」

ケイがそう言って指したのは、望美が好きで集めていた探偵物の小説だった。どうぞと言って、望美は先程買ってきた野菜をまな板の上に並べる。警戒しているのか、ケイは望美の出したお茶に一切手を付けなかった。

毒なんか盛ってないわよ、失礼な奴。一瞬だけ睨みつけて、望美は野菜を切ることに専念した。

time 11 アイの過去デビュー

「やった！またストライク！」

いえーいと、アイは振り返って男とハイタッチをした。最初はピンを倒すだけなんてつまらないと思ったが、これが案外やってみると面白い。もう三ゲーム目に突入していた。

「アイちゃんすごいな、本当に初心者かよ」

チームを組んだ男もびっくりしている。それもそのはず、アイは十ポンドの球を軽々と持ち上げ、次々とストライクを決めているのだった。

「コツが掴めれば簡単ね。ストライクが決まると気持ちいいわ」

すっかり女王様気分で椅子に座る。この時代の遊びも悪く無いわね、そんな感じでボウリング場を見渡した。

「これ終わったらカラオケに行こうぜ。俺、アイちゃんの歌声も聞きたいな」

男がさり気無く肩に手を回す。アイは殴り飛ばそうかと思ったが、こんな所で騒ぎを起こしてはいけない。冷静に手を払いのけ、トイレに行くふりをした。

「ちょっと抜けるわね」

もうこの男共はいいや。アイは興奮めして店内を後にした。相変わ

らず外は寒い。身震いしてダッフルコートを置いてきた事に気が付いたが、今更取りに帰るわけにも行かない。また買えばいいや。

アイは周囲を見渡した。そう言えばここは何処なのだろう。勝手について行ったのはいいが、帰り方が分からなかった。とりあえずケイに連絡してみようと、小型のイヤホンを取り出して電話をする。電源が入っておりません、と機械女の声がした。

「ケイの馬鹿、電源切ってるんじゃないわよ！」

またしてもケイに怒りが沸く。幾ら何でも自分に冷た過ぎやしないか。涙目を空に向けて鎮める。勝手にしろって事かよ、全く！

アイはいつの間にか商店街が連なる通りを歩いていて、ホテルに戻ろうにも、自分がどっちから来たのか分からない。先程から感じる人の目線にも嫌気がさしていた。……そんなに自分の格好が浮いているのだろうか。やっぱりダッフルコートは必要だったらしい。というか人多過ぎ。完璧迷子状態だった。

「はあ、こう言う場合、どうするんだっけ」

歩くのも面倒になり、アイは木の側に座り込んだ。そうだと思い出して、懐からホテルの鍵を取り出す。そこには京都ロイヤルシティホテルと刻まれていた。

そうよ、タクシーでここまで送ってもらえばいいんだわ。アイは立ち上がった大きな通りに出た。しかし、タクシーを呼べなかった。先程の男三人が、こちらに向かって歩いているのが見えたからだ。

「げーっ」

アイは顔を歪めると、慌てて来た道を戻った。まあ、ホテルへ戻るのの後からでもいいや。汗をかいたのでシャワーを浴びたい気持ちもあつたが、ホテルに帰った所でどうしようも無いことに気付いた。もうちょっと遊んでからでもいいだろう。アイがにんまりした瞬間、後ろから肩を叩かれた。

「君、面白い格好しているね。ちょっと写真撮らせてもらってもいいかな」

三十代半ばだろうか。割りと声がハスキーで、がっちりとした体型の男性に声をかけられた。大きなリュックを背負い、手にはカメラを持っている。アイは何ですかと男を睨みつけた。

「ちょっと撮るだけだから。ね、いいでしょ？」

アイの許可無しに、勝手にかちやかちやとシャッターを切り始める。

「いいねえ、足が長いからシルエットは素晴らしいよ。そのぴっちりとした服がとても似合ってる」

ほんと？とアイは思わず聞き返した。褒められるので悪い気はしない。アイは次々とサービシヨットを見せ付けた。通行人が何事かと二人に群がり始め、中には携帯で写真を撮り出す輩もいる。大勢の人に注目されて、アイは有頂天になった。

「君、仕事は何してるの？もしかしてモデルとかかな」

男がシャッターを切りながら尋ねてくる。アイは無視してカメラの前でポーズを決め続けた。

「あ、アイちゃんこんな所にいた！」

人の群れをかき分けて三人組が現れた。先程アイが遊んでやった連中だ。まずい、面倒な事になったぞ。アイはカメラの男を盾にして隠れた。

「ほら、忘れ物だぜ。トイレにしては遅すぎるから、心配したよ」

アイの忘れたダッフルコートが帰ってきた。それだけを受け取ると、アイはその場から逃げようとする。

「どこ行くだよ、まだ遊び足りてねえぞ、こっちは！」

「まあまあ、アイちゃんは見えての通りモデル活動で忙しいんだ。君たちは遊べただけでも感謝しなきゃいけないよ」

カメラの男が割って入ってきた。何だよ、このおっさんという目で三人組が見下す。

「俺達はアイちゃんと話してるんだ。そこ退けよ、おっさん」

「退かないね。この子は大事な商品だ。傷つけたら、君たちには一生払えない額を弁償してもらおうよ」

ほらほら、と言ってカメラの男が指をさす。その先には巡回している警察官がいた。ちっと、男共が去って行く。アイの周りを取り囲んでいた野次馬も、つまらなさそうに解散し始めた。

「君、男をからかうのもいい加減にしないと、その内痛い目に合うよ」

男共を見送りながら説教をたれる。アイはふん、とそっぽを向いた。

「その時はあたしが蹴り飛ばすわよ、庇ってくれてどうも」

ダブルコートを着直して、アイもその場を後にしようとした。つままない、さつさと暑いシャワーでも浴びて寝てしまおう。

「待つて、アイちゃんはモデルに興味ないかな？」

カメラの男がまた肩を叩いた。アイは不機嫌そうに振り返る。

「いやあ、君みたいな美女に出会えてよかったよ。僕の名前は永市京介、フリーのカメラマンをしているんだ。よかったらまた連絡してよ」

永市が名刺を差し出す。アイは考えておくわと喜んで受け取った。案外過去ではモテるのね、あたし。

軍隊で特攻部隊に属すアイは、自分の強さを他の男共も知っているのか、寄付いても来やしなかった。悪い気は全然しない。むしろアイにとって喜ばしい出来事だった。帰ったらケイに自慢してやろう。その証拠に受け取っただけの名刺だった。

「よろしければこれから食事なんてどうですか？アイちゃんの事も色々聞かせてくださいよ」

永市の低姿勢で頼み込む姿に、アイは好感を覚えた。結構アイ好みの身体をしている。それに顔もまあまあだ。過去で禁断の恋愛つても悪くはない、むしろそんな話は聞いたこともない。

充分過去を楽しむぞ！と新たに意気込んだアイだった。

time 12・ケイと鍋

「……おかしいな、アイと連絡が取れない」

ケイは困ったように何度も電話をかけていた。目の前には鍋が溢れんばかりに煮えたぎっているというのに。

望美さんがせっかくだからアイも呼んで四人で食べようと言い出したのはいいが、肝心のアイとの連絡がつかなかった。

「貴方が冷たくあしらうからよ。あー可哀想！」

こう言う時に限って女は互いに結束する。身勝手な生き物だとケイは横目で望美を見た。何だかんだで結局自分も食べる事になっている。困っている人をほおって置けない質なのだろう。

ケイは笑って自分の分をよそい始めた。鍋も悪くないな。

「アイちゃんとは知り合って長いのかしら」

望美がマリアの分をよそいながら尋ねてきた。

「アイの事は入隊時から知っている。二人での任務はこれが初めてだが、アイは調子に乗るから厄介だ」

そんな感じがするわ、と望美も賛成した。アイは戦場においては確かに強い。空手や、格闘技など総合的に武術を心得ていて、男共を簡単にねじ伏せる。そう言えば象を蹴り殺した、など妙な噂が出回っていた事を思い出した。

「でもちよつと心配よ。一度も繋がらないの？」

ケイはもう一度だけかけてみた。しかし、繋がりそうにもない。

「やっぱり怒っているのね。明日にでも謝りなさいよ、わかった？」

望美が強く言ってくるので、ケイは適当に返事を返した。マリアは一生懸命鍋の豆腐を箸でつついている。ここは平和だな、とケイはため息をついた。

ケイの任務は脱走したマリアを未来に帰す事だ。しかしもう一つ、アイにも秘密で単独任務もあった。実はマリアをここで預けているのもそういう理由だ。ケイはアイも拘束しておく必要があった。この女には悪いが、しばらく厄介になるしかない。

明日はこの街を散策してみようとケイは考えていた。自分もこの街に馴染む必要があるだろう。その前に服も買わなくては。やる事は色々ありそうだった。

「ご飯も炊けたけど、どう？」

「悪いな、頂くよ」

戦争を知らない人が、ここにはいる。それだけでも奇妙だとケイは思った。こんな平和な時代に来るとは思ってもいなかった事だけに、未来ではどうして我々は争っているのだろうと疑問に陥る。同じ種族なのに東と西で別れ、今でも紛争を繰り返している。ケイは箸を進めながら、一人難しい顔をした。

「おじさん、怖いよ」

マリアがそんな事を言うので、望美が笑い出した。

「何をそんなに張りつめているのよ。せっかくだから楽しく食べましょ」

「……ああ、そうだな」

この望美と言う女も、ケイは信用出来ずにいた。自分の話を信じていないようだが、諦めたようにこうして迎え入れている。

……わからない。アイも何を考えているのか分からない奴だが、この女の方が更に上を行っているのは確かだった。

「なあ、あんたは何処まで信じているんだ、俺達の事」

「何の事？」

望美は目でマリアを合図した。マリアがいるから、その話は止めると言いたいのだろう。

面倒だ。ケイは気にせず話を続けた。

「未来から来た事は信じているのか？」

「……そうね。とりあえず信じるとしたら、そこだけかしら。兵器の話は信じてないわ」

目も合さず望美は答える。マリアに関しては信じたくないという事なのだろう。ケイはそれ以上聞かなかった。ここに預けた事を後悔するような事が起きなければいいのだが。

夕食後、ケイが電話をかけるとアイと繋がった。第一声に文句が飛び交う。

『ケイの馬鹿！あたしを置いて行くななんて酷いじゃない！馬鹿っ』

反論しようとしたが、望美に謝れと言われた事を思い出して止めた。

「……悪かった、すまない。今何処にいる」

『ホテルよ。聞いて、ケイ。あたしスカウトされちゃったのよ』

「スカウト？」

『モデルよモデル！ねえ、一回だけやってみてもいいかしら。どう思う？』

どうと言われても困る。アイはアイなりに遊んでいた事だけは伝わった。

「とにかく明日の八時に交代だ。いいな、連絡は何時でも取れるようにしておけ」

『何よ、自分だって電源切ってたじゃないの。ふーんだ』

それからベーっという声も聞こえて電話は途絶えた。アイの奴、ちゃんと時間通りに来るだろうな。

それにしても明日から忙しくなるだろう。自分は、ある男を見つけなければならぬ。名前と出身地だけで一人の男を見つけるのは大

変だ。到底見つかりっこないと踏んでいるが、その時はその時なのかも知れない。アイと比べて時間はあるのだが、そうゆっくりはしていられない。未来がかかっている。足元に隠してある拳銃を手入れしようとして、車に材料を置いてきたのを思い出した。

ケイは自分の愚かさに笑った。すっかり気が緩んでいるではないか。まずはホテルに戻ろう、話はそれからだ。

二人が寝静まるのを確認してから、ケイも眠りについた。

time 13 交代

翌日、八時ちようどにアイが尋ねてきた。ケイはとつくの昔に起きていたらしく、小説に読み耽っている。望美は今起きたばかりの頭を揺すり起こして、アイを招き入れた。

「おはようございます!」

昨日とは打って変わっての元気の良さに、望美は驚いた。まるで別人だ。何かあったのだろう。

「おはよう……アイちゃんは偉い元気ね」

「まあね、おばさん寝癖が酷いわよ」

またしてもおばさん呼ばわりされ、望美はど突いたろうかと睨みつけた。そんな目線もお構いなしにアイがリビングに入る。

「ケイ、交代に来たわよ。……何読んでるの?」

小説、と一瞬だけ顔を上げてケイはまた文字に目線を落とす。アイがホテルの鍵を投げつけてやると、ケイはそれを見ずに鍵を受け取る。

「ケイ、あたし行きたい所が出来ただけど、三人で行ったら見張りも大丈夫よね?」

「三人で?」

「そう。あたしと、望美さんと、マリアちゃんの三人で。ね、いいでしょ？」

「……何処に行くんだ」

「ショッピングよ。この時代の服も欲しいと思って。こんな格好じゃ、目立って恥ずかしいわ」

アイが一回転する。満更でも無いように見えるが、ケイは昨日言っていたモデルとも関係しているのだろうと踏んだ。が、それを口に出す事はしなかった。

「と言う事で望美さん、お洋服選び手伝って下さい。ね、いいでしょ？」

ケイの前では名前と呼ぶのか。随分いい態度じゃないの。望美は目覚めのコーヒーを入れ始めた。

「じゃ、交代だ。小中さん、悪いがアイの事を頼む」

ケイはそれだけを告げてさっさと出て行ってしまった。

アイがケイを見送った後、きびすを返すように望美に問いたです。

「昨日は何も無かったのよね？……まあ、何かあっても困るけど」

アイちゃんはケイの事が好きなのか。望美はわかり易いアイに、笑い出しそうになった。

「何も無いわよ。ただ一緒に夕食を食べただけ。それだけよ」

「ふーん。あ、この辺りで可愛い洋服の店、ありますか？」

「そうねえ……アイちゃんくらいの若者だったら、河原町とか、その辺りに行ったら何かあるんじゃない？」

「じゃあそこに連れてって。お願い、望美さん」

「まだお店自体が開いてないわよ。どうしたのよ、突然。何かあったの？」

待ってましたと言わんばかりにアイが胸を張る。自分の身体を魅せつけているのかと望美が気付いたのは、数秒経ってからだった。

「あたし、昨日スカウトされちゃった！」

「スカウト？」

「そう、モデルの！」アイが胸ポケットから堂々と名刺を取り出した。「見て、名刺まで貰って、昨日一緒に食事したのよ！」

興奮気味にアイが名刺を見せびらかす。望美はその名刺を見た瞬間、アイから奪っていきなり破り捨てた。

「ちょっと何するのよ、酷い！」

「あんた騙されてるのよ。その男、ろくなカメラマンじゃないわ」

永市京介。まさかこんな所で名前を見るとは思いもしなかった。まだこの近くにいたのか。望美は倒れそうになる身体を堪えるため、両足で踏ん張る。

「え、永市さんと知り合いだったの？」

「……昔ちよつとね」

望美は顔を曇らせて、永市の姿を思い出した。自分の元旦那。仕事を理由に愛美や自分をほったらかして、モデルの子と浮気した最低な男。今思い返したただけでも腹が立ってくるのだった。

望美は怒りを鎮めようとコーヒーを啜った。まずい。

「そんなあ」アイが脱力したようにその場に頂垂れる。「一回モデルもやってみたかったのになあ」

「やめときなさいよ。あんな撮られるだけの仕事なんて」

「でもでもっ、服買うのはいいでしょ？この格好じゃ街歩きの恥ずかしいわ」

アイが必死で訴えた。確かに今の時代には不釣合いの格好をしている。

「私の服じゃ駄目なの？」

「嫌よ、趣味が合わないわ！」

アイの趣味がどんなのか知らないが、構わず否定してくるアイに怒りが沸く。望美はもう一度コーヒーを啜った。

「……じゃあ買物には行きましょう。それでいい？」

「はい、望美さんが分かってくれる人で良かった！」

けろっとした表情でアイが立ち上がる。全く、いい性格しているわ。望美は諦めたように出掛ける準備をし始めた。

time 14・未来について

二人が未来から来た事を、望美は認めつつあった。おかしな道具も持っていたし、変な格好もしている。未来人だから、それでいいとする。百歩譲って、マリアも未来から来たと認める事にしよう。しかし、望美はマリアが兵器だとは認められなかった。いや、認められなかった。

プログラムとは思えない感情。優しさ。それらを兼ね備えているマリアは人間そのものだった。いや、クローンが元らしいのだから人間か。未来の基準はどうだか知らないが、この時代を生きている自分にとって、マリアは人間だ。人間を、しかもこんな子供を殺すような未来に帰す訳にはいかない。

望美はアイから未来の情報を得られないものかと考えていた。ケイは駄目だ、逆に詮索されてしまうだろう。

「ねえ、アイちゃん。待っているのも暇でしょ？未来の話聞かせてよ」

化粧をしながら、こたつでテレビを見ているアイに話しかけた。

「未来の？」

「一五〇年後の話なんてそうそう聞けるものじゃないわ。アイちゃんは未来でも大活躍なんでしょ？」

「当たり前じゃない、特攻部隊の紅一点とはあたしの事よ」

「じゃあ毎日鍛えているのね、道理でスタイルがいいと思っただわ」

「まあね」アイはご機嫌の様子で振り返った。「望美さんもそこそこいけてると思うよ」

「ありがとう」「望美はお世辞を受け取った。「そう言えばアイちゃんも結婚してるの?」

「ううん、独身。彼氏もない」

「うそ、勿体無い。アイちゃん程の美貌の持ち主だったら、男なんて幾らでも寄ってくるでしょ?」

「それがみんな逃げちゃうの、あたしが怖いみたいで。失礼な話よね」

アイが怒ってこたつを叩いた。男が寄りたがらない理由も何となく分かる。

「でもケイさんの事、好きなんですよ?」

ケイの名前を出した途端、アイは顔を赤くした。

「すっ好きと言うつか……そう、憧れよ、憧れ!ケイは何でも出来るからっ」

「へえ、ケイさんも特攻部隊の人?」

「ううん、ケイは暗殺部隊。凄いスナイパーなんだから」

暗殺部隊……なるほど、ケイの胡散臭い感じにぴったりだ。

「こつちには二人だけで？」

「そうよ。あーこんなおばさん見張る予定じゃなかったのになあ」

アイがそう言っただけで横になる。

「おばさんで悪かったね。そう言えばケイさんも独身よね、アイちゃん今がチャンスなんじゃない？」

「そうなんだよねーって違う！憧れてるだけだから！」

それからアイの弱点を突いて望美は楽しんだ。何だかんだ言ってケイの事が気になるらしい。からかうのはこの辺にしておこう。

「ねえ、ケイとマリアはどういう関係だったの？」

「……どうしてそんな事聞くのよ」

急にアイの表情が険しくなった。

「昨日ケイが、マリアの事を特別扱いしているように見えて」

「そりゃそうよ。あの子は西日本政府の切札よ？本来嚴重に管理してあった物が脱走、政府の一大事。まさか過去に逃げ込んでいるとは思わなかったけど」

物、か。未来人にとってマリアは物らしい。生きていた時代も違うため、考え方の違いは仕方ないにしろ、物扱いはあんまりではないか。

「未来の……戦争は、そんなに酷いの？」

「酷いわよ。ここだって、一五〇年後には無くなってんだから。日本が東と西に別れてからますますヒートアップ」アイが肩をすくめた。「同じ日本人同士の殺し合いが止まらないの」

「……………どうして東と西で別れたのかしら」

「分断させられたのよ、他国に。だから余計に腹がたつわ。統一しようにも、東軍のトップ、宮本がクーデターを起こしちゃって、今や東政府は宮本が実権を握ってる。その宮本が自分達だけ、つまり東側の人間だけで新たに国を起こそうとしてるの」

「その宮本って人が、マリアの親なのね」

「そういう事。宮本の思想は危険よ、だからあたし達西側の人間が彼を殺そうと躍起になってるって訳」

「そう……」

その先どう答えて良いのか分からず、言葉を濁す。どうやら未来の日本では、東側を宮本という人が支配しているらしい。マリアがその宮本の娘になりすまし、彼もろとも敵地を壊滅させるのが西側の計画……。

望美はマリアを起こそうと、部屋を開けた。おはようと、眠たそうに声を発する。普通の女の子だ。小学生だ。でも、兵器だ。望美は複雑な気持ちでマリアの顔を覗いた。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

不思議そうに望美を見つめる。マリアこそ、どうしてそんな顔するの。何故、自分の元に訪れたのか。不思議でたまらなかった。止まっていた筈の時の歯車が、ここ数日で一気に回り始めている。何かの不安に急ぎ立てられるかのように、望美はマリアを叩き起した。

「今日はお出かけするわよ。早く起きて着替えなさい」

トイレに行こうとしたマリアと、アイの視線がぶつかった。マリアが怪訝な顔をする。そう言えばアイの事を紹介していなかった。

「ああ、この子はアイちゃん。私の友達よ。今日はこのお姉さんと三人でお買い物よ」

「マリアちゃんよろしく！」

アイが楽しそうに手を上げた。マリアもよろしくと言って頷く。

「マリアちゃんの服もお姉さんが買ってあげるからね」そう言って諭吉を見せびらかす。「今日は楽しく行こうよ」

望美は呆れた。マリアも子供だが、アイも子供だ。これから二人の子供の世話をしなくてはならぬ。

望美はアイに金をしまつよう言いつけた。

time 15・お買い物

ケイはすぐさまホテルに戻り、シャワーを浴びてから地下の駐車場に向かった。

青い球を押し付けて車の鍵を開ける。車を開けられるのは自分しかないが、ケイは一応車中をチェックする。大丈夫そうだ。

懐の現金を確認し、車を発進させる。まずはあの男の実家に行ってみよう。ケイは座標軸を設定しようと手帳を開いた。本当はこんな原始的な物を使いたくはないが、移転する際は強力な磁場が発生するため機械類は一切持ち込み出来ない。ケイが好んで使用するレーザー銃も持ち込み不可だ。あれは綺麗に人体が切れるので楽なのだ。

時刻を確認する。九時三七分。そろそろ店も開くだろう。ケイは洋服を揃えに駅前のモールへと車を誘導させた。

モールの中はやたら騒がしかった。赤字に貼られたセルの文字がけばけばしい。ケイはどんな服を買おうか悩んで、ふとポスターの前に立ち止まった。これは確かスーツと呼ばれる、この時代の働く男が来ている格好だ。このモールへ来る時も、このような格好をした男を多数見てきた。ポスターの男もかっこ良く着こなしている。これにしよう。ケイはその場でスーツを着て行くことにした。今着ているロングコートにも、よく似合うだろう。

女性の店員にある程度つくろって貰い、ネクタイだけ結んでもらうと、お礼だと言って手を取りそこに口付けした。女性が頬を赤くする。これで女に優しくした事になるだろう。昨日女性の扱いが下手だと望美に指摘されたのを、実は密かに気にしていた。ケイは一人満足すると、先程まで着ていたモバイルスーツを抱えてモールを後に

した。

河原町は相変わらず沢山の人で賑わっていた。年末セール真っ最中らしく、あちこちから客引きの声が上がる。アイが面白がって一々それに反応するので、望美達は何度も足止めを食らった。

「カメラなんか関係無いでしょうが」

「えー、でもこの時代の物見るだけでも面白いからさあ」

アイが忙しくなくあちこちに目を配らせている。それ程までに過去が、この時代が珍しい物なのだろうか。アイが今朝、未来に京都は無いと言っていた事を思い出した。

「ねえ、未来の京都はどんな感じなの？」

「どんな感じって言われても……」アイが今度は言葉を選ぶように目を配らせる。「何も無いんだよ、とにかく。瓦礫の山ばかりね」

望美は所狭しと店が連なる商店街を見渡した。一五〇年後にはここも瓦礫の山なのか。あまりにも想像しがたい世界に、望美は不思議な気持ちになった。自分も過去に行ったら、アイの気持ちも理解出来るのだろうか。

一五〇年前と言ったら、年号で言うと一八六〇年。あの有名なペリーが来て日本は幕末だった頃の時代になる。それを考えると今の自分を取り巻く環境が、文明がいかに不可解だと納得出来る節がある。

ふと気がつくとマリアがいない。望美が慌てて振り向くと、中古のゲーム屋でマリアが物欲しそうに棚を眺めていた。服よりゲームの方がよっぽど欲しいらしい。愛美もそうだった。おしゃれに目覚めるのにはまだ早い年頃だろう。マリアに近づくと、欲しい物があったら買ってあげるわよと囁いた。

time 16・再会

夕方になると、望美はアイに散々連れまわされて買った服のショツブ袋と、マリアに買ってあげたゲームソフトを幾つもぶら下げている。そろそろ帰ろうよと示唆した望美だが、アイが唐突にもう一件行きたい所があると言いだした。

「京都駅に行ってもいいかな、お願いっ！」

駅や、地下街にも服屋があった事を思い出して望美はうんざりした。

「そんなに買ってどうするのよ。一週間しかこっちはいないんでしょ？」

「今度は服じゃないの、いいから連れてって」

アイの急かすような態度に望美は不審を覚えたが、あと一時間だけよと言って仕方なく電車に乗る。こっちは散々歩き疲れて足がくたくたと言つのに、マリアは平気らしくしゃんと背筋を伸ばしてついて来る。

兵器だから平気なのか。いや、今のはつまらなかったな。望美は微笑を浮かべ、今の思考を即座に打ち消した。

京都駅も人混みで溢れかえっていた。帰省時期もあり、大きなキャリーバックや家族連れがよく目立つ。

アイはトイレで先程買った服をもう着こなしていた。スレンダーなアイにぴったりの黒のミニドレスに、首元にはラビットファー。そしてエナメルのロングブーツ。昨日まで着ていたダツフルコートを脱ぎ捨て、新たにシルバーのダウンジャケットを羽織っていた。

「どう？変じゃないかしら、あたし。この時代に似合ってる？」

くるりとその場で一回転するアイに、望美はよくお似合いだよと言って笑った。元々スタイル自体がいいのだ、何を着ても似合うはずだ。望美はアイに対して嫉妬の感情は芽生えなかった。むしろ可愛い妹だと思っているくらいだ。

「駅の中央改札って、どっち？」

こっちだよと言って望美は案内した。マリアが人混みに紛れないようにと手を引いてやる。外に出ると冷たい風が容赦なく三人を撫で付けた。頬がひりひりと痛む。

きよるきよると辺りを見回すアイの姿は、まるで誰かを探しているかのようだった。望美は嫌な予感がした。

「ちょっと、誰か待っている人でもいるの？」

「そうそう、そうなんだよね」

曖昧な返事をしてアイが視線を逸らす。望美は今朝のアイのテンションと、破り捨てた名刺の名前を思い出した。

早くここから逃げた方がいい。望美がマリアの手を引いて行こうとした途端、聞き覚えのあるハスキーな声があった。

「アイちゃん、お待ちせ」

小さなウエストポーチに、大きなカメラを首から吊るした永市がいた。アイのすぐ後ろにいた望美にも気がついて顔を向ける。

「あれ……望美……」

望美はしまったという顔と、同時にどう対応して良いのか分からない複雑な面持ちで目を伏せた。やっぱりこの男を待っていたのか。すぐさま怒りをアイに向ける。

「アイちゃん、これはどう言うことかしら。騙されたんだって、説明したでしょ」

「あはは、だって昨日ここでまた落ち合っつて、約束しちゃったから……その……」

アイが気まずいように後ずさりする。望美はマリアの手を離して、代わりにアイの腕を掴んだ。無理矢理永市からアイを遠ざける。

「ちょっとこっちに来なさい、マリアもおいで」

人混みを避け、望美は永市の姿が見えないところにまで二人を連れ込んだ。

「痛い、痛いよ。離してよ!」

アイが抵抗する。望美はその手を離して言いたくない言葉を口にした。

「あの男が、私の元旦那なのよ」

「えーっ!」

アイが叫ぶ。マリアも驚いて顔を望美の方に向けた。

「もう、だから嫌なのよ！アイちゃんにも会わせなくなかったのに」
向こうに一人居るはずの永市の方を見る。アイも口を開けて永市のいる方に目をやった。

「そんなの、全然知らなかった！」

「私も言いたくなかったのよ！」

ふと顔を上げると、いつからそこに居たのか永市が立っていた。

「久しぶりだね、望美」

「望美って呼ばないで！」望美は永市を睨んだ。「あんた、本当に撮影だけが目的なんでしょうね」

「本当だよ。昨日街でアイちゃんと会って、普段の服装も撮りたいって僕がお願いしたんだ。それで今日また会う約束をした。お前の知り合いだとは知らなかったんだ」

望美と永市はお互い無言で見つめ合う。

「望美さんごめんなさいっ！まさかそんな関係だったとは思わなくて」アイが両手を合わせて頭を下げた。「その、モデルの仕事も一回してみたかったの！」

二人を見比べた望美は、諦めたように肩をすくめた。自分もアイに永市の事を言わなかったのだ。こうなったのも仕方が無い。

永市の視界がマリアを捕らえた。マリアは三人の光景を心配そうに見つめている。

「お前、その子は誰だ。愛美では無いだろう」

「……妹よ。今はそういう事になってるの」

「一人っ子のお前が？随分年の離れた妹さんだなあ」

そう言つて鼻で笑う。望美はこの男にこれ以上関わらまい、とマリアの手を引く。

「先に帰るわ、アイちゃん。見張りもここで終り。あんまり遅くならない内に帰つておいでよ」望美は振り返つて一言付け加えた。「でないと、ケイにはらすからね」

「望美さん、本当にごめんなさい。用事が終わつたらすぐに帰るからあ」

叫ぶアイを無視して、望美はマリアを連れてさっさと階段を上る。マリアが振り返つて何か言いたそうな顔をした。

「お姉ちゃん、アイさん置いてつていいの？」

「いいのよ、これ以上わがままに付き合う義理はないわ。マリアも早く帰ってゲームしたいでしょ」

「うん！」

「じゃあ早く帰りましょ」

望美は永市の変わらない姿に苛立を覚えた。自分は一年間、愛美の事で苦しんだと言うのに連絡は愚か、望美が一ヶ月入院している時間でさえ一度も見舞いに来やしなかった。別れたから関係ない、死んだからどうしようもない。そういう奴だったのを思い出して不快になった。

time 17・愛しい女

待ち合わせの場所に着いた永市は、自分の目を見張った。そこにはかつて別れたはずの妻、望美がいたからだ。

「あれ……望美……」

あれから五年程の歳月が過ぎたが、永市はすぐに望美だと分かった。望美は綺麗な女になっていた。化粧とか、外見の綺麗ではない。洗礼された何か、哀愁を漂わす何か、望美の空気にまわりついている。自分との離婚や、何より愛美を失った悲しさが望美をより美しい女性へと変貌させていた。あの目、悲しみと憎しみが深く刻まれた瞳。愛おしく思えた。ぼさぼさで手入れの行き届いていない、ミドルの髪も、素晴らしく思えた。自分と望美は数秒間、いや、もっと長い間見つめ合っていた気がする。

撮りたい、この女を撮りたい。目の前のスレンダーな女よりも、かつて自分の女だった望美の方に二つの眼球は動いていた。しかし、望美は自分を拒絶する。それもそうだろう、ずっと望美を放つたらかしにしてきたのだから。

望美と出会ったのは大学生の時だった。気の合う友人。連れ。お互いに何となく付き合いだし、そして結婚した。愛美まで生まれ、順調に行っていた筈だった。望美はよく気が効くし、家事も卒なくこなす。いい妻だった。しかし自分は、望美が何でもやってくれるのをいい事に彷徨い始めた。仕事を理由に家に帰らない事が多くなった。実際カメラマンという職業柄、あちこちの地方に出向いて撮影しなければならぬ。仕事を理由に、望美から逃げた。望美の何がいけなかったとかではない。自分が一つのところに留まることが出

来なかったのだ。

永市は自由になりたかった。たぶん今でもそうだ。だからあてもなくうろろして、いい商品に巡り会えばシャッターを切る。父親という職業には向いていなかった、それだけの話だ。

「永市さん、ごめんなさい。あたしもそんなつもりで望美さん連れてきたんじゃない……」

アイが寒そうに身体を震わせながら弁解する。永市はもういいよと笑って誤魔化した。何せ君は、僕に最高の商品を提供してくれたんだから。

「今日は何処で撮ろうかな。アイちゃんは何処が行きたい所、ある？」

「わかんない、あたし京都来たの初めてだから」

永市がそうなの、と驚く。ではこの子は何処で望美と知り合ったのだ。望美は愛美が亡くなって以来、おそらく塞ぎ込んでいたはずだ。顔にそう書いてあった。そう言えばあの女の子は誰だ。望美に妹はいないし、聞いたこともない。親戚にもいなかったはずだ、愛美のようで、愛美でない女の子なんか。

「とにかく寒いから中に入ろう。お腹は空いてるかな？」

「少し。今日沢山歩いたから」

アイが遠慮がちに言う。後ろめたさがありありと顔に表示されていた。

「そう。じゃあ何食べたい？パスタ？それともハンバーグかなあ」

「……パスタ。あの、やっぱり今日は撮影止めにしませんか？会ってすぐに申し訳ないですけど」

アイがそわそわした面持ちで永市に訴える。だが、ここで返してはつまらない。望美の事、あの女の子の事を知りたい。永市は食事だけさせてよ、と半ば強引にアイを連れて行った。

夕食時らしく店内は混雑していた。二人掛けの席が空くのを待つてから、永市とアイは腰を下ろした。

「そんなに落ち込む必要はないよ。たまたま街で会った、それだけだ」メニューを開きながら、永市は目を伏せているアイに言った。

「とりあえず何を食べるか決めた？」

「はい……はあ、望美さん怒ってるよなあ」

アイが上の空で、熱いおしぼりで手を温める。永市は注文してから、アイに尋ねた。

「望美とは知り合いだったんだね」

意外なことを聞かれたようにアイが目を見開いた。表情が固い。上手くかわす言葉を探しているな、と永市は判断した。

「まあ……。今は居候させてもらっているというか何というか……」

人は嘘を付く時、目を逸らす者が多い。アイもその内の一人だった。元々嘘を付けない質なのだろう。

「居候？……そうか、それじゃ怒らしたら、家に入れてもらえないなあ」

大袈裟に永市がふんぞり返る。

「えーっ、それじゃケイにも怒られちゃう」

アイがあたふたと店内を見渡した。ケイとは誰なのだろうか。まあ誰でもいいか、自分は望美さえ撮ればそれでいい。

「あの女の子も居候しているの？」

「……うん、今は三人で住んでるよ」

望美と小学生の女の子に、若いアイちゃん。どう言う組み合わせで居候に至ったのだろうか。面白そうだ、探ってみよう。

「それにしても接点が分からないなあ」

「接点？」

「望美とアイちゃんの接点さ」

アイがうーんと首を傾げている。自分でも分からないと言った感じに。

「たまたま、ですよ」

曖昧な返事だ。永市はどうしたものかと水を含む。アイはこれ以上しゃべってはくれないだろう。

それよりも望美だ。今の望美を撮影しなくては。先程の顔を思い出すだけでも身震いがする。何故だ、昔の望美も何回か撮影した事があつた。でも、今の望美はその時以上に価値のある女になった。勿体無い事したな、と永市は心の中で呟いた。

「撮影明日にしてもいいけどさ、その代わり望美も連れてくること、出来ないかな？」

「えーっ、望美さんも撮るんですか？」

アイが困った表情で、注文したスパゲティを食べる手を止めた。

「そんなにまずい事、言つたかな？」

「まずいよ、望美さん協力してくれそうもないよ」

「そこを何とかしてくれるのが、アイちゃんじゃないの」

「そんなあ」アイがクルクルとフォークを回す。「……一応聞いてみるけど」

「ありがとう。今日はこれ食べたなら帰ろう、撮影場所は僕が決めておくよ。明日の十時くらいに、また京都駅前でいいかな」

アイと明日の打ち合わせを適当にすると、永市はアイと別れるふりをして、アイを後ろから尾行し始めた。家はつきとめておいた方が

いいだろう。永市はついでにアイの後ろ姿を何枚か撮りながら後を追った。

ケイは車を飛ばして、京都のかなり北の方に来ていた。この辺りは雪が積もっている。向かいにある山はスキー場になっているらしく、リフトらしき乗り物がうつすらと見えた。

地図で現在地を確認する。これ以上車で移動すると厄介な事になりそう。ケイは一本道の真ん中で車を停めると、中から屋敷の様子を伺う。スコープで覗くと老夫婦がこたつでのんびりとテレビを見ているようだった。

ここにはいないか。ケイは手帳を見開いて、男の年齢を逆算し始める。……今は三〇代半ばだ。念の為周囲にも若い男がいないかどうか一々車を降りて見て回ったが、結果は残念だった。

ケイは男が来た痕跡が無いのを確認すると、車をバツクし始める。あの男は実家に戻ってないらしい。この京都に戻って来ているのかさえ不安だが、また出直すしかないだろう。こんな調子で果たして自分はあの男を、宮本の祖先を探し当てるなんて事が出来るのだろうか。いや、日本の未来、元い自分の未来がかかっているのだ。自分の手で決着をつけなければならぬ。

明日は自分が見張りの番だ、それまでに出来る事はしておこう。急にアイの様子心配になったケイは、小型イヤホンを取り出した。

「もしもし、俺だ。まだ買物しているのか」

『あ、ケイ……そうなの、今から自宅に帰る所。もう歩き疲れちゃったわ』

ケイは急いでグラフを表示させた。マリアの座標軸はとっくに望美の家の辺りで止まっている。アイは今一人なのか、何をしているん

だ。

「アイ、今お前一人だろう」

『えっ……うん。ごめんなさい、望美さんを怒らしちゃってちょっと……』

「まあいい、ちゃんと家にはいるようだ。お前も早く帰って見張っておけ。いいな」

『……了解。ケイは今、何処にいるの？』

「比叡山のふもとだ。あちこち観光しておこうと思ってな。……自然って凄いな」

ハンドル操作をしながら、ケイは山を見上げた。こんなに緑が、山が残されている。その不思議さにケイは未来と比較していた。

『へえ、街で遊んでるのかと思ったよ。観光なんて年寄り臭いじゃない』

「そうか？結構面白いぞ。また明日の朝八時に交代だ。……何か変な動きはないか？」

アイがイヤホンの向こうでうーんと唸ってから、ないよときっぱり言いのけた。

「あまりあの女を信用しない方がいい。過去では、我々はお呼びではないのだから」

そう忠告してケイはイヤホンを切った。さて、これからどうしようか。とにかくここは何も無い。街に出よう。ケイは静かに山道を下って行った。

翌日。望美はまた朝からインターホンで起こされた。午前八時、昨日もこの時間だったか。アイの方を見るとこたつでまだ横になっている。

もう、年末ぐらいゆっくりさせてよ。望美は二人が腹ただしくなった。早く出ていってくれないかしら。昨日の再会といい、望美は普通に年越しを迎えたかった。

「おはよう」

玄関先にいたケイの服装に、望美は思わず見惚れてしまった。感じの良い紺の縦縞スーツに、深紅のネクタイ。何処のかつこいいビジネスマンが訪れたのだろうか、勘違いするほどだった。

「……おはよう。あんた、やっぱりかつこいいわね」

素直に感想を述べると、ケイはまんざらでもない顔をして部屋に上がった。かつこいいは言われ慣れているのか。望美は面白くなさそうにケイの後ろ姿を眺めた。

「起きろ、アイ。交代の時間だ」

ぐずるようなうめき声が聞こえた後、アイが身体を起こした。ケイ

の格好を見て叫ぶ。

「きゃっ、びつくりしたあ。ケイ、その格好凄く素敵じゃない！何処で買ってきたのよ！」

すっかり目を覚ましたらしく、アイがきゃっきゃと喜んでいる。アイの格好は自分の貸したパジャマに寝ぐせ付きだったが。

「この時代の服装も中々いいな。似合うか？」

「似合う似合う！ねえ、ケイも一緒に撮影会行きましょよ！」

手まで叩いて喜ぶアイに、思わず望美とケイはどうしたものかと思わず合わせた。

「撮影会って、またあの男と会うつもりなの？やめといた方がいいわよ、碌な事にならないのはわかってるんだから」

「でも……」アイがちらちらと望美の顔を見る。「望美さんも撮りたいから、連れて来いって」

「私も？」

望美は一瞬驚いたが、いや、そんなはずはないとすぐさま否定した。永市とは結婚後、あるいは付き合っていた時に何回かモデルを引き受けたが、それは仕方なくといった永市の判断に過ぎなかった。望美も撮られるのは好きな方ではない。自分の一瞬がありありと形として残されるのは、はっきり言って気味が悪かった。

「とにかく行かないわよ。行くんだったら、一人で行ってらっしゃ

い
」

「そんなあ
」

アイのすぐるような視線に、寂しいからついて来て欲しいのだと読み取れたが、望美はそれを無視した。

いつもどおり目覚めのコーヒーを入れ始める。

「俺にもコーヒーくれないか」

ケイがいつの間にか横に来て、マグカップを一つ棚から取り出した。心臓に悪い男だ。望美はケイと適切な距離をとるように務めた。

「じゃあケイだけでも一緒に行こうよ」

アイが物寂しそうに視線を送るが、そんな事に一切興味のないケイも無視する。アイは諦めたのか出掛ける準備を始めた。昨日買ってきた服を漁り、今日はどれにしようかな、なんて一人ぶつくさと呟いている。

「すっかり迷惑をかけさせたみたいだな、すまない」

淹れたてのコーヒーを二人でキッチンに立ちながらすする。望美はアイの光景にそうねと笑った。

「何だか妹が増えたみたいよ。今まで止まっていた時間が一気に進み始めて、私も戸惑っているの」

「俺は逆にのんびりできて、いいな。海外旅行にでも来ているみたいだ」

「そんなに未来は忙しいの？」

「まあな。一息つけられる安全な所が無い、と言った方が正しいか」
横目でコーヒーを飲むだけでもさまになるなと感心する。そう言えば、ケイはアイの事をどう思っているのだろうか。

「ケイは……アイちゃんの事、どう思っているのかしら」

ケイが一瞬横目で望美を確認した後、口を開いた。

「責任感の強い女だな。考え方が真っ直ぐで、自分に素直に生きている。少々手がかかるが、基本的には忠実な部下だ。腕っ節もそこらの男共より強い。……軍隊には親を知らない連中が多い。アイもその内の一人だ、数々の無礼は多めにみてやってくれ」

「……わかってるわよ。私が聞きたかったのは、恋愛対象かどうかだったんだけど」

少し勇気を出して聞いたのにこの男は。望美は一気にコーヒーを飲み干して乱暴にマグカップを洗った。

time 19・迎えに来た男

「望美さん、シャワー借りてもいい？」

アイが隣の部屋からひよっこり顔を覗かせる。ようやく気がついた寝癖を手で押さえてあわあわしている。

「いいわよ、綺麗に使ってよね」

アイが今日着て行く服を床に並べてから、ありがとうございまーすと言詫びてお風呂場に向かう。もし愛美が生きていて年頃の娘になったら、きつとアイと同じような事をしているに違いない。望美はアイの行動に笑った。

「今日は、何処か出かけるのか？」

コーヒーを飲み終えたケイがゆっくりと尋ねた。

「いいえ、今日は掃除しようと思うの。もう三十日ですもの。今年の汚れは、今年中に落としておかないと」そう言っ望美は、ケイの服装を見る。「ケイも手伝ってくれるの？」

「世話になってるしな、手伝うよ。男手もあつた方がいいだろう」

「ありがとう。でもその格好じゃまずいわね。ジャージとか、買ってないの？」

「ジャージ？」

「運動しやすい服装よ。まさかそれで昨日寝たわけじゃないでしょ」
望美はケイにも着られる服があるかどうか探した。黒のジャージを見つけたが、体格のいいケイには窮屈だろう。望美は一応ジャージがどのような物が見せた所で、インターホンが鳴った。

「客か？」

「郵便物かしら」

時刻を見ると九時過ぎ。荷物なんて頼んでいただろうか。サンダルを引っ掛け、試しに覗き穴から覗くと、そこにはカメラを携えた永市が立っている。

『おはようございます。アイちゃんを迎えに来ましたー』

向こうから声が聞こえる。どうして自分の居場所が分かったのだろうか。望美は舌打ちして、一度チェーンをかけてからドアを開けた。

「あ、望美おはよう」

あからさまな笑みを浮かべているのは元旦那。望美は怪訝な顔をした。

「家まで押しかけて来るとは、どういう神経よ。アイちゃんは今お風呂」

永市はああ、と納得したような顔を見せたが、すぐに望美と向き合った。

「望美も今日、来てくれるんだよね」

「行かないわよ。今日は掃除するから」

「お願い！どうしても今の君を撮りたいんだ」永市は頭を下げた。

「僕を嫌がるのもわかるが、今日一日だけ、我慢して付き合っ
て欲しい！」

今更何を我慢しろと言っのか。望美は永市と取り合っのが馬鹿ら
しくなった。

「嫌よ。アイちゃんだけ撮ればいいじゃない。若い娘、あんた好
きでしょ」

「僕はアイちゃんより、望美を撮りたいんだ」

永市の真剣な表情に、望美も戸惑う。

「どうして私なんか撮りたいのよ。前にも撮ってたでしょ、いい
から出て行って」

ドアを閉めようとしたが、永市が素早く足を挟む。

「今の望美じゃなきゃ駄目なんだ、お願いだからっ」

「嫌って言うてるでしょ、警察呼ぶわよ！」

望美もむきになってドアを閉めようとする。そこにケイが来てく
れた。

「何してるんだ、客じゃないのか」

ケイと永市の目が合った。

「望美……お前男がいたのか」

永市がびっくりしてケイの顔を見た。知らない男に突然驚かれて、ケイは困った顔をする。

「おい、誰だこの人は」

そうだ。ここで自分に男がいる事を見せ付けければ、永市は出て行くかもしれない。望美は振り向くと、自分と合わせると目で合図した。

「そうよ。私は今この人といて幸せなの。邪魔しないでよ」望美がケイの背中を押す。「ケイ助けて、こいつアイちゃんの追っかけなのよ」

「違う、カメラマンだ。アイちゃんを迎えに来ただけなんだ」

永市が慌てて修正した。ケイが訝しげに永市の顔を見る。

「……アイは今風呂だ。後で下の公園に行かせるから、そこで先に待っていてくれないか」

「あんたは誰だよ」

永市も負けじとケイを睨む。面倒な事になった。望美は二人の間に割って入る。

「誰だつていいでしょ、とにかくここにはもう来ないで。出て行って！」

永市に切なる気持ちが届いたのか、ドアに挟んだ足を引っ込めた。

「……わかったよ。でも僕は望美を撮りたいんだ。撮らせてくれないのなら、勝手に撮るまでだ」

そう言い捨ててエレベーターへと向かっていった。とりあえずは助かったようだ。望美はドアを閉めるとその場についてしゃがみ込んだ。

「大丈夫か」ケイが優しく肩に手を置いた。「それにしても何だったんだ、あいつ」

「……………」

自分の元旦那、とはケイに知ってほしくなかった。もう終わった過去の事なのだ。望美はしつこい男なのよと言って、立ち上がった。

「二人とも玄関で何してるの？」

髪を濡らしたアイが不思議そうにこちらを見ている。望美はアイを睨んだ。

「今、あいつがアイちゃんを迎えに来たのよ。この家、教えたの？」

えっ、とアイがびっくりして玄関先を見る。

「うっん、昨日は駅前ですぐ別れたけど」

「そう……」望美は嫌な顔をする。「じゃあ、ここまでつけられたのね」

「えーっ！……全然気付かなかった」

アイがタオルを握りしめて呆然としている。

「こっちへ来て気が緩みすぎだ、アイ。変な輩はどの時代にも必ずいる。自分で後始末してくるんだな」

ケイは冷たく言い放って、リビングへと戻っていった。面倒事は嫌いだと言いたいのだろう。

「ねえ、どうして迎えに来たの？昨日駅前ですって約束したのに」

「さあ、気が変わったんじゃないの。私の事も異常に撮りたがっていたし」望美は永市の捨て台詞を思い出した。「……そういう男なのよ」

「ごめんなさい、望美さん……あたし、何だか迷惑ばかりで……昨日もそんなつもりじゃなかったんです」

許しがほしいのか、アイは目を濁らせて幼い子供の様につたっている。起きてしまった事はしょうがない。向こうの神経がおかしいのだ。望美は滴るアイの髪にタオルをかけてやった。

「もういいわよ、私も家までつけてくるような男だとは思わなかったし。それより早く着替えないと風邪ひくわよ」

望美はマリアの部屋の窓から、下の公園を見てやろうと静かに入る。マリアが吐息をたてて寝ていた。さっきの騒ぎを聞かれてなくて良かった。望美はマリアの寝顔に微笑むと、カーテンをずらして公園を見下ろした。

永市もこちらを見ていた。しかし、僅かな隙間から覗いている望美には気付いて無いようだ。何故、アイをつけてまで自分の居場所が知りたかったのか。何があいつの芸術感性に自分が触れてしまったのか。理由は分からないが、居場所を知られたのは厄介だ。またこりずに来るに違いない。

一度気に入ったモデルは徹底的に追い回す。それがあいつのやり方だった。望美は永市に愛想をつかせていた。別れた決定的な原因は永市の浮気だったが、要はストーカーじみてる撮影魂が嫌になったのだ。自分という妻や子供がいながらも、他の女を追いかけ回すいくら仕事だからとはいえ、望美も我慢しきれなかった。そして話し合いで喧嘩の末、離婚。永市とは昨日が五年ぶりの再会となった訳だが、望美は不快な気持ちにしかなれなかった。

マリアにまとめさせた荷物が入っている押入れを見つめる。早くここから一時的にでも逃げた方がいい。永市からも、この二人からも、望美はチャンスを伺うかのようにもう一度だけ、公園を見た。

アイはしばらく出かけるのを躊躇っていたが、結局出て行った。公園で永市と合流した所を望美とケイで確認する。

ケイには秘密でアイに永市と縁を切ってくれるように言いつけた。必要ならば蹴り倒しても構わないと。アイも「望美さんが嫌ならそうします」と素直に言うことを聞いてくれた。家までつけられた事に恐怖を感じたらしい。

「さて、それじゃ掃除しましょうか」

ケイが自分ので構わないと言ったので、望美はケイにジャージを貸してあげた。レディースもののジャージでも、ある程度伸縮可能なので何とか着られる。丈が足りないので時折見える腹チラがセクシーだ。

何でかっこいい男は何を着ても似合うのだろうか。望美は面白くない表情で、ケイのジャージ姿を眺めた。

「お風呂場掃除お願いしてもいいかしら。私はキッチン周りを掃除するから」

ケイに簡単な指示を出して、望美はマリアを起こした。もう十時を過ぎている。嫌がるマリアにも自分の部屋を掃除しなさいと言いつけると、自分はガスコンロ周りから掃除し始めた。一年以上前の汚れが目立つ。望美は今更になって掃除している自分は何なのだろうと改めて思い知らされた。

「終わったぞ。次は何処をやればいい」

しばらくしてケイが風呂場から出てきた。望美は背の高い家具の上を雑巾がけしていくよう指示をする。こういう時は男手があると非常に助かる。

「さっきの男が、前の旦那か？」

いきなり話しかけられて、望美は顔をあげた。ケイがこちらを見ている。

「……ええ。もう別れたのは五年も前の事だけだね」

苦笑いで答える。自分の過去の事など知られなくなかったが、先程の経緯でケイも察したのだろう。望美は正直に白状した。

「そうか……あの男には随分勿体無い物件だったな」

勿体無い？あの男には？

望美の手が完全に止まった。ケイは何が言いたいのだろう。顔をあげようとしたが、ゆっくりとケイがこちらに近づいて来たので、望美は緊張で顔を強ばらせた。

何が言いたい、何故近づいてくる。ケイの考えを読もうと思ったが、心拍数の上昇で思考が上手く働かなかった。まともにケイの顔を見られそうもない。

「あの男の事、まだ好きなのか？」

思ってもみなかった事を聞かれ、望美は息を飲む。好きなら離婚なんてしない。はっきり言って顔もみたくないほど嫌いだった。

でも、どうして？どうしてケイがそんな事聞くのよ。唇がふるえて上手く声が出せそうにもない。ケイはそんな自分を知ってか、更に

追い打ちをかける。

「正直、嫉妬したな」

ケイを近くに感じる。逃げなければ。早くここから逃げなければいけないのに、身体が痺れたように望美は立ち尽くしていた。なんて言葉を口にするのだ、この男は。望美は一端落ち着こうと胸に手を当てて深呼吸する。

違う、惑わされてはいけない。ケイはこんな甘い言葉を吐く男では無いはず。何か企んでいるのだ、絶対。望美はケイの首元を見ながら言った。

「昨日は疑っていたくせに、今日は誘ってくるのね……どういうつもりなのよ」

ケイは動かない。

「さあ、どうしてでしょう」

など言っつて、にやけている。教えてくれるつもりは無いらしい。望美は無視してまた手を動かし始めた。

「勝手に俺を自分の男に仕立てただろう……気に食わないな」

そうか、怒っているのか。男女間に自分が巻き込まれた腹いせをしているのだ。

なんて質の悪い嫌がらせなのだろう。望美はようやくケイの顔を見た。

「さっきは悪かったわよ。私に男がいればあいつが引くと思った、

それだけよ」

望美はそう言いかけてまた顔を背けたが、ケイが無理矢理顔を自分の方に向かせた。

「朝の続きだ。アイよりお前に興味がある」

そう言い捨てて、ケイはリビングを後にした。今のはずるい、ずるいよケイ。望美は苦しそうに胸を押さえた。もう少しで唇が触れるほどの距離。いけない、あんな事で動じては、いけない。早く鼓動よ静まれ。

望美が床にへたれていると、飲み物をもらいに来たマリアと目が合った。

「お姉ちゃん顔赤いよ？どうしたの」

大丈夫だからと望美は手で顔を扇いだ。未だに胸は高鳴っているが、ケイはきつと自分をからかっただけなのだ、きつと。

アイは永市のミニバンに乗って、街中をとるとる走っていた。いや、既に停滞していると言った方が正しい。年末の帰省で道が混雑しているため、思うように前に進まない状態だった。

「今年は車で帰る人が多いのかなあ。去年より混んでいる気がするよ。この道さえ抜ければ早いのかなあ」

前の前にいるトラックのせいで信号が見えない。永市はハンドルにもたれかかって一人ぼやいていた。

これから永市の自宅に向かう予定になっている。アイは一人で男の家に行くのもどうかと躊躇ったが、こんな男に臆した自分も見せたくないので承諾した。今日の格好は昨日も着たシルバーのジャケットに、赤のミニドレス。その下にキラキラの黒タイツを履き、足元はファアのついた背の高いブーツでこしらえてある。ちょっと軽快過ぎたかな、とアイはドレスの裾を押さえた。

決して永市に気を許した訳ではない。勿論警戒はしている。いくら自分が鍛えて強かろうと、不意を突かれては敵わない。アイは腕を組みながら永市を横目で見ていた。まさか望美さんの元旦那だとは知る余地もない。世の中はなんて狭いのだろう。アイは運命の悪戯にせせら笑った。

「望美さんの事、まだ好きなんですか？」

自分をつけてまで居場所が知りたかったのだ。よっほど望美さんの事が気になっているのだろう。永市は正面を見ながら答えようとはしない。

「あたしより望美さんを撮りたいんでしょ？」

「いや」永市がアイの方を見た。「アイちゃんも撮りたい、可愛いからね」

「じゃあ望美さんはどうして撮りたいのよ。昨日もいろいろ望美さんの事聞いてきたし……本当は望美さんの事、今でも好きなんじゃ」

「あのね、望美とはもう終わったんだよ。僕が終わらせたの。今は望美の事、商品として見ている。勿論アイちゃんもだ。僕は商品を最大限に引き立てたいだけなんだよ」

「商品……」

「ごめん、商品って言い方はよくないな。女性だよ、女性」

「じゃあ、女の人しか撮らないの？」

「基本はね。僕は女性の美に凄く惹かれるんだ」

ようやく車が大通りを抜けた。永市がはあ、と息を漏らす。アイは今更になって永市について来た事を後悔した。永市自体が怖いという訳ではない。いざとなればこんなカメラ男、締め上げることで出来たろう。アイは永市が漂わせている雰囲気恐ろしかった。態度と感情が違う人。頭の中で何を考えているのか分からない。覗こうとすれば、こちらが覗かれてしまいそうだ。

「アイちゃん僕に嘘ついたよね？」

「嘘？」

「あそこに男もいただろう」

ケイの事だ。先程鉢合わせしたのだろう。どうしてそんな事を自分に聞くのか。自分だけを見てくれればいいのに。

「いるけど、あたしを撮るのには関係ない話でしょ？」

「いや、アイちゃんのボーイフレンドかなっと思ってさ」

違う。今の聞き方はそんな感じじゃなかった。アイはふてくされたように外の景色に目をやった。

永市の自宅は京都の中心からだいぶ南に下がった所にあった。集合住宅が所狭しと肩を並べ、何だか少し治安の悪そうな雰囲気だった。駐車場の一角に車を停めると、永市は一棟のアパートに向かって歩き始める。アイは黙って永市の後ろについて行った。

「ここが僕の部屋だよ。というか仕事スペースだね」

そう言つて案内された部屋は小さな机にソファ、山積みの雑誌やら新聞が乱雑に置かれている汚い所だった。奥に二部屋あるが、部屋の仕切りを取つて一部屋になっている。ただのフローリングと白い壁紙だけで家具も何も無い。隅で大きな照明器具やスタンドが追いやられていた。ここで撮影しようというのか。

「汚くてごめんね。最近片付けもしないからさあ」永市がソファにも積まれていた雑誌を退ける。「ここで座って待ってて。すぐ準備

するから」

永市が急々と部屋を行ったり来たりしている。どうやら簡易スタジオを作っているようだ。大きな照明と真っ白いスクリーンが部屋と部屋を結ぶ。アイはその様子をぼんやりと眺めていた。もっと大きなスタジオで撮影かと思っていたが、こんな小さな部屋でも事足りるらしい。もし望美さんがいたら、別の場所で撮影してくれたのだろうか。

「お待たせ。じゃあ靴を持って、こっちに来てくれる？」

アイはジャケットを脱いだ。エアコンが効いてきたので、ノースリーブのミニドレスでもそれ程寒くはない。昼間よりも眩しい光を浴びながら、永市の用意したステージの上に立った。靴を履く。このまま撮ったら、自分と白いスクリーンしか写らないではないか。

「永市さん、このまま撮っちゃおうの？」

「そつだよ。後からパソコンで処理するから大丈夫」

なるほど、背景も自分の思うがままって事ね。アイはフリルの付いた赤のミニドレスを最大限活かせるように振舞った。

「いいね、いいね。やっぱりアイちゃんは絵になるよ」

カメラ越しの永市に乘せられ、アイはいろいろなポーズを取る。立ったり、座ったり、寝そべったり、振り返ったり。ポーズからポーズへ移行する際にも、永市はシャッターを切るのを止めなかった。

何回ポーズを決めたのだろうか。アイはそろそろ飽き始めていた。

次のポージングがもう思いつかない。衣装チェンジもしないのだから。突然立ち止まったアイに、永市が次の指示を出す。

「じゃあそろそろ脱いでいこうか」

えっ、とアイはびっくりして永市の顔を見た。しかし永市の顔はびつたりとカメラに貼りついたままだ。

「どうせ下着も決めてきたんだろう？男を誘ってごらんよ」

有無を言わせない口調で、そんな事を言われても困る。

「嫌よ！エッチな事はしないわ」

「ここまで来てそれは無いだろ、アイちゃん」永市がようやく顔を上げた。「エロスが女性の最大限の美じゃないか」

「そこまで協力出来ないわ。あたし帰る」

靴を履いたままステージを離れたアイに、永市は手元にある雑誌を思いつ切り投げ付けた。アイはそれを反射的に蹴り落とす。

「へえ、やつぱり護身術が何か身につけてるんだ」永市がアイの回し蹴りに拍手する。「最近の女の子は強いなあ」

「なにすんのよ！危ないじゃない」

「ごめんごめん、アイちゃんを試したかったんだよ。女一人で男の家に上がり込むなんて、随分度胸のいる事ですよ」

顔は笑っているが、目が笑っていない。アイは今は縁を切るチャンスだと言わんばかりに声を荒げた。

「望美さんが愛想つかせたのも分かったわ。今の本気で投げ付けたでしょ、最低。もうあたし達に関わらないで！」

アイは投げ付けられた雑誌をもう一度蹴り飛ばした。永市はその様子ですら、カメラ越しで眺めている。

「君、一体何処から来たの。アイは本名じゃないだろ？僕もいろいろ調べてみたけどさあ、全く君の情報が無いんだよね。あちこち初めて見るような顔しちゃって、外国かどっかから来てんの？」

小馬鹿にした目でアイを見る。所詮女だからと舐めきった態度。アイの一番嫌いなタイプだった。

「あんたには関係ないでしょ」

アイは蹴り殺したい気持ちを必死で押さえた。この時代では殺人は罪になる。いや、正当防衛は大丈夫な筈だ。アイは頭の中でこの男をどう始末してやるうか計算し始めていた。

突然、電話が鳴った。アイも永市も音がする方に目を向ける。アイの脱いだジャケットからだ。ケイが心配して連絡を寄こしてくれたに違いない。しかしアイがジャケットを掴む前に、永市がジャケットを奪い取った。

「返して！」

アイの本気のかかと落としが見事に決まった。がたいの良い永市が

ぐっと、低い声を上げて倒れる。

アイがすかさず近くにあったコードをむしり取ると、それで永市の身体を縛り上げた。何か倒れるような音がしたが、アイは気にせず電話にでる。

「ごめん、お待たせしました！」

『アイちゃん、大丈夫？』

望美の声だった。てっきりケイだと思ったアイは撃沈した。

「何でおばさんが電話してくるのよー」

『馬鹿、心配だからに決まっているじゃない。何もされてない？大丈夫？』

アイは足元で転がっている永市を見た。動かない所を見ると、どうやら気絶しているらしい。いい気味だ。

「こっちは大丈夫よ、今撮影終わった所」アイは永市を踏みつけた。「ちゃんと望美さんの言う通り、落とし前付けたからもう関わることは無いわ」

『そうなの？……まさか本当に蹴り倒したんじゃないでしょうね』

その通り。アイは笑って誤魔化した。

time 22・シルエツト

「アイちゃん、大丈夫そうよ。良かった」

望美に貸してやった小型イヤホンを受け取る。アイが出ていって掃除も一段落ついた後、望美が心配だから連絡したいと申し出たのだ。自分は大丈夫だろうと断言したが、望美が「アイちゃんは女の子なのよ」と言っただけで聞かなかった。

「掃除手伝ってくれてありがとう。お陰で部屋が綺麗になったわ」

望美が改めて部屋を見回す。三人は今、お昼の出前ピザを食べ終わった所だった。

ケイはこっそり望美の薄い唇を盗み見た。望美は先程の自分の行動に動じることなく、接してくる。つまらないな。もっと遊んでやった方がよかったか。

「少し調べ物をしたい。何処に行けばいい」

ケイはこたつから出た。このままでは寝てしまいそうだ。

「調べ物？何調べるのよ」

ケイは正直に話そうか迷った。ある男を探しているなんて、望美に怪しまれないだろうか。この時代に知り合いなど居るはずも無いのだ。

「……この時代の歴史だな。というより、人物を知りたい」

「ふーん。じゃあ図書館にでも行ったら？」

望美は食器を洗っている。マリアは食べ終わってすぐに部屋に戻ってしまった。ゲームの続きでもしているのだろう。

「反応が冷たいな。さっきの事、気にしているのか」

望美がきつとケイを睨み返す。

「当たり前でしょ、それ以上近づかないで」

「悪かった、戸惑う顔も見てみたかったんだ」

「それをからかうって言うんでしょうが」

望美は自分に背を向けてまた食器を洗い始める。あの背中を後ろから抱きしめたら、きつと望美は飛び上がるに違いない。

ケイは望美のシルエットを想像した。そう言えばしばらく女を抱いていない。アイはおばさんだと罵っていたが、望美は自分と同年くらいの、年頃のいい女だ。背も少し高めでバランスのよい身体つきをしている。さっきの男が、かつて望美を独り占めしていたかと思つと、ケイは面白くなかった。だから嫉妬したのは本当の事だ。

こたつの上には先程食べたピザの空箱が広げられている。望美の機嫌取りに片付けてやるか。ケイは掃除して出たゴミも一緒にまとめ始めた。途中、キッチンのゴミ箱であるものを見つけた。

冷たいフローリングの感触で目を覚ますと、永市は自分が拘束されている事に気が付いた。両腕が腹の所でぐるぐる巻にされているが、足は辛うじて免れている。何とか身体を起こして時刻を確認した。午後四時前。三時間近く気絶していたようだ。

「畜生、なんて女だ！」

何とか手だけでも出そうと躍起になる。しかし結び目はきつく、簡単に解けそうもない。

永市は部屋の隅にあった等身大の鏡で縛られた身体を見た。スタンドのコードで縛られていると気付く。思わずスタンドの方に目を向けると、無残に倒されていた。高い機材になんて事しやがる。

永市は顔を顰め、振り返って結び目を見た。綺麗な後手縛り。こんなSMの世界でしか見たことがなかった。

「あいつ本当に何者なんだ？……望美は用心棒でも雇っていいのかわよ」

携帯電話を探して後ろ手で取る。鏡を見ながら永市はアイちゃんを調べさせたハッカーの友人に助けを求める事にした。一人で解けようがないと思ったからだ。

「もしもし、悪いが助けに来てくれないか。アイちゃんにしてやられたよ。腕を拘束されて不便だ」

携帯電話を机に置き、後ろ手で通話終了のボタンを何とか押す。くそっ、面白くない。永市は自力で解こうと腕を動かすが、締めつけられて痛むだけだった。

次からは縄抜けの術でも心得ておくかな。永市は動ける足でカメラ

が無事かどうか確認した。駄目だ、フィルムが抜き盗られている。嫌な予感がして、慌ててパソコンの方にも向かった。近くにあったボールペンを口にくわえ、顎も駆使してチェックする。……やられた。データが全て消えている。おまけにアイちゃんの事を調べまわった形跡も知られてしまったようだった。

「くそつたれ！」

永市は肩で近くに積まれていた雑誌をなぎ倒した。足で乱暴に踏みつける。畜生、畜生、畜生！勝手な事しやがって！

「あの女の正体、絶対暴いてやる！」

永市は地団駄を踏みながらも、友人の助けを待つしか無い自分が無性に腹ただしかった。

time 23 ・運のない男

ケイはある物を見つけた。慌てて他の切れ端もないかゴミ箱を漁る。あつた、自分が探していた男の名前。こんな所で見つかるとは思ってもよらなかった。

「せっかく掃除したのに散らかさないでよ」

望美が後ろから怒鳴ってきたので、ケイは紙切れをジャージのポケットに突っ込むと立ち上がった。望美の顔を、驚きを秘めた表情で見つめる。

「な、何よ。どうしたのよ」

見つけてしまった。鼓動が高鳴り、自分が興奮しているのが分かる。ケイは呼吸を整えて先程の男の顔を思い出そうとした。チエーンの間隙から覗いた二つの目。公園で見た後ろ姿。あの男が、宮本の先祖だった。

「少し出かけてくる。夜には戻るから」

ケイは慌てて玄関に向かったが、望美がジャージの裾を掴んでそれを阻止した。

「その格好でどこ行くの、笑われるわよ」

ケイはぱつぱつに伸びたジャージを見下ろした。確かにとんだ笑い者だ。ケイはすまないと詫びて隣の部屋でスーツに着替え始める。

「図書館でも行くの？調べ物がどうとか言っていたけど」望美がケイの変わり様に怪訝そうに尋ねた。「私達の見張りはいいいわけね」

「それは車の中で見張るからいい」ケイがいらいらしながらブラウスのボタンを止める。「さっきの男、本当にお前の旦那だったのか」

「またその話？本当よ、もう！」

「そうか、別れて正解だったな」

ネクタイを結べないので床に投げ出し、ジャージから紙切れを忘れずに取り出すと、ケイは外に飛び出した。とにかくホテルに戻ろう。走りながらアイに電話する。

「もしもし、俺だ。今何処にいる」

『どうしたの、ケイ。そんなに慌てて。あたしの事心配してくれるの？』

「そつだ、何処にいるんだ」

『……………ホテルよ。撮影から戻ってきたの』アイは嫌そうにため息をついた。『ケイの言う通り、変な輩だったわ。最悪！』

アイが何かを投げつけたのか、物音が受信越しに聞こえてきた。どうやら怒っている様だ。アイもホテルにいるのか、それでは今荷物を取りに行ったら怪しまれてしまう。ケイはマンションの入口で立ち止まった。

「撮影会は何処でやっていたんだ」

『永市の自宅よ。あーあ、何だか損した気分!』

ケイは紙切れを手の平で繋ぎ直した。それは一枚の名刺になる。永市京介。フリーカメラマン。連絡先と、自宅か事務所の住所まで載せられていた。

ケイはその場で高らかに笑い出した。気持ち在必死に堪えた。可笑しくてたまらない。奴の祖先探しは長期戦になると踏んでいたが、まさかこんな形で簡単に見つかるとは!

『ケイ?……ちょっと返事くらいしてよ!』

アイの一喝でケイの思考が現実に戻った。そう言えば望美がアイに一回連絡をしている。その発信履歴を調べれば、あいつの自宅など簡単に割り出せられる。車だけでも取ってこよう。

「悪い悪い。その男とは何処で知り合っただ」

『何処つて、街中でいきなり撮られたのよ。ほら、軍隊の時にいた格好のまんまだったから』

あの服か。そんな事で役に立つとは。

「アイ、上出来だ。今晚何処でも好きな所に連れてってやる」

『本当?あたしケイと行ってみたい所沢山あるんだ』

「ふん、冗談だ。また連絡する」

ケイは一方的に電源を切ると、ホテルの駐車場へと戻った。アイが

いない事を確認して急いでホテルから離れる。適当に広い道まで車を走らせると、路肩に停車させた。

ケイは小型イヤホンをコードで繋ぎ、発信履歴からグラフで座標軸を割り出した。地図を広げて確認すると、そこは京都駅から少し南へ下った集合住宅地を指している。ばらばらの名刺に書かれている住所とも一致した。間違いない、奴の自宅はここだ、ここに居る。

面白いように事が運ぶさまにケイは笑い出した。馬鹿な奴だ、自分から殺されに来るとは。本当に運のない奴だ。

ケイは一通り笑い終えた後、目的地を永市の家に設定して車を再び走らせた。

先程の電話のやり取りを、アイは頭の中で再現していた。今のは自分を心配してかけてきた電話じゃない。あの男が気になって電話を寄越したのだ。……何故？

アイは永市の部屋から持ち出したフィルムを見つめた。先程壁に投げつけたが、思ったより頑丈で平然と床に転がっている。上出来だとケイが自分の事を褒めた。おかしい。ケイは何かをしている。そしてそれを自分に隠している。アイは無性に腹ただしくなった。ケイは自分を信用していないのだ。それだけは、はっきりと分かった。

アイはケイの荷物を探つてやろうと部屋を見渡した。しかしケイの荷物が見当たらない。あの金庫の中か。アイは机の下に設置された金庫を眺めた。鍵は部屋のとじだが、解除番号が分からない。試しに部屋の番号を入力してみるが、ケイが番号を変えてしまったのか開かなかった。この中に何かを隠している。どうにかしてこの金庫を開けられないだろうか。

「すみません、部屋の金庫の解除番号を忘れてしまったんですけど、何とかありませんか？」

ホテルのフロントに電話してボーイを呼び出した。アイが早く早くと急かすように部屋に招き入れる。

「鍵はあるんですけど、番号を忘れてしまってます」

アイはボーイに媚びるような目で訴えた。ボーイも困った表情を浮かべる。

「部屋の番号で設定しなかったのですか？」

「それじゃ心配だったから、勝手に変えたらわかんなくなっちゃって」アイは大袈裟に顔を両手で隠した。「どうしよう、大事な預かり物なのに！」

「何とかしますから落ち着いて下さい。上の者を呼んで参ります」

数分後、支配人らしき清楚なおじさんが部屋に訪れた。アイは部屋に招き入れるなり言う。

「金庫を開けてください！」

眼鏡をかけ物腰柔らかそうな男がはいはい、と鍵束を取り出して金庫と向かい合った。アイは拳銃でも入っていたらどうしよう、とはらはらした気持ちで男の背中を見届ける。やがてカチャリとロックの外れる音が聞こえた。

「開きましたよ。部屋の番号で設定し直しますから」

部屋の番号に戻されては開けた事がバレてしまう。アイはもう大丈夫ですから、ご迷惑をお掛けしましたと言って、男を無理矢理部屋の外に追い出した。不快な顔でこちらを見返してきたが、アイは気にせずどうもと頭を下げ素早く鍵をかける。さて、何が出てくるのかしら。

金庫を開けたアイはやっぱりという顔をした。この時代の九ミリ拳銃と、弾が無造作に置かれている。そして封筒に突っ込まれた現金。この時代の金をこんな持ち出して何を考えているのやら。ケイは護身用に一つ持ち歩いていた筈だから、ここへは二丁持ってきている事になる。どうして。アイは拳銃の下に敷かれた書類を見た。家

系図のようだ。中に写真が挟まっている。

「宮本……!!」

アイは写真を見て驚いた。そこには宮本とオリジナルの方の真理愛、それに奥さんと思われる女性が仲良く寄り添って写っていた。どうしてこんな写真が……。アイは再び家系図に視線を落とした。現代の年号の所を見ると、永市京介の名前が記載されている。どう考えてもあのカメラマンに違いなかった。そこから二手に血筋が別れてしまっている。一方は永市、そしてもう一方は……。

「宮本! どうして!」

永市から宮本へと表記されている。そして宮本の末裔は真理愛で終わっていた。これは宮本の家系図だ。そしてその先祖がああ永市。ケイは恐らく、宮本の先祖永市を暗殺するつもりなのだ。

アイは今しがた見た物が信じられなくて、しばらくその場で放心していた。自分はこの事を知らされていなかった。だから、永市の暗殺はケイの単独任務になる。しかし、そんな事はあつてはならない。何故なら、永市を殺せば、未来の宮本や真理愛は存在しなくなってしまう。未来が変わってしまうからだ。

人類がある程度の範囲まで過去に移転出来るようになってから、新しく時空法が制定された。過去への干渉は一切禁止とされている。ましてや過去の重要人物の暗殺なんて大罪だ。終身刑どころの騒ぎではない。ケイは何を考えているのか。

アイはふと気が付いた。先程の電話は自分に確認させたのだ、永市の居場所を。利用されたのだ、ケイに。アイは永市の自宅で望美からの電話を受信していた事を思い出して、慌ててホテルの駐車場に向かった。発信履歴から永市の自宅が割れてしまう。しかし時既に遅く、二人が乗って来た車は見当たらない。ケイがホテルに戻って

きて、持ち出したに違いなかった。

アイはケイと連絡を取ろうと電話をかけたが、やっぱり繋がらない。アイはぼつねんと取り残された気持ちになって、のろのろと部屋に戻った。どうする、どうしたらいい。アイは一度冷静になるうと水を一気に飲み干した。落ち着いて考えるのよ、あたし。

自分に何度も言い聞かせると、ベッドに腰を下ろした。転がっていたフィルムを足で踏みつける。自分の事を調べ周り、写真を撮られ、蹴り殺したいほどむかついた男だが、今殺されては困る。アイはケイが本当に永市を殺すつもりなのか検証し始めた。永市を殺したら、未来の宮本、真理愛も存在しなくなる。そうしたら兵器として開発されたマリアの意味が無い。それを取り戻しに、自分達ははるばる過去にやってきたのだ。もしかしてマリア奪還の失敗も考えて、ケイは永市を殺すよう命じられているのかもしれない。それにしても、ケイ一人に大罪を犯させるような命令をするだろうか。分からない。上の連中はケイを消そうと考えているかもしれない。自分と共に過去に閉じ込めてしまえば、どうしようもない。しかし、こっちはマリアがいる。マリアがいる限り、過去に閉じ込められるはずはない。

ケイが東側のスパイだという可能性もあるかもしれない。いや、それは考えたくない。途中から入って来た上司だと知ってはいたが、もうかれこれ十年近く、入隊時からお世話になっている。今更西を裏切るなんて馬鹿な事、ケイはしないだろう。

アイは部屋の窓から外を見た。冬は日が暮れるのが早く、まだ六時だと言うのに外は暗く沈んでいた。ケイはまだ、永市を殺すはずがない。確信はあった。慎重なケイの事だ、今日は自宅の下見だけで、未来に帰る最終日辺りを狙うに違いなかった。

アイはもう一度写真を見た。真理愛がまだ幼すぎる。五年ほど前の写真だろうか。写真の笑顔と裏腹に、自分はこれから何を信じていけばいいのか分からなくなった。ケイはどういう理由にしろ、自分に秘密で単独行動をしている。自分はどうすればいい、与えられた

任務をこなすしかないのか。

ケイの真意が知りたい。アイは金庫に入っている拳銃を取り出した。いざとなれば、戦うしか無いだろう。これは脅しにも使える。それと少しばかり現金もくすねた。自分の任務を達成させるには、まずケイが乗り回している転移装置付きの車と、マリアを確保する必要がある。車の鍵はケイが持っている。自分に貸してくれるだろうか。アイはちよつと考えて無理そうだと結論づけた。駄目だ、いい方法が浮かばない。部屋の中をぐるぐる動き回っている内にお腹が鳴った。

「あー！もうっ」

アイは頭を掻きむしってベッドに倒れこんだ。せつかくのドレスが皺になるうがどうでも良かった。もうお洒落をする必要はない。アイはフリルを邪険に払うと、軍服に着替える事にした。ポケットに現金を突っ込む。拳銃はどうしようかと考えて、黒のハンドバックの底にねじ伏せた。

一度、望美の家に行こう。アイはマリアを確保する方を先に選んだ。

ケイのネクタイが落ちている。よっぽど慌てていたのか。

望美は鏡台の前で化粧水を顔に叩きながら、ぼんやりと今後どうしようかと考えていた。今しがたマリアとのんびりお風呂に入っていた所だ。マリアの痣も徐々にかすれてきている。クローンだろうが何だろうが、やっぱり人間だ。もう一度マリアに何か思い出したか尋ねてみたが、結果は同じだった。でも、何も思い出さない方がいいかもしれない。

望美はカレンダーを見た。二人の滞在期間は後四日もある。何時ここから逃げ出そうか。ケイがいない今がチャンスだが、車からでも見張れると言っていた。恐らくマリアに発信器か何かを付けているのだろう。でも向こうの追跡手段が車だけだとしたら、逃げ切れない訳でもない。要は車で来られない所まで逃げきれればいいのだ。そこまで自分ができるかどうかの話は別だが。

寒いし、沖縄にでも行ってやろうか。唐突に沖縄の孤島を思い描き、自分の大胆さに笑った。案外面白いかもしれない。一週間程沖縄でのんびり年越しを迎えるのも悪くはない。望美は携帯で飛行機の空席状況を確認した。年末の帰省時期だが、不況の煽りのせいかな満席の便はない。よし、マリアと沖縄に行こう。望美は一番大きなスーツケースを探し当てるとマリアの部屋をノックした。

「マリア、沖縄に行くわよ！」

「沖縄？」

無造作に積み重ねていた漫画を読んでいたマリアが、不思議そうに顔を上げた。

「そう、沖縄。ここより暖かいわよ」

「お姉ちゃん突然だね。もしかして夜逃げの続き？」

マリアが笑いながら漫画を置いた。望美はマリアの部屋にしまっていた、三日程の旅行バッグを取り出す。

「そんなところ。一週間程滞在しようと思っっているから、更に着替えを追加してね」

マリアが沖繩だあと喜んでダンスを漁り始める。望美もスーツケースに荷物を入れ替えようとした時だった。不意にインターホンが鳴った。まずい、ケイが帰ってきたんだ。思わずマリアと顔を見合わせる。

「どうしよう、お姉ちゃん」

「とりあえず押入れに隠してやり過ぎしましょう」

マリアと小声で打ち合わせしている間にもインターホンが二回鳴った。ケイではない。ケイなら鍵を勝手に開けて入って来るはずだ。もしかして永市ではないか。望美は慌てて覗窓から外の様子を探った。そこにはモビルスーツ姿のアイちゃんがいた。

「アイちゃんじゃない、どうしたのよ」

寒いので慌てて中に入れてやる。アイは深刻な面持ちで無言のまま部屋に上がった。怒っているのだろうか。望美はどうしてアイがここに来たのか測りかねていた。

「望美さん、少し話があるの」

「……マリアも聞いていい話かしら」

望美はマリアの部屋のドアに目をやった。アイも振り返ってどうしたものと眉を潜めたが、聞かれてもいいやと開き直った様子で望美と向き合う。

「一緒にここから逃げましょう。出来るだけ遠くへ」

アイから願ってもない提案だった。まさか未来の道具で頭の中を見透かされたか。望美は動揺せまいと身構える。

「どうしたのよ、いきなり」

「ケイを少し困らせてやるつもりで」

悪戯にアイが笑う。ケイと喧嘩でもしたのか。

「何、喧嘩でもしたの？」

「いいから」

そう言っただけでアイは黒のハンドバックから禍々しい黒いモノを差し向けた。明らかに本物の拳銃だった。望美は息を飲む。

「あたしは本気よ。お願いだから言う事を聞いて」

「……………わかったわ。でも、事情を教えてくださいませんか」

「率直に述べるけど、いい？」

「ええ」

「ケイが永市を殺そうとしている」

「まさか」

「永市は宮本の先祖だったのよ」

宮本。確か未来の東日本を支配している男だったはず。その先祖が永市京介。自分の元旦那。

「永市を殺す……つまり、未来の宮本を消そうとケイは考えているのかしら」

「恐らくね。でもそれは法が許さない。そんな事をされては未来が変わってしまう。マリアを取り戻しに来た、あだし達の意味が無いわ」

それもそうだ。過去を変えることは、同時に未来を変えることになる。望美はゆっくりと頷いた。

「それで、アイちゃんはどうしたいのよ」

「勿論止めるわ。それにケイの真意が知りたい」アイが黒いモノをハンドバックにしまった。「協力してくれるよね？」

「そんな物見せられたら、協力するしかないでしょ」望美が呆れたように言う。「で、私はどうすればいいのかしら」

「一緒にここから離れてもらうわ。マリアを探させて時間稼ぎしようと思うの。ケイならきつと永市よりあだし達の方を追うから」

「待って、ケイが殺す気なかったらどうするのよ。まだ憶測の範囲でしかないでしょ？」望美はアイの話が信じられなかった。「アイちゃんはケイを裏切るつもり？」

「先に裏切ったのはケイよ！あたしに秘密で単独行動して……許せないわ、信用されてなかったのよ！」

アイの目頭が酷く淀んでいる。悔し涙を堪えているのだ。望美はその切なさに顔を背けた。

time 26 失った物

「ケイは今日、帰ってくるのかしら」

「多分。夜までには戻ると言って、出て行ったから」

「じゃあ明日、ケイと見張りを交代したら一緒に逃げましょう」

「逃げるって、何処へ」

「何処へでも。とにかく四日後に戻ってこられる範囲なら」

「そう……」

望美は考えるフリをした。ケイから逃げた所で、アイからは逃げられない。それにあんな物騒なのを持ち出してきた。どうにかして二人から逃げられないだろうか。

「アイちゃんの考えは分かったわ。荷物はまとめておく。それで、今晚ケイとはどう接すればいいのかしら」

「どうって、いつもどおりで頼むわ。下手に探ろうなんて考えないで、それはあたしの仕事だから。……明日また落ち合いますよ」

そう告げてアイが出て行く。望美は去り行く背中に、再度確かめた。

「ケイは本当に、永市を殺すと思う？」

アイが立ち止まり、寂しそうに呟いた。

「あたし達は与えられた任務をこなすだけ。それ以上でも、それ以下でもないわ」

返す言葉を探している内に、アイは出て行ってしまった。ケイが単独で永市を……消す任務に、アイは反感を抱いているのだ。二人の

任事情まで知らないが、仲間割れを起こしているのは間違いない。とにかくもう、面倒事に巻き込まれるのは嫌いだ。

望美はふと永市の事を想った。未来の敵である先祖があんな碌でもない男だなんて。永市が死んだところで、自分は悲しむだろうか。いや、かえって清々するかもしれない。酷い女だ。望美は薄ら笑みを浮かべながら、アイの話に乗っても良いものだろうか頭を抱えた。ふと後ろから視線を感じた。マリヤが恐る恐る顔を覗かせている。

「マリヤ……」

「ごめんなさい……マリヤのせいだよ、お姉ちゃんが困ってるの」。突然マリヤがそんな事を言うものだから、望美はびっくりした。

「何言ってるの、マリヤ」望美はマリヤの頭を撫でてやる。「私はちっともマリヤのせいだと思ってるわ」

大人の揉め事にいい加減気がついてはいるはずだった。こちらにそんな気がなくても、子供は自分が悪いと咎めてしまう。塞ぎ込んでしまう。望美は精一杯マリヤを励ました。

「でも……」マリヤが目をきよろさせる。「あの二人はマリヤを迎えに来たんだよね？」

流石に気付いていたか。望美は隠さずに告げた。

「そうよ……でも、私はマリヤを手放す気は無いから」

「どうして！」マリヤの瞳から涙が零れた。「どうして助けてくれるの。道端で倒れて記憶のないマリヤを……どうして……！」

「好きなのよ、それじゃ駄目かしら」

しゃくりあげているマリアを、望美は優しく抱きしめる。そう言えば二人つきりになれたのも三日ぶりだ。知らず知らずの内に自分が張り詰めていたものが、マリアを傷つけてしまったのだろう。

「ごめんね、マリア……不安にさせて」

「うん。マリアの方こそ迷惑かけてごめんなさい」

「謝るような事、何もしてないでしょ」マリアの頭を軽く小突いてやる。「好きだと言ったけど私……本当は失った物を取り戻したいだけなのかもしれない」

「……失った物？」

「一年前に娘が交通事故で死んだのよ。ちょうどマリアぐらいの年頃でね。それで塞ぎこんでいた所にマリアが現れた。私にとって、マリアは天使に見えたわ」

「天使って」マリアが笑った。「大袈裟だよ」

「自分勝手に悪いけど、私はマリアと離れる気無いから。二人の元には絶対行かせない」

再び強く抱きしめる。マリアも強く縋りついてきた。

「お姉ちゃん、マリアの事、嫌いじゃないの？」

「嫌いだったらこんな事しないわよ」

「そっか」

「明日は二人だけでここを出しましょう」

「アイさんはいいの？」

「アイちゃんは……危ないわ、まだケイの部下だもの。今は裏切られて腹を立てているけど、また仲良くなるかもしれない。アイちゃんには悪いけど、ここで留守番してもらいましょう」望美はマリアと正面で向き合った。「マリアは……あの二人と離れて平気？」

「うん。だってお姉ちゃんと一緒にいたいもん」

「ふふ、ありがとう」

照れ隠しにマリアの頭を乱暴に撫でてやる。やめてよ、と嬉しそうにマリアが抵抗した。

夕飯を二人で簡単に済ませた後、ケイが帰ってきた。二人で思わず緊張する。マリアは逃げるように部屋に戻ってしまった。

「おかえり」

「……ただいま」

ケイが部屋の暖かさに顔をほころばせ、コートを脱ぐ。望美は食器を片付けながらケイの顔色を伺った。この男が、永市を殺そうとしている。しかし何処か張り詰めた表情からは、失望と落胆が入り交じっているように見えた。

「お腹空いてない？ご飯は食べてきたの？」

「ああ、軽く食べてきたからいい」

ケイは自分用のジャージを買ってきたらしく、袋から取り出して着替え始める。望美はぼんやりとその姿を見ながら言った。

「なら、晩酌に付き合ってよ」

酔えばケイの本音が聞けるかもしれない。アイに止められたが、自分もケイの真意が知りたかった。

「晩酌？……悪いが酒は飲めないんだ」

「あら、そつなの。残念だわ」

やっぱりケイの本音を聞くのは難しいか。望美は諦めて食器を洗い始めた。

「酒はよく飲むのか？」

「最近飲んでないけど、少し前まではね。酔わないと寝付けなかったから」

「そうか。夫婦でも晩酌はしていたのか？」

今のはどういう質問だろう。望美は答えないまましていると、着替え終わったケイが近づいてきた。

「俺に聞かれるのは都合悪いか」

「……そうね、過去を詮索されるのは嫌いだよ」

「でも、その人の本質を知るには過去を辿るしかない……そうだろうか？」

ケイが悲しそうに呟く。望美は少し考えてそうかもしれない、と同じ意した。

「ならケイは、私の本質を知りたいのかしら。私もケイの本質が知りたいわ。慌てて出て行ったけど、今まで何処にいたのよ」

「……いろいろだ。これも買いに行ってた」

ケイがジャージを見せつける。何だか話をそらされたようで、望美は露骨に嫌な顔をした。

「そうやって本当の事を言わないのね。いいわ、私には関係のない事だから」

望美は食器を洗い終わると、ケイの横をすり抜けてこたつに入った。

テレビの音量を少し上げる。

「……すまない」

どうして皆自分に謝るのだろう。望美は背後にケイの気配を感じていたが、やがて足音が風呂場の方へと向かった。

time 27 永市の後悔

翌日、いつもどおり交代に来たアイを、望美は睡眠薬を大量に混ぜた飲み物で向かい入れた。思惑は成功し、アイがオレンジジュースを片手にこたつで倒れている。

「すごーい！お姉ちゃん本当に寝ちゃったよ」

本当に眠ったのかしら。マリアと一緒に近づいて寝息を確認する。すーすと、静かな呼吸音が聞こえた。

「やったわ……しばらくは起きないだろうから、今の内に早く出ましよう」

アイに申し訳ないと思いつつも、風邪を引かないよう毛布をかけてやる。二人でスーツケースを引きずりながら、慌ててマンションを後にした。ケイが車に乗る前に、せめて京都から出なくては。

「少し小走りで行くけど、大丈夫？」

「うん、早く早くっ！」

先程のアイの姿に興奮したのか、マリアがこの状況を楽しんでいるように見える。子供はずいいなと望美は笑った。

突然、強い光とシャッター音が目の前を駆け巡った。二人は思わず立ち止まる。

「そんなに慌てて何処に行くんだ？」

永市だった。望美は自分の運の悪さを呪った。

「そんな荷物引つ提げて。海外旅行にでも行くつもりか？」

何しにまた来たのか。望美は怒りを露にして叫ぶ。

「そこをどいて！私達急いでるのよ！」

強引に永市をかわすが、スーツケースを掴まれ、望美は後ろに仰け反りそうになる。

「遠出するならカメラもいるな。一日なら付き合っよ」

「そんなのお断りよ！もう関わらないでっ」邪険にスーツケースをひったくる。「マリア、行きましよう」

「アイちゃんは一緒じゃないのか？」

アイの名を出され、望美は思わず足を止めた。

「さっきまで一緒にいたよな。お前の男と交代で入っていった」

その現場もしつかり納めたのか、ぶら下げているカメラを見せ付けた。

「あんだ……人の事つけ回してよっぽど暇なのね、呆れるわ」

「何とでも言えよ。僕の感性を理解してもらおうとは思わない」

永市のカメラがマリアにも向けられる。望美は憤慨してカメラのレンズを手で押さえ付けた。

「汚い手で触るな」

「そっちこそ汚い目で見ないでよ」壊す勢いでレンズを圧迫してや

る。「だから嫌いになったのよ、あんたの事！」
「やめるよ」

大事なカメラをけなされ、永市が大人しく引き下がる。望美は無視して歩き出した。

「後悔するぞ、出かけた事！」

たった今後悔した所よ。怯えているマリアの手を引き、駅へと急ぐ。タクシーは……駄目だ、乗れない。重い荷物に戸惑いながらも、望美は歩いて地下鉄の駅に向かう事にした。

レンズに傷がないか念入りに確認すると、永市は早急に皮脂を落とした。人の商売道具を壊すつもりかよ、あいつ。永市は望美の部屋がある四階を見上げた。アイちゃんはまだ出てこない。おかしい。一人で留守番でもしているのか。

「そんなタイプではないな」

未だ痛む首を押さえながら、微笑を浮かべた。ポケットから鍵を取り出す。こんな事もあるのかと、望美の部屋の合鍵を作っておいて正解だった。言った通り、出かけた事を後悔させてやる。

部屋の前まで行くと、永市はドアに耳を押し付けて中の様子を探ろうとした。しかし、物音一つしてこない。まるで留守のような気配だった。

「アイちゃんはここにいないのか？」

永市は不思議に思いながらも合鍵をそつと回す。音に注意しながら、慎重に部屋の中に侵入した。玄関にアイちゃんらしき高いヒールの靴がある。やっぱり中にいるのだ。永市は息を殺して奥へ進んだ。リビングに顔を出した所で永市は我が目を疑った。アイちゃんがいる。いるが、こたつに頭をのせたまま眠っているようだった。右手を伸ばしたままびくりとも動く様子がない。警戒しながらも、永市はゆっくりと近づいた。

毒でも盛ったか、望美。永市は望美の大胆さに笑いながらも、今なら仕返しができるのではないかと高を括った。そうだ、あの時断られたヌードでも撮ってやろうか。毛布をそつと退けると、アイの身体をゆっくり床に寝かせた。最初に見たコスプレの服装だ。

永市は確認も兼ねて乱暴にアイの胸を掴んだ。が、アイはお構いなしに寝息を立てている。……本格的に眠りに堕ちたな。永市はとりあえず上から撮ろうとモバイルスーツを脱がせようとした。しかし、どうなっているのかびつちりとしたモバイルスーツの継ぎ目が見つからず、脱がし方が分からない。

こんな服があつてたまるか。永市も躍起になつて無理矢理伸ばして引きちぎろうとする。くそっ、もういつその事ハサミで引き裂いてしまえ。台所からキッチンばさみを持ってきて切ろうとするが、生地に食い込むだけで切れない。どうなっているんだ、この服は！

ピリリリリッ。

アイの服を脱がすのに手間取っていると、電話が鳴った。お尻のポケットからけたたましい音が部屋全体に広がる。まずい。永市は慌ててアイを突き放すと、一先隠れそうな所を探す。

「ん……………」

アイが目を覚まして、ゆっくりと身体を起こした。虚ろな目で辺りを見回す。

「痛っ……………！」

アイが頭を押さえた。顔を引きつらせ、必死に状況判断しようとしている。ようやく鳴り止まない電話を手にした。

「うん……………うん……………」

目覚めたばかりか返事が曖昧だ。

「……………ケイ、望美さんにしてやられたわ……………睡眠薬でも盛られたみたい」

眠気を覚まそうと頭を振る。電話の相手はケイか。はっきりと姿を見たことはないが、望美の男らしい背の高いハンサムな男だったのを思い出した。

「今望美さんの部屋よ……………そう……………ええ……………駅ね、わかった。急いで向かうわ」

望美とアイちゃんは敵同士なのか。望美が毒を盛ったのは、アイちゃんから逃げるためだ。だからあんなに急いでいた。二人に監視でもされていたのか。何故だ。

話が終わったらしく、アイが頭を押さえてゆっくりと立ち上がった。

「もっつ、先にしてやられるなんて……………ケイから逃げた所を狙うつ

もりだったのに」

ケイから逃げる？アイちゃんも見張られていたのか。それに狙うとは何か。

台所のカウンター下で小さくなりながら、じっと永市はアイの様子を聴き立てていた。

「何……誰かいるの？」

しまった、バレたか。アイの足音がゆっくりとこちらに近づいてくる。ここから逃げようにも、一度アイちゃんに姿を見せなくてはならない。万事休すか。

「もしかして望美さん……？そこにいるのはわかってるのよ！早く出てきなさい」

かちゃっと、何かの金属音が聞こえた。永市が仕方なく立ち上がる。目の前には拳銃を持ったアイが立っていた。

「永市さん！」

「アイちゃん……」

自分の出現に驚きはしたが、拳銃をしまう様子はない。なんて物騒な物を持っているのだらうと考えながら、ゆっくりと両手を上げた。

「見逃してくれ、アイちゃん。こないだの事は謝るからさ」

情けない命乞いをする。ここで死ぬのはごめんだった。

「どうやって入ったのよ、望美さんが入れたの？」

「いや、不法侵入した……それより急いでいるのだろうか？」

アイの先程のやり取りを思い出す。望美を追うのなら、早くした方がいいだろう。あの荷物からして遠出は確実だった。

「急いでるわ。でも、あんたと出会えて良かった。探す手間が省たわ。急いで車を出して」

そう言って銃口を自分に近づける。永市は待ったと言わんばかりに顔を引きつらせた。

「わかった、わかった。けど、状況を説明してほしい……望美とアイちゃんは仲間じゃないのか？」

「仲間じゃないわ。あたしは見張っていただけよ。それが逃げたから捕まえに行くの」

苛立ったようにアイが永市を小突く。永市は仕方なく車をマンション前に寄こすと、アイを助手席に招き入れた。

「京都駅に行つて」

自分はまだ脅されているらしく、横腹に銃口が押し付けられる。永市は冷や汗を掻きながら車を乱暴に発進させた。

「こうなったら1036の捕獲も手伝わってもらわね。車でもなきや、あの子を運ぶのもしんどいしね」

「協力するから教えてくれ。君は何者なんだ、何故望美を見張る」

アイがこちらを睨んできたので、永市は慌てて前を向く。少し間があつてから返答がされた。

「信じてくれないだろうけど、あたしは今から一五〇年先の未来から来たの。で、望美さんが連れ回している女の子も未来から来た。あの子を取り戻すのがあたしの目的」

未来から来た？そんな馬鹿な話があつてたまるか。頭ではそう思ったが、この状況で反論するには圧倒的に不利だった。永市は心の底で笑いながらも、表では信じたように深く頷く。

「なるほど。それじゃ、いくらアイちゃんの事を探しても出てこない訳だ」

「そういう事。ちなみにあたしは軍人よ。もう痛い目に会いたくないでしょ？」

面白そうにアイが笑う。永市は背筋がぞつとした。もう少し早く起きられたら、今頃身体に穴が空いていただろう。そう考えただけでも鳥肌が立った。

銃が無くなっている。ホテルに戻って金庫を確認したケイは舌打ちした。どうやらアイを甘く見ていたようだ。自分を探ってくるとは現金もいくつか盗られ、アイの荷物も見当たらない。望美の所にかくまってもらうつもりなのか。

とにかく誤解されては困ると、急いでアイに連絡する。数分間もコールした後、ようやく繋がった。

「遅いぞ、寝ていたのか」

『……………うん』

「金庫の中身について話がある」

『……………うん』

意識がもうろうとしたような返事。アイに何かあったな。ケイは慌てて部屋を出ると駐車場へと向かった。

「どうした、何があった」

『……………ケイ、望美さんにしてやられたわ……………睡眠薬でも盛られたみたい』

うーんと、受話器越しに唸るような声が聞こえる。ついに逃げ出したか、あの女。ケイは車のエンジンをかけると、急いでリアの位置をグラフで確認した。よかった、まだ京都にいる。新幹線にでも乗るつもりなのか、どうやら駅に向かっているようだ。

「アイは今何処にいる」

『今望美さんの部屋よ』

「急いで京都駅に向かえ。新幹線に乗るつもりだ、その前に捕まえる」

車を急発進させる。点滅の速度と位置からして、二人は地下鉄を利用しているに違いない。乗り換えの所を捕まえるか。

ケイは昨日の望美を思い返した。逃げ出すような素振りはなかった筈だ。ただ、本心を語らない自分に諦められた。あの時に本当の事を告げるべきだったか。

車を路上に無理矢理止め、駅員を捕まえて地下鉄から新幹線に乗換ええる為の最短ルートを聞き出す。これはもう賭けだな。ケイは走って新幹線の改札前で望美を探すが、人が多すぎてよく分からない。変装でもされていたら見抜ける自信も無かった。もう改札を通ってしまったのか。

「ふん……これも運命か」

自分を嘲笑いながら、ケイはもう諦めようかと立ち止まった。どうせ何もかもが自分と関係無くなる。逃げるなら、逃げたらいい。逃がしてやってもいい。もうマリアは関係ない。あの子はこっちの世界で暮らすのが幸せな筈だ。帰った所で、あの子の未来はないのだから。

しかし望美が逃げるのは嫌だ。それだけははつきりとしていた。何故だ、自分はその女に惚れているとでも言うのか。

「……考えるだけ無駄だな」

地下鉄の改札にも行ってみようと、ケイは人の波を掻い潜る。見つけられなかったら、自分の運もそこまでだ。強く祈願しなければ、もう永遠に会えない気がする。階段から人が津波のように目的地目

指して、溢れ出てくる。目を凝らして望美を探すが、それらしき人物は見当たらなかった。

駄目だ、完全に逃げられたな。ケイは落胆して壁に寄りかかった。汗を含んだシャツが背中に張り付いて気持ち悪い。コートを脱ぎ捨てたかったが、持ち歩くのも面倒だった。飲み物を買おうと、次は自販機を探し始めた所で、エレベーターから望美が出てきた。望美もこちらに気が付いて、慌てて新幹線とは反対方向に走りだす。

まだ運は尽きてなかったか。ケイは二人のスーツケースを頼りに走った。

望美達は下へ下へと向かっている。駅員に無理矢理スーツケースを押し付けると、マリアの手を引き、全速力で人の合間を駆け巡った。勿論ケイも走る。本気で自分から逃げられるとも思っているのか。ケイは適度な距離を保ちつつ、望美をしばらく追い回し続けた。やがて地下街の行き止まりに当たる。望美が横腹を押さえ、苦しそうにこちらを振り向いた。

「もう止める、戻ってくるんだ」

「お姉ちゃん、こっち」

ケイの言葉を無視して、マリアが指す地上への階段を上がる。

「もうふらふらじゃないか、何故そこまでして逃げる！」

望美の頼りない後ろ姿に吠える。もう体力も限界の筈だ。何故逃げ続ける。ケイは額の汗を拭くと、階段を一段飛ばしで駆け上がった。地上に出ると、望美達は交差点を渡っている最中だった。そろそろ

捕まえてやるか。ケイが足を早めた途端に、一台のミニバンが目にとまった。あの車、スピードを落とさず交差点に突っ込むつもりか。このまま進めば望美達と衝突してしまう。

「いかん、逃げる望美！」

「お姉ちゃん、危ない！」

ケイの叫びも虚しく、衝突音が辺り全体に響き渡った。次々と聞こえてくる悲鳴の数々。

なんて事だ、二人が車に轢かれてしまった！

ケイが慌てて事故現場に駆けつけると、マリアが望美をかばうようにしてアスファルトに倒れこんでいた。マリアには防御装置が組み込まれているから、あれぐらいの衝突ではびくともしないだろう。望美は無事だろうか。二人に駆け寄ると、大きく前がへこんだミニバンの運転席から黒ずくめの女が出てきた。

「アイ……」

一瞬目が合ったが、アイは何を言うこともなく、無表情のまま倒れたマリアを打ち抱えて後部座席に押し込んだ。そのまま自分も乗り込み、車と一緒に走り出す。そのあまりにも素早い行動に、周囲も騒然としていた。アイの奴、どうするつもりだ。

「おい、立てるか！」

ケイは一人取り残された望美に声をかけた。見ると望美は目を見開いて大粒の涙を流している。微かに震え立っているのが、掴んだ肩から感じ取れた。

騒ぎが大きくなる前に、一先ここから離れなくては。ケイは動かさない望美を無理矢理抱き上げると、人がいない方へと走りだした。

time 29 ・逃走

永市は震えながら猛スピードで車を飛ばしていた。アイのした事が信じられない。望美達に車ごと突っ込むなんて。

畜生！俺の車でなんて事するんだよ！後部座席にいるアイを思わずミラー越しに睨みつけた。

「ちょっとスピード出し過ぎ。パトカーに捕まるわよ」

先程誘拐してきた女の子を縛りながら、アイが文句を言う。そんなの知ったことか。得も言えぬ恐怖に駆り立てられるように、永市はひたすらハンドルを握りしめた。

「とりあえずあなたの家に連れてって。寝かせる所くらいあるでしょ？」

「これ以上俺に何を協力しろと言うんだ！」我慢しきれなくて赤信号で振り返る。「大体その子、生きてるのか！」

「生きてるわよ。この子、兵器だもの。あれくらいの衝突じゃ、びくともしないわ」

「兵器？……その子がロボットとでも言いたいのか」

「そうよ。これを回収するのが本来の目的だもの。望美さんが勝手に連れ回していい代物じゃないわ」

まだ頭が痛むのか、顔を引きつらせている。とんでもない事に巻き込まれてしまった。今なら望美が逃げ出した理由もわかる。こんな連中と一緒にいたら、命がいくつあっても足りないではないか。

「だったらもう目的は達成されただろ。早く未来とやらに帰ってくれ！」

「それが出来ないのよ。未来に帰るにはケイの車が必要な。ケイから鍵と車を奪わないと」

「もう手伝わないぞ」手汗をズボンに擦りつける。「勘弁してくれよ！」

「……そう。度胸のない男ね」

「ほつとけ！」

車体をわざと揺らすように大きくカーブさせる。アイがびっくりして小さな悲鳴を上げた。ざまあみる。

「もうっ！……協力したくないのならそれでもいいわよ。でも、あたしと一緒にいた方が、あんたも安全だと思うけど」

ミラー越しにアイの表情を確認する。この女に脅されて車を走らせている事自体、安全ではないと思うが。

「どういう事だよ」

「ケイがあんたの命を狙ってる」ミラー越しでアイと目が合った。

「ケイの目的は、あんたを殺す事だもの」

「……あのハンサム男が？何だよ、俺と関係ないだろ」

「今はなくても未来に関係してるの。未来で独裁政権をしている男の先祖が、あんたなのよ」

「だから俺を殺せば、その男も消えるって？」

「……恐らく。でも、そんな事されたら未来が変わってしまう。だからあんたに死なれては困るのよ」

「俺だつて死ぬのはごめんだ。だが、あんたと一緒にいるのもごめんだ」

「じゃあ無理にでも従って貰うしかないわね」

アイが安全ロックをわざわざ外し、自分のこめかみに銃を押し付け

た。ひんやりとした冷たさが、身体全体に響き渡り、反射的に身を縮めさせる。

「俺に死なれては困るんだろ、撃つ気のない脅しをしてどうするんだよ」

「あら、生命維持活動が出来れば問題ないのだから、手足の一つや二つくらいもぎ取っても問題なくて？」

アイが狙いを足に定めた。

「やめろよ！」永市は邪険にアイの腕を除けた。「わかったから、従うからもうしまってください」

最初っからそうすればいいのよ、とアイが勝ち誇った顔で銃をハンドバッグにしまった。畜生、これでは復讐する所か、されっばなしではないか。永市は屈辱的に顔を歪ませてハンドルを切った。

かなりの遠回りをして自宅の前に着くと、有無を言わず女の子を運ぶよう指示される。抱き上げるのには重く、仕方なく永市は背負い引きずるように玄関に転がり込んだ。思わず女の子の頭を床にぶつけてしまったが、それよりも自分の心配の方が大きかった。

「このソファ借りるわよ」

そう言ってアイが勝手に雑誌やらテープやらが積み重なったソファを動かし、問答無用に上の邪魔な荷物を排除する。永市はしぶしぶ

女の子をソファに座らせると、一息ついて床に腰を降ろした。

「はあ、この子……相当重たかったぞ」

「あたしより重いわよ……さて、どうやってケイから車を奪おうかしら」

何やら楽しそうにアイが部屋の中をうろろし始めた。自分の部屋はあの時と何ら変わっていない。照明は一つ壊れてしまっているが。

「おい、もつと状況を詳しく教えてくれ。こっちは未だ把握しきれしていない」

分かっているのはこの女が未来から来た事、そしてこのロボットらしい少女を取り戻しに来た事だけだ。その目的は達成された訳だが、何故望美がこいつらと一緒にいたのかが分からない。

「そうね……じゃあもう少し教えてあげるわ。あたしも今の状況を整理したいから」

何か飲み物くらい出しなさいよ、とアイが催促するので、永市は冷蔵庫を開けた。しかし飲み物らしき物が何も無い。仕方ないのでわざわざ自販機まで買いに行く。コーラを買い、わざとアイの分を思いつ切り振ってから渡す。

「何か盛ったりしてないでしょうね」

が、あっさり自分のと交換させられてしまった。

time30・兵器の MARIA

だれかの話し声がする。

MARIAがうつすらまぶたを開けると、目の前に男の背中と、アイさんの顔が確認出来た。

「へえ、じゃあこの MARIA って子はそんなにすごい兵器なのかよ」

男がこつちをふり向いたので、MARIAはあわてて寝ているふりをした。今、起きてはいけない気がする。

「問題はどうかやって未来に帰るかよ。車をうばったとしても、明後日までここを動けないわ」

「時空の流れとやらでか？……はあ、未来のタイムマシンは不都合だな。とつととあなたに帰って欲しいのに」

「あたしだって好きで一緒にいるわけじゃないわ。こんな変人を守らなくちゃいけない立場も考えてよ」

「ふん、変人で悪かったな」

おそらく男の方が立ち上がり、足音が自分から遠ざかって行った。続けてもう一つ足音が遠ざかって行く。

どうしよう、今なら起きても大丈夫だろうか。MARIAはゆっくりとまぶたを開けると、辺りを見回した。ところせましと雑誌や本などが積み重ねられ、足元にはなぎ倒されたのか色々な日用品が転がっている。あの男の人の家だろうか。お姉ちゃんはお姉ちゃんは何処なの？MARIAがあわてて周囲を見回すが、お姉ちゃんらしき人物は見当たらなかった。そしてなぜか自分はいはられていて、思うように動くことも出来ない。

「おう、起きたのか」

後ろで声が聞こえたのでふり返ると、先ほど自分に背を向けていた男だった。背が高く、わりとがっちりしていて、遊んでいそうな男。前に一度会った事がある。この人、たしかお姉ちゃんの元だんなさんだ。

「お前も俺もさんざんな目にあつたな……アイちゃんはどうした」
分からないので首をよこにふる。男はそうかと言って、マリアのしほりをといてくれた。

「何もしばることはないよな……お前、さっきの話聞いてたか」
さっきとは、いつからどこまでの話の事だろうか。マリアは返答にこまり、周囲を見わたした。そうだ、お姉ちゃんはどうしたのだろう。

「あの……お姉ちゃんは？」
「お姉ちゃん？……ああ、望美の事か。さあな。今ごろハンサム男と一緒にいるんじゃないか」

ぼん、と頭に軽く手を置かれる。そうか、自分はゆうかいされたのだとマリアは気が付いた。

「私……ゆうかいされたのですか？」
変な質問をしてしまったらしく、男が鼻で笑った。

「ゆうかい？……だったら俺もゆうかいされているようなもんだな。」

俺もアイちゃんにおどされているんだよ」

アイさんに？どうしてだろう。

「どうしてですか？」

「こつちが知りたいよ。とにかく俺はケイと言う男にねらわれているらしい。そいつから守るためだとさ」

ケイさんがこの人を？マリアはわけがわからなくなった。自分はさつきまでお姉ちゃんといつしよに、ケイさんから逃げていたはずだ。そつだ、道路をわたつていた時に車が突然現れて……気がついたらここにいた。でも、お姉ちゃんはここにはいない。自分だけが連れて来られた。

「どうして私だけ連れて来られたのですか？」

「お前、未来の兵器なんだよ。知ってたか」

兵器……。マリアは自分の手足を見た。そう言えば車とぶつかったはずなのに、どこもけがをしていない。おかしい。

「お前、実は強いんだろ？だったらアイちゃんからにがしてくれよ、たのむ！」

頭を下げられても、マリアはどうすればいいのかわからない。普通の女の子ではない、と周りの状況から感じ取っていたが、まさか自分が『兵器』だとは思ってもよらなかった。お姉ちゃんと会う前の記憶が無いのも、自分が機械か何かだからとでも言うのか。

「そんな事言われても、困ります」

自分の事が一番分からなかった。いや、考えないようにしていただけなのかもしれない。ただお姉ちゃんといっしょに暮す。それだけで良かったのだ。

マリアは異物を抱えこむように両手で顔をおおった。水分が目からあふれ出るのを皮ふで感じる。良かった、涙は出るみたいだ。

「悪い、泣かせるつもりはなかったんだ」男が近くにあったタオルを差し出した。「俺も余裕がないんだよ」

タオルにあるていど感情を押し流すと、マリアは立ち上がって外を見た。ここは二階だ。これくらいの高さなら自力で下りられない事もない。ふと前が大きくへこんだ青い車が目に止まった。あれだ、自分がぶつかったのはあの車だ。

マリアはもう一度自分の身体をゆっくりとながめた。やっぱりどこもけがをしていない。痛みもない。自分は、人間ではない。しかし、その事をすなおに受け入れている自分もいる。どうしてだろう。なぜか今、おどろくほど冷静だった。これも機械だからとも言えるか。

お姉ちゃん、大丈夫かな。マリアは外の日がしずむ様子を、じっとひとみに焼き付けた。

time 31・ベンチ

打った左肘と右手の平、左骨盤が痛みを帯びてきている。望美はケイに連れられ、外のベンチに腰を下ろしていた。ケイが近くの自販機で缶コーヒーを買ってきたらしく、一つ望美に手渡す。

「少し落ち着こう」

ケイが懐からハンカチを取り出すと、涙をふけと差し出した。涙など、とつくの昔に枯らしてきたはずなのに。湿っぽいハンカチを目頭に当て、鼓動が静まるのを待った。

散々腫らしてきた瞳に映しだされたのは、こちらに突進してくる車。逃げなければ、避けなければと頭が危険信号を発していたのに、自分は足が竦んで動けなかった。

『お姉ちゃん、危ない!』

先にいたはずのマリアが、自分を庇うように車を背にしてしがみついた。衝突時の事ははつきりと思いつけないが、気がつくとも目の前に黒づくめのアイちゃんがいた。マリアを抱き上げ、ぶつかった車の後部座席にマリアごと消えてしまった。何が起こったのか、未だに理解出来ない。とにかく、マリアが自分からいなくなってしまう。マリアを守る、育てると誓った自分は何処へ行ってしまったのだろう。

ケイは黙って望美の隣に腰を下ろすと、プルタブを開け、コーヒーを飲み始めた。望美もそれに倣う。温かくて微かに塩っぱい。

「マリアは無事だから安心しろ。アイに事情を聞く。望美は、怪我してないか？」

固いアスファルトに打ち付けた所がズキズキと痛んだが、望美は首を横に振った。腫れた瞳を寒気にさらす。ケイが小型イヤホンを取り出してアイに連絡を試みたが、繋がらなかったらしく、すぐポケットにしまってしまった。

「マリアは……兵器だから平気なのね」

一番認めたくなかった事実。マリアは、人間ではない。人の形をした未来の兵器。車が突進してきても、自分はマリアのお陰で吹っ飛ばされることはなかった。この程度の打ち身ですんだのが、何よりの証拠だった。

「あれくらいの衝撃では、びくともしないように作られている……
……それよりも、どうして逃げた」

ケイが冷たく、悲壮を滲ませた顔をこちらに向けた。その目に耐え切れなくて顔を背ける。

「マリアを貴方達に返したくなかったの。だって、未来に帰ったら、マリアは死ぬんでしょ？」

「……………」
「なのに協力なんて出来ない。マリアはこの時代にいた方が、よっぽど幸せなんじゃないの？」

ケイは缶コーヒータを持っただけ、微動だにしない。その澄ましたような顔が気に喰わなかった。

「……何とか言ったらどうなのよ。だからアイちゃんも裏切るのよ。この計画を持ち出したのも、元々はアイちゃんなのよ」

アイの裏切りを知っていたのか、ケイはそうかと呟やいただけだった。

「本当は三人で遠くに逃げるつもりだったけど、私はアイちゃんからも逃げたかった。だから睡眠薬で眠らせて、家を抜けだしてきたの。アイちゃん、銃で私を脅してきたわ。大層怒っていたみたいだけど、貴方達に何かあったの？」

「……アイに金庫の中身を見られた。その中には俺の銃と現金、そして家系図が入っていた。その家系図は、俺が未来で独自に調べていた物だ。ある男を探す為にな」

「その男が、私の元旦那なんですよ？」

「何だ、知っていたのか」

ケイが少し驚いた様子で笑った。

「アイちゃんから聞いたわ。未来で独裁している宮本、元いマリアの父親の先祖が私の元旦那、永市京介だと。ケイが永市を殺そうとしているとも、アイちゃんは言っていたわ」

「アイの奴も、お喋りだな」

「でも永市を殺したら、未来が変わってしまうのよね？……ケイはどうするつもりなのよ」

飲み干したコーヒーを手にして、ケイが立ち上がった。

「俺は、未来を変えに来たんだ」

望美はケイの言っている意味が分からずに、その背中を見つめた。

こんな時にでもケイがかっこいいと思えてしまう自分が悔しかった。

「俺は未来に帰るつもりは無い。永市を殺して、自分も消えるつもりだ。アイとマリアの事をよろしく頼む」

そう言って一人歩き出してしまった。慌てて望美も立ち上がる。

「待って！消えるって、どういう事よ。そんなの勝手過ぎるわ！」

ケイのコートの裾を掴んだが、その手を逆に握り返されてしまった。望美がびっくりしてケイの顔を見たが、素知らぬ顔で手を繋ぎ続けている。年甲斐もなく顔を赤くした望美は、恥ずかしくて下を向いた。ただでさえ泣き腫らして無様な顔をしているのに。何だかこの上ない罰ゲームでも受けているかのような感覚だった。でも、悪くない罰ゲームだ。そう思う自分が更に恥ずかしくなって、黙って下を向いた。

time 32 残された二人

駅で無理矢理預けていったスーツケースを取りに戻った後、望美はケイと二人で自宅に帰った。流石に施錠まではされていなかったが、部屋は朝出てきた時のままだ。

ケイと二人で薄気味悪いリビングに立つ。お互い何も言わないまま、しばらく静止していた。流石に手はもう繋いでいないが、やはり気まずい。望美は耐え切れなくなって、言葉を切り出した。

「何か飲む？……それとも、食べる？」

「そうだな……正直お腹も空いているな」

ケイがコートを脱いでテレビを付けた。既に紅白歌合戦が始まっているようだ。年明けを沖繩で過ごす予定だったのに、結局去年と同様、自宅で過ごすことになりそうだった。望美は苦笑して台所に立ったが、冷蔵庫を開けて碌な食材が入っていない事に気づくと止めた。

「ねえ、先にお風呂に入らない？」

散々走らされたので、下着は充分に汗を吸っているはずだった。恐らくケイも同じだ。

「何だ、誘っているのか？」

そんなつもりで言った訳じゃないが、先程からのケイの行動に、何処かで期待してしまっている自分がいるのも確かだった。ケイは笑

って答えてくれたが、目はそのまま望美の方に寄越していた。その目に野生のオスがいなかったと望美は探る。今、この家には二人しかない。二人しかないが、自分は何を考えているのだ。

愚かな期待を揶揄するかのように、電話が鳴った。自分の携帯からだ。望美はダウンジャケットから携帯を取り出すと、知らない番号が表示されていた。

『もしもし、お姉ちゃん？』

何とマリアからだった。望美は確認の為にマリアの部屋に入ってみたが、勿論誰もいない。

「マリア、無事だったのね。今何処にいるの？」

『永市さんの部屋。お姉ちゃんの方こそ大丈夫？怪我してない？』

してない、大丈夫と何度も頷きながら答えた。良かった、マリアが生きていて。マリアの声が聞けて。

「どこから電話しているの？今、一人？」

『ううん、永市さんと一緒。アイさんは何処かに行っちゃったみたい。だからアイさんに内緒で永市さんの携帯電話を借りて、電話しているの。お姉ちゃんの番号覚えてたから』

あの男も一緒なのか。望美は露骨に顔を歪めたが、とにかく無事らしいので安心した。

『ねえ、お姉ちゃん。一つ聞いてもいい？』

「何？」

『私、人間じゃないんだよね？』

言葉は鮮明に聞き取れたが、望美は携帯を握り締めながら動けなくなった。口の中が急速に乾く。何言っているの、マリアは人間じゃないと、口から出任せが言えそうにもない。躊躇うのは、肯定しているのと同じではないか。

『お姉ちゃん、私はもう知ってるし、大丈夫だから。不思議な事だけど、何故かそれを受け入れているの』

淡々とした口調。マリアが急に大人びてしまった。マリアだって気が付いているのだ、もう隠す必要は無いのだろう。

「……そうらしいわね。確かに、マリアは人間ではないかもしれない」「心を落ち着かせるように胸に手を当てた。「でも、私はマリアのお姉ちゃんになりたい」

偽りではあるが、ようやく取り戻せた家族の繋がりを、こんな形で断ち切りたくはない。そうよ、妹を助けなければ。望美は腫れた瞳を持ち上げた。

「今から迎えに行くわ。永市の家はどの辺りなの？」

『分からない。目が覚めたらここに居たから』受話器の向こうでドアの開く音が聞こえた。『迎えは少し待って。とにかくお姉ちゃんが無事で良かった』

「待って、マリア。どういう事なの」

ここで通話は終了させられてしまった。マリアは助けを求めることなく、自分が無事だと告げただけだった。望美が心配を感じて振り返ると、いつからそこに居たのかケイが立っていた。

「マリアからか？」

「ええ、今永市の部屋にいるそうよ。アイちゃんに内緒でかけてくれたみたい」

「そうか。アイとは未だ連絡がつかない……全く、困った部下だ」

「何よ、困らせた原因は貴方にあるんでしょ？」望美が意地悪く突いた。「アイちゃんは、貴方の真意を知りたがっていたわ」

ケイが眉間に皺をよせて難しい顔をした。

「確かにマリアが連れ去られたのは俺の責任でもある。一先車取りに戻るから、望美はここにいろ」

「ちよつと、今からマリアの所に行くつもりなの？」

ケイを止めようと反射的に動いた手を慌てて引つ込めた。また握り返されてはたまらない。その代わりに望美はケイの顔をじつと見た。ケイには、マリアを取り戻す気はあるのだろうか。

「いや、それはアイと連絡が付いてからだ。今動いても、アイは永市を人質に取るだろう」

「その方が都合いいんじゃないの？どうせ殺すつもりなら」

嫌味を言ったつもりだったが、ケイは露骨に悲しい顔をした。

「随分と冷たい女だな。あれでもお前の元旦那だろう？」

「もう関係ないわ。あいつが死のうが生きようが、私にはどうでもいい事なのよ」

本当にどうでも良かった。一度でも愛した男を、こつも見殺しにするとは自分でも意外だった。五年という歳月が、ここまで自分を冷酷に仕立て上げたのかもしれない。ケイに冷たい女だと言われても

仕方ないか。

「関係ない、か。一応励ましの言葉として受け取ろう」ケイがコートを着直す。「俺が永市を殺しても、望美は何とも思わないのか」
「……おそろく」

二人は互いに見つめ合った。二つの瞳から真意を読み取るうとする。その黒々とした瞳から、しばらく目を逸らすことが出来なかった。

「本当に車を取りに戻るだけだ、待っていてくれないか」
「そう、わかった。お風呂にでも浸かって待っているわ」

ケイの横をすり抜けてリビングに戻るうとしたが、不意に腕を掴まれ、後ろから強く抱きしめられた。突然の抱擁に再び身体が疼き、鼓動が一気に早くなる。

「マリアは必ず取り返す。だから望美は安心して待っていてくれ」
自分がまた逃げ出すとも思ったのか。ケイの大胆な行動に望美は嬉しくてたまらなかったが、いかにも平然とした態度で対応する。

「その言葉、信用出来るの？」
「信用してもらえない……帰ったら、事情を説明する」

支えを失った望美は、しばらくその場で立ち尽くしていた。この状況に酔いしれてしまいそうだ。汗臭くなかったかしら、と望美は自分の服の匂いを嗅いだ。やっぱり汗臭い。今日は念入りに身体を洗っておこうと、急いでお風呂場に向かった。

自分の身体を綺麗に磨き上げ、鏡とにらめっこしながら化粧水を叩く。すっぴんだと自分がいかに老け込んでいるのか安易に知れた。おまけに涙で腫れた瞼が重くのしかかっている。こんなおばさんが何を期待しているのだ。

鏡の向こう側の自分に言い聞かせると、望美は顔を叩いて立ち上がった。情に流されてはいけない。かつこいいからと、許してはならない。マリアが居なくなつた事を喜んでは、ならない。

自分に強く暗示をかけると、望美は冷蔵庫の中をもう一度見た。やっぱり何も無い。でも、お腹は空いている。ケイもお腹を空かせていたはずだ。望美は面倒だと思つたが、コンビニで何か買ってこようとダウンジャケットを着て出かける支度をした。そこにちょうどケイが帰ってきた。手には何かを買って来てくれたらしく、ビニール袋をぶら下げている。

「何だ、何処かへ出かけるのか？」

そして望美の格好にケチを付けた。

「何も食べるものが無いから、買ってこようと思つたのよ」先程来たダウンジャケットを脱ぐ。「何か買って来てくれたの？」

「ああ、寿司は平気か？」

むしろ大好物よと望美は笑つた。ケイの好意に甘え、二人でそれを頂く事にする。出来合いの寿司で悪かつたなとケイが詫びたが、一日碌に食べてない望美には大層美味しく感じた。

「マリアは、ちゃんとご飯食べているかしら」

隣にマリアがいないのを、寂しい気持ちで見守る。ケイもマリアがいつも座る指定の席を確認した。

「流石に監禁まではしていないだろう。車でも確認したが、マリアは永市の家にいる。アイがどう出るつもりなのかは知らんが、京都から出ることはないだろう」

「どうして？」

「転移出来るのは明後日だ。恐らくアイは俺から車を奪おうと考えているはず。その時を見計らって、俺も行動に移す」

「あの男を殺すのね」口の中をお茶で流し込む。「未来を変えたら、ケイが消えるって、どういう事よ」

その問いにケイは黙って箸を置いた。望美も改まって箸を置く。テレビから溢れ出す蛍光色が、激しく移り変わりするのを横目で確認した。一瞬テレビを消そうかとも考えたが、音源が無くなるのは耐えられそうもない。望美はそのまま続けた。

「まだ何か隠しているんでしょ。そうやって肝心な事を言わないから、アイちゃんにも愛想つかされたんじゃない！」

いつもお茶を濁すような発言、行動に望美も不満を抱いていた。気がつけばケイやアイ、永市という第三者に振り回されてばかりではないか。今だってケイと二人っきりの状況に心が乱されている。この状態が良くない事も充分把握していた。

「確かにそうだな……しかし、俺は私情でここまで来た。アイに余計な迷惑をかけさせたくなかったんだ」ケイがお茶を一気に飲み干した。「一つ、本当の事を教えてやるよ」

「何よ」

「マリアを逃がしたのは、この俺だ」薄ら笑みを浮かべ、こたつに肘をつく。「表面上ではマリアの捕獲として過去に来ているが、実際は永市の暗殺が目的。俺が手を回してマリアをこちらに転送させた」

望美は愕然として、次の言葉が出てくるまでに時間がかかった。

「……そこまでして、ケイは永市を暗殺しなければならぬわけ？」

マリアに対するケイの態度を思い出してみる。あれは慈悲だったという訳か。

「そうだ。もう未来はどうしようもない所にまで来ている。だから俺の手で一度リセットするんだ。言っただろ、未来を変えに来たと」
「だったら、何で今この時代に来たのよ。そんな事考えているなら、人類の歴史からリセットさせれば？自分の私欲の為だけにマリアや私達を巻き込んだって言うの？」

「未来の技術でも、この時代まで転移させるので精一杯だった。だったら、この時代から歴史を塗り変えてやればいい」ケイが望美に向かつて笑った。「多少の犠牲は付き物だ」

「犠牲つて……それじゃ、未来を生き抜いている人はどうなるのよ。その人達を見殺すのも、多少の犠牲なの？」

「未来の人がどうなるかなんて分からない。なんせ、誰も未来を変えたことが無いからな。だから俺はやってみたいんだ。それが自分の身を犠牲にする事だとしても、だ」

望美は急に目の前の男が恐ろしく思えた。本気でケイは未来を変えようとしている。それが永市の暗殺。アイが未来の独裁者、宮本を危険人物扱いしていたが、今日の前にいるこの男の思想だって充分

に危険だった。

「何が……ケイをそこまで変えさせたいのかが分からないわ。自分の身を犠牲つて、ケイは永市を殺して自分も死ぬつもりなの？」

「……………」
「私にマリアやアイを任せるつて、そういう事でしょ？……どうなのよ」

ケイは何も言わない。だが、その目が全てを語っていた。

「正確には、自分がどうなるのか分からない。俺は死ぬかもしれないし、生きているのかもしれない。それでも、自分の運命を断ち切りに来た」ケイが望美の手をそつと握った。「過去に来て、一ついい事があつたな」

ケイの手が震えている。それが何故なのか、望美は知る余地もなかった。

「それで口説いているつもり？結局怖いんですよ、未来を変える事が」

手を離そうとしたが、ケイの方が力に部があるので動けない。二人はこたつの上で手を握り合うという、おかしな体勢になった。

「そつだ。予測できない未来ほど怖いものはない……現に今だつて、望美に惚れるとは思つてもみなかった」

真つ直ぐ自分に注がれる熱い視線。ケイの軽弾みな発言ではないと望美は分かっていたが、それでも冗談だと言つて欲しかった。逃げたかつた。でなければこのまま甘い誘惑に眩暈を起こしてしまいそ

うだ。

「冗談……言わないでよ……」

顔をケイから背け、そう言い返すのがやっとだった。恥ずかしさで涙が込み上げてくるのを必死で耐える。

「冗談だと思いたいのなら聞き流せばいい。自分でも不思議でたまらない。自分の身がどうなるのかさえ分からない状況なのに、望美を愛してしまった自分がある……俺は本当にどうかしているな。出会って数日しか経っていない女を好きになるなんて」

動揺を見せまいと、望美は冷静さを保つよう努力した。しかし、いくら念じても心臓はうるさくてかなわないし、顔の赤みも引きそうにもない。自分もケイの事が好きだった。好きになった自分を認めたくなかった。

「本当、私もどうかしているわ」

それを承諾の言葉と解釈したのか、ケイが身を乗り出し、優しく唇を落とした。避けようと思えば避けられたはずなのに、身体が言う事を効かない。久しぶりの感触に身体が疼き、望美は身を委ねるしかなかった。

あんなにケイから逃げたがっていたのは、こうなってしまうのを恐れていたからだ。頭の片隅で、そう思った。

time 34・ケイとシヨウ

微かに汗の混じったシャンプーの匂いを、ケイは頭を撫でながら確認した。望美が隣で気持よさそうに寝ている。昼間あんだけ走り回って、泣き喚いたのだ。よっぱど疲れたのだろう。子供のように眠る望美の寝顔を見ながら、自分はこれで正しかったのだろうか考えていた。

自分の身がどうなるのか分からない状態で、望美を抱くとは。マリアに対しても不謹慎だったと後悔もしたが、やがて考えても仕方が無いのだと行き着き、ケイも眠るように努めた。案外、眠りは早く訪れてくれた。

もう十年以上前の、自分がまだ東の軍に所属していた頃の出来事だった。

何処かの森で自分は野営をしている。すぐ後ろには寝袋と、食料などが詰め込まれた大きなリュックサックが転がっていた。月明かりも乏しい中、携帯ライトを駆使して、ケイは銃の整備をしていた。

「ケイ、こんな所にいたのか」

茂みの中から背が高く、厳つい短髪の男が出てきた。シヨウだ。シヨウとは同期の中でも自分と一、二を争う実力を兼ね備えた男で、互いに尊敬し合うライバルのような関係だった。ケイは何事かと身構える。

「おいおい、警戒しなくても大丈夫だ。何も起こってねえよ。何か起きないと話しかけちゃいけないのか？」

シヨウが笑いながらケイの隣に腰をかける。ケイもそんな事はない、と銃をしまった。

「一人でこんな所陣取って寂しくないのか？」シヨウは辺りを見渡して悟った。「何だ、主要道路を見張っていたのか」

「一人の方が気楽だからいい。お前は仲間と騒いでいたんじゃないのか？」

ケイが明かりと笑い声の漏れるテントを顎で指す。不満そうな顔をしてシヨウが言った。

「あいつ等とはうわべだけだからいいんだよ。みんな、自分の事しか考えてない奴らばかりだ」

「ふん、所詮人間なんてそんな物だろう」

ケイは空を見上げた。星も見当たらず月がぼやけているので、明日は雨になりそうだ。

「ケイは冷たいなあ。お前、女出来たか？」

若干小声で尋ねてくる。ケイは首を横に振った。

「女は男より自分勝手だから面倒だ」

「なるほど、そう言われればそうだな」

「シヨウは確か結婚していたな」

「ああ、この任務が一段落したら帰るつもりだ。もうすぐ生まれそ

うなんだよ、子供が」

「へえ、それはめでたいな。男の子か？」

「いや、女の子だ。名前はもう決めてある」シヨウは木の枝で地面を掘る。「真理を愛すると書いて真理愛だ」

「……いい名だな。しかし、俺に教えてもいいのか？他人に明かすかもしれないぞ」

本当の名は滅多に口にだしてはならない。何故なら、生殺与奪の権利を相手に握られてしまうと、古い迷信が軍では根付いているからだ。いつ何処で敵が聞いているのか分からない状況。名を明かさないのは、軍では暗黙の了解とされていた。

「お前は口が堅いから大丈夫さ。それに、自分の名を語れないなんて、悲しくないか？……こんな国、間違っているよな」

そう言ってシヨウは遠くを見つめる。シヨウが向いた方角には、東軍の本部があった。上のやり方に多少反発しているのだろう。人情や正義感の強いシヨウなら尚更の事だった。

「なるようにしか、ならないさ。この国も、世界も」

「諦めが早いなあ。……もうすぐ日本は東と西に分断させられる。

お前、どうするつもりだ」

「どうするって、何を」

「気付いていないと思ったか？お前、本当は西の人間だろ」

シヨウが鼻で笑う。ケイは黙って地面に彫られた名前を見つめた。

「イントネーションが若干違う。早く西に移ったほうがいい、その内帰れなくなるぞ。俺は国内紛争が始まりそうな気がしてならないんだ」

「……そうだな。シヨウにはれるようじゃお終いだ。そろそろこの軍を離れようとしていた所だ、丁度いい」

「お前は頼りになるエースだったのにな。同期の中じゃ、ケイが一番銃の扱いが上手いと俺は踏んでいる」

「よせよ、褒めても何も出ないぞ」

「だな。一先俺は上を目指すよ。俺はケイの次に上手いからな」

そう言っつて銃を構える仕草をする。ケイは笑っつてその後ろ姿を見守った。

「なあ、人間っつてどうして争うんだらうな。俺は不思議でならない」
急に哲学めいた事をシヨウはよくぼやく。そういう時ケイは、適度にあしらうよう心がけていた。

「そんなの、神様にでも聞いてくれ。俺達は任務をこなしていくだけだ」

「その任務を下すのも人間だ。おかしいよな」

木の節目に狙いを定めたシヨウが、バーンと口で射撃する真似をした。

「……お前、上に行っつてどうするつもりだ。この国を変えようと言っつのか？」

「さあな、それも面白いかもしれない」シヨウは地面に書かれた名を足でもみ消す。「お前も西で上を目指せよ、その時はお互い清々堂々勝負しようぜ」

「馬鹿な事言っつな。俺はお前と戦っつつもりはないよ」

「でも、もしその時が来たら戦っつたら？」

シヨウは自分に笑って問いかけるが、黒い瞳は真剣そのものだった。ケイは耐え切れず目を逸らす。

「……分からない。その時になってみないと。そもそも、生きているかどうか分からないじゃないか」

「生きているさ、きつと。俺もお前も。そんな気がする。いや、そうじゃないと困るな」

シヨウがわざわざ革手袋を取って、右手を差し出す。ケイは一瞬戸惑ったが、シヨウの敬意に対して応じた。

「教えてくれよ、お前の本名。どうせ明日にでもこっさり隊を抜け出すつもりなんだろ？」

「ふん、よく分かったな」

「顔に書いてあるんだよ。俺の名は宮本翔一、お前は？」

「俺は……永市恵一郎だ」

永市のうるさいいびきでマリアは眠れず次第に腹が立ち、身体をけたくって布団からはい出た。それでも眠りこけている永市の姿に怒りがわいたが、この男もよっぽど疲れていたのだろう。何せ自分といつしよに寝てほしい、と頼みこんできたのだ。この状況に精神がついていないのだとマリアは分析する。もちろん断ったのだが、知らないうちに布団の中に入りこんできたのだった。

マリアは冷ややかな顔でようちな男にため息をつく、何か飲み物をもらおうと部屋から出た。ソファで寝ていたはずのアイさんがいないことに気づく。お手洗いかな。マリアは気にせず冷そう庫を開けたが、自分が飲めそうな物が見当たらなかった。仕方なく水道水を飲んでみると、玄関のドアが静かに開けられる。アイさんだった。

「あれ、マリアちゃんどうしたの？」

ふるえながらダッフルコートを脱ぎ捨てる。

「のどがかわいたので。アイさんこそ、外で何をしていたのですか？」

コートの代わりに毛布をはおり、電気ストーブを付ける。そのままソファに座ると、マリアを手まねきしてくれた。

「じよやかなねってやつを聞いてたのよ。新年も明けたことだしね」

アイが壁にかけられた時計を見たので、マリアも時刻を確認する。

午前二時十二分。そうか、年号が変わってしまったのか。

「もしかしてアイさん、眠れなかったのですか？」

アイの目が赤いのを、ストロブの灯りで確認した。外で泣いていたのかもしれない。自分を命令していた人間がいないので、次にどうしたら良いのかわからなくなっているのだろう。

「ごめんね、マリアちゃんにひどい事しちゃって……」

頭をなでられ、昼間のアイさんとは別人のようにうなだれていた。今ごろになって、ケイさんに逆らった事をこうかいしている様子だった。

アイさんは感情的で行動力もあるが、計画性というものが感じられない。頭はそれほど良くないようだ。

「アイさん、これからどうするのですか？」

どうしよう、とひざを抱えてストロブの灯りを見つめている。次にする事は、未来に帰るための車の調達だと言っていたではないか。

「車をケイさんからうばわないと、帰れないですよ」

わかってるわよ、と力なく返事をする。アイさんは根本的に優しい人なのだ。ケイを裏切っている自分に後ろめたさを感じていると思われる。

マリアは今まで、ただゲームや漫画を読んだりしてすごしてきたのではない。お姉ちゃんの話し声に耳をかたむけ、その一部始終をきおくしてきた。どうしてそんな事が出来るのだろうとふしぎに思っていたが、自分が機械だと知り、納得出来た。私はロボットか何かだったのだ。だから車にぶつかってもけが一つしないし、お姉ちゃ

んに出会ってから今日までの事を一言一句全て覚えている。以前の事を何も思い出せないのは、記憶自体が何らかの原因でこわれてしまったのだろう。

そういえば自分は、何かすべき事があった。そのすべき事とは何なのだろうか。

「アイさん、一つ聞いてもいいですか？」

「何？」

「私の未来での役目は何ですか？ここに来る前の、自分の事が知りたいです。それと、今置かれている状況を出来るだけくわしく教えてください。」

始めはアイさんもしぶり、中々教えてくれなかったが、この状況を打開できるヒントが見つかるかもしれないと告げると、嫌々ながらも語ってくれた。

自分が未来の兵器だと言う事、そして未来での自爆計画。しかしその前に何者かによって過去に転送されてしまった事、ケイさんの裏切りの事。それらの情報と、過去のきおくからマリアはシミュレートする。次に自分達がどう動くべきか。

「アイさん……私、未来に帰ろうと思います」

アイは困った様子で苦笑いした。

「今の話を聞いて、よく未来に帰ろうと思ったわね。未来に帰ったら、マリアちゃんは殺されるのよ」

「それが私の生まれた理由なら、かまいません。私が死ぬ事によって、戦争がおさまるのなら本望です」

この意志までもがプログラムなのか。口に出してからマリアは疑問

に思った。この世に未練が無いと言ったら、うそになる。本当はお姉ちゃんもつといつしよにいたい。もつとゲームで遊びたいし、漫画の続きだつて読みたい。しかし、自分は元々未来の人間、いや、機械なのだ。あるべき所に戻らなくてはならないだろう。アイがやれやれと言った様子で、マリアの頭を強く撫でた。

「あなた、やつぱり西日本政府の最高機密だよ。未来に帰ったら、望美さんともう会えないけど、いいの？」

マリアは一度お姉ちゃんの声と顔を思いつかべてから「大丈夫」と言い聞かせた。自分がきおくし続けている以上、お姉ちゃんはマリアの中で生きている。見ず知らずの自分をかくまい、優しくしてくれた。そのきおくだけは消させない。マリアは覚悟の上で同意した。

「でも、最後にお別れくらいは言いたいです」

「分かっている。あたしも睡眠薬を飲まされた恨みがあるけど、望美さんの事嫌いじゃないしね」アイの目にいつもの輝きが戻ってきた。「送別会でもしよっか」

アイがポケットから小型イヤホンを取り出す。ケイとのやり取りをずっとこぼんできたその手が、強くイヤホンをにぎりしめた。

time 36 ・計算上の答え

「明日……朝一にケイと連絡してみるわ。マリアちゃんには悪いけど、ケイの真意を知るまでここにいてもらうから」

マリアはゲームも漫画も無い暗い部屋を見わたした。隣の部屋からは相変わらずいびきが絶えない。

早くお姉ちゃんの家に戻りたかった。未来に帰るのは明後日、いや、日付をまたいだので、正確に言うなら明日。もう時間はあまりない。あの男と、まだいっしょにいなければならないのか。

「アイさん、ケイさんと取引してみたらどうでしょう？」

「取引？」

「ケイさんの車と、永市さんを取引するのです」マリアはたんたんと続けた。「ケイさんは永市さんを殺したがっているのですよ？」

自分でも恐ろしい事を述べているのはわかっている。しかし、それが今出来そうな最良の方法だった。アイはとんでもない、とそくざに反対した。

「それは駄目よ、未来が変わってしまうわ。永市を守りつつ、車を手に入れないと」

「先に私達が未来に帰ってしまえば、問題ないと思いますよ」

マリアの言動に、アイはおどろいた表情をよこした。

「どうしてそう言えるのよ」

「ケイさんはおそらく、未来に帰るつもりはありません。最初から私とアイさんだけを、未来に帰すつもりだったと思われれます」マリ

アはケイの表情と言動、行動を全て思い起こした。「ケイさんは二つの任務を成功させるつもりです。私を未来に帰すのと、永市さんの暗殺。だから私達はにがしてくれるはずですよ。車の運転は、アイさんも出来ますよね？」

アイが興奮気味でうなづく。

「出来るわ。ケイから教えてもらっていたもの」

「そうですね、なら話は早いです。私達が未来に帰るまで、永市さんを殺さないようたのめばいいのです」

マリアはいたって真面目に答えたのだが、アイはがっくりとうなだれた。

「そんな簡単に、ケイが言う事を聞くとと思う？それに未来に帰っても、ケイが永市を殺したら結局未来が変わって、意味ないじゃない」

マリアはその問いに対して答えを導き出した。

「私達が先に未来に帰れば、私達のいる未来は変えられないはずです」瞳を閉じ、マリアは計算する。「時間軸を変えるのは、私達のいない未来。つまり現在進行形の未来。しかし私達が未来に帰れば、過去に私達はいなくなる。変えられてしまうのは、私達のない過去での未来。違う世界の時間軸を変えられるだけだと、頭の中で答えが出ました」

「待って、もう少し分かりやすく言ってくれなきゃわかんないわ」

アイが混乱したかのように顔をゆがめる。マリアはもう一度頭の中を整理してから言った。

「つまり、今の未来を変えられてしまうだけで、未来にいる私達に影響はないと思われませう」

「先に未来に帰れば、永市が死のうがあたし達には関係ないって事？」

「マリアが強くうなずく。ただしこれは計算上の答えでしかないとは告げなかった。本当は未来を上書きされてしまうのかもしれないし、最悪私達が消されてしまう恐れもある。実際はどうなるのか予測がつけられない。」

しかし、今のアイに恐怖をあおるのは良くないとマリアは判断した。なるべく希望と自信を持たせてあげるべきだ。アイは自分と違って人間なのだから。

「理由はよくわからないけど、とにかく先に未来に帰ればいいのね。でも、どうやってケイに殺しを待ってもらうのよ。そこが問題だわ」

アイがまた頭を抱える。マリアもしばらく考えたふりをしながら、最良のシミュレーションを導きだそうとした。しかし、まだまだ情報不足だ。

「やはり、一度ケイさんと連絡を取って話を聞くしかないですね。それから取引を考えましょう」アイの手を優しくにぎる。「私も協力しますから、アイさんも安心して寝てください。夜ふかしはお肌に良くないです」

「ありがとう、と笑いながらアイは答えた。」

「まさか子供にはげまされるとは思わなかったわ」

マリアも笑いながら答えた。

「子供じゃありません。兵器ですよ」

ケイは望美より先に目を覚ますと、顔を洗いに洗面台へと向かった。何故、今更十年以上前の出来事を思い出してしまったのか不思議でならない。やけに宮本の顔が鮮明だったのも、気分を臆してならなかった。

気晴らしにテレビをつけてみるが、どこも新年特別番組とやらをしていた。そうか、年が明けたのか。時刻を確認すると午前九時を少し回っていた。ケイが無心でテレビの映像を眺めていると、小型イヤホンが鳴った。慌ててテレビを消す。

「もしもし、アイか？」

『……そうよ。昨日は悪かったわ』

車で突っ込んだ事を詫びているのか。ケイは黙ってアイの言葉を待った。

『ねえ、ケイは本当に永市を殺すつもりなの？』

ケイはマリアの部屋に向かった。もしかしたらアイは近くに来ているかもしれない。そう思つて窓から公園を見下ろしたが、アイらしき人物は見当たらなかった。

「ああ、悪いがそのつもりだ」

『そう……暗殺は上からの命令？』

ケイはしばし黙りを通した。そしてきつぱりと言う。

「違う、俺の独断だ。俺一人で未来を変えに来たんだ」

『どうして？どうしてケイはそこまでして、未来を変えるのよ。未来に帰る気はないんでしょ？』

どうしてかと言われると、実はケイ自身が一番分からなかった。最初はマリアとアイを未来に返し、自分は過去に留まりながらゆっくりと標的を探すつもりだった。しかし、思わぬ形で標的を見つけってしまった。しかも望美の元旦那。殆どは嫉妬かもしれない、とケイはこの時思った。

「未来に帰るつもりはない。アイとマリアだけを未来に帰すつもりだ」ケイは自分のいた世界を思い描いてため息をついた。「もう争い事に疲れたんだよ」

『何よ、そんなの自分勝手過ぎるわ！あたし達がどれだけ国を守り、国の為に尽くしてきたのか忘れたの！』

忘れた訳ではない。確かに未来での生活もそれはそれでよかった。だが、今の未来には破滅の道しか残されていない。滅り続ける人間と自然。悲しみと憎しみだけが世界を動かしているに過ぎない。それに未来に帰った所で、自分の居場所は既に無い。

「未来に帰った所で、我々には破滅の道しか残されていない。マリアを東日本に送り、作戦を実行した所で何が残る。また新たな戦争の火種を作るに過ぎないだろう。元々俺はこの作戦自体に反対だったんだ」ケイは一息ついた。「マリアを逃がしたのも、この俺だ」

しばらくの間お互いに沈黙が流れた。こんな上司では、愛想をつかされても仕方が無い。ケイは騙してすまなかったと付け加えた。

『そんな……ケイが軍自体を裏切っていたなんて……どうして今更

そんな事を？納得出来ないわ！』

半泣き声でアイが叫ぶ。ケイも何故、マリアを逃がしたのか考えた。マリアを逃がしたのは、間違いなく自分の意志だ。軍に逆らったのも、自分の意志。その罪で自分も過去に来ることになったのは不本意だったが、ただ自分の置かれている立場を変えたかった、変化が欲しかったのかもしれない。そして自分の運命を終わらせたかった。

「自分の運命に愛想をつかせた……俺の名は永市恵一郎。あの男の曾孫だ」

こうも言えば、アイは納得してくれるだろうか。ケイは自分を嘲笑いながら、永市京介の顔を思い出していた。

あの男が自分と、宮本の先祖なのだ。永市京介の代で二手に別れてしまった血筋は、恐ろしい事に百五十年先の未来にまで影響を及ぼしていた。二手に別れた血筋は東と西で別れ、今なお争いあっている。この末路にそろそろ決着をつけなければならぬ。

受話器越しにがさがさと雑音が入った後、違う女の声がした。

『ケイさん、明けましておめでとうございます。マリアです』何とマリアの声だった。『受話器越しに貴方とアイさんの話を聞かせてもらいました。また、アイさんから現状も聞かせてもらっています。貴方が永市さんを殺したがつている理由もはつきりしました。そこで、一つ取引をしませんか？』

やけに大人びた声。ケイは眉をひそめた。

「おい、アイはどうした。お前はあのマリアなのか？」

『アイさんはショックで状況整理が出来ない様子なので、私が代わりに引き継ぎました。マリアはマリアです』

望美と三人で食事をした時のマリアを思い出す。今の声からあのあどけなさは一切感じられなかった。

「それにしてはやけに大人びたな」

『ええ、子供のふりはもうやめましたから』

アイのバツクにとんでもない物が付いたな、とケイは舌打ちした。仮にもマリアは枢密な頭脳を兼ね備えた兵器だ。アイに何を吹きこまれたのか知らないが、子供を演じるのを止めてしまったらしい。

「なるほど……それで取引とは、どう言う事だ」

『ちよつと待つてください、外にでます』小声で何か囁いた後、足音とドアが閉まる音をケイは確認した。『お待たせしました。永市さんに聞かれるとまずい内容なので、手短に話します。私とアイさんは明日、未来に帰るつもりです。その為にはケイさんの所有している車と鍵が必要。貴方も自分の目的を達成するには永市さんが必要……違いますか？』

「その通りだ、間違っていない」

『では車と永市さんを取引しましょう。明日の転移の時に、お姉ちゃんと一緒に車で指定した場所に来てください。私達も永市さんを連れて行きます。私達が無事、転移出来たら永市さんは好きにして結構です』

あのマリアが話しているのかと思うと、ケイはおかしくて笑い出さなくなった。

「そんな取引をしなくても、俺は一人を未来に帰すつもりだ。マリア、お前には過去に残る選択肢も一応あるぞ」

「……いえ、私も未来に帰ります」

きっぱりとそう告げられた。ケイはため息を吐くと、そうかと呟いた。

「車なら勝手に持って行け、俺にはどうせ必要ないだろうから」

妙な取引だ。別に意地悪で車を渡さないつもりではない。ケイは取引内容をいまいち理解出来ずにいると、マリアが怒った口調で告げた。

『貴方に勝手な事をされたくないの取引するのです。私達が未来に帰るまで、永市さんには指一本触れさせません。永市さんは人質だと言う事をお忘れなく。取引が成立されない場合は、こちらで永市さんを処分します』

つまり車と、自分が永市を殺すまでの時間が取引なのか。ケイは電話の相手、マリアの顔を思い浮かべた。漫画を読み、ゲームをし、嬉しそうに望美とご飯を食べていたマリア。これだけなら本当の小学生だった。それが今では子供の顔をしたずるい女だ。ケイはマリアのしかした行動を高らかに笑った。

『何がおかしいのですか』

「ああ、悪い悪い。随分とずるい女になったと感心したんだ。わかった、取引には応じよう」ケイはマリアのしていたゲーム機械を眺めた。「俺の部下に欲しいくらいだ」

『それは光栄ですね。アイさんの話したと、貴方は西軍のトップフアイブに入る存在らしいですから。ところで、今ケイさんはお一人ですか？』

ちらりと隣の部屋を確認したが、説明するのも面倒なのでそうだと

言っておいた。

『今日は元日です。年明けの今日だけ、お互いの事情を忘れてのんびり過ごしましょう。最後の休日になりそうですから。それと明日の取引まで、お姉ちゃんの前においてあげて下さい』マリヤが更に声を小さくして言った。『私がこのような行動をとっていることは、お姉ちゃんには秘密にして下さい。妹としてお別れしたいのです』

「わかった。望美には記憶が戻ったことにはしておこうか？」

マリヤは少し考えて『その方が未来に帰りやすいですね』と笑った。

「ケイ、何しているの？」

望美が部屋の入口で首を傾げている。まずい、起きていたのか。ケイが慌ててイヤホンを見せると、納得して部屋から出て行った。

『ケイさん、嘘つきましたね』

望美の声がマリヤにまで聞こえてしまったらしい。

『嘘をつくと言う事は、二人の間に何かあったのですね』マリヤがため息をつく。『それに文句を言うつもりはないですが、お姉ちゃんを悲しませる事だけはしないで下さい。場所と時刻は追ってまた連絡するので、電源は切らないようお願いします』

一方的な終わらせ方に不快を感じたが、確かにマリヤの言う通りだった。自分と望美は結ばれてしまったのだ。それを隠すつもりはなかったが、もつばれてしまったらしい。

ケイは苦笑してイヤホンをポケットにしまった。マリヤに言われなくても、明日まで望美と一緒にいようと思っていた所だ。

こうなる事がある程度予測はしていたが、悲しい結末が頭をちらつかせてならない。それでも進まずにいられないのが人間なのだろうか。

マリアはイヤホンを外すと、静かに永市の家に戻った。アイがソファで頭をかかえたまま座っている。

「アイさん、しっかりして下さい。ケイさん自身が決めた事です。それを受け入れるのも部下の役目ですよ」

アイがこちらに顔を向けたが、目がすわっている。このままではアイは使い物にならなくなってしまう。明日まで永市を脅し続けなければならぬのに。マリアはバスルームの方を見た。永市がシャワーを浴びて、そろそろ出てくるころだった。

「永市さんにその顔を見せたらだめです。もつと強気でいて下さい。未来に帰れなくなりますよ」マリアはアイの冷たい手を握った。「素直に事実を受け入れる勇気も必要です。私も自分が兵器だという事実を受け入れました。子供のふりをしていたのはそのためだと理解しました。アイさんも、未来に帰って事実を報告しなければならぬ……違いますか？」

そうね、とアイがさみしくつぶやく。

「ケイさんの行動に自分が左右される事はないのです。アイさんは、アイさんらしく生きて下さい」

アイの焦点がマリアに定まった。

「そんな事言われても、気持ちがついていかないわ。ケイは軍を、あたし達を裏切ったのよ……信じられない」

「下調べに私の転送といい、ケイさんは前から計画していたのだと思います……おそらく、私のことも助けたかったに違いありません。あのまま未来にいたら、私はこの世にいなかったのですから。ケイさんは、私に過去で生きるチャンスをくれたのです」

アイがまさかと自分の顔をまじまじと見た。

「ケイがマリアちゃんを……？」

「だから見張りを付けてまで、お姉ちゃんのそばにいさせてくれたのです。そうとしか思えません」

マリアは初めて会った時のケイの顔を思い出した。アイもだまっとうなずく。

「そう言えばケイは未来でも、マリアちゃんを気にかけていたわ。管理者だからと思っただけだけど、あれはガラスごしでマリアちゃんを助けようとたくらんでいたのかも」

「私が宮本さんの娘のコピーだったのが許せないのでしょうか。宮本さんはケイさんにとって親せきであり、親友でもあり、またライバルでもあった。西軍が東軍の懐に私をまぎれさせ、かいめつさせる計画自体が不意打ち。きつと正々堂々と勝負したかったケイさんは上のきたないやり方を止めたかったのでしょうか」

「そっか……ケイは元々、争い自体あまり好んではいなかった。ましてや関係のない、一般市民までまきこむあの計画に賛成するわけがない……上にとつても、ケイの存在はじゃまだつたはず。だから永市を殺させに過去に向かわせた……？まっつて、そんな事つて」

「ないとも言えないですね。ケイさんが私をにがす代わりに、過去

での暗殺をしようとしたのかもしれないです」マリアが表情をくもらせた。「だってケイさんの先祖も永市さんなら、彼を殺したらケイさんも存在しなくなってしまうます」

アイがあつと、声を上げた。そうなのだ、今の永市がいなければ、ケイも宮本も未来で存在しなくなる。ケイの独断もあるかもしれないが、上からの命令が下されていないとも言えない。上は自分をにがしたケイの存在を快く思っていないだろうから。

「ねえ、どっちを信じればいいの？ケイか、軍か」

アイが助けを求めるようにマリアの両肩をつかんだ。現状ではどちららとでもとれる。ましてやケイが未来に帰らない明確な理由がないので、後者の可能性の方が高かった。

「もう未来に帰って、確かめるしかありません。アイさんが未来に帰る事を考えて、ケイさんは真実を話さないだけなのかもしれないし、本当に先程の電話で話した通りなのかもしれない」マリアは不安げな表情のアイに強く言った。「どちらにせよ、私は未来に帰ります。自分の目で真実を知りたいです」

アイも少し考えてから、いつもの強気な表情で答えた。

「あたしも確認したいわ。とにかく未来に帰りましょう」立ち上がってマリアを見下ろす。「あれ？でもケイがせっかくマリアちゃんをにがしてくれたのかもしれないのに、未来に帰っても大丈夫なの？」

「その時はまた、にげればいいだけの話ですよ。早く明日の場所を決めましょう」

マリアは急々と乱雑に積み重ねられた本から、地図を探し当てた。ゆかに広げてアイとながめている所に、さっぱりした表情の永市がバスルームから出てきた。

「おい、二人とも何しているんだ？」

永市が長くのびた髪をふきながら、あやしげに地図と二人を見比べる。

「ひまだったので、アイさんに未来の京都について教えてもらっていました。ここが永市さんの家なのですね」

マリアが京都の南の方を指す。永市はふん、と鼻で笑ってテレビを付けた。

「ひまならテレビでも見てればいいだろうが。それとも俺はどこかに連れて行かれるのか？」

するどい。マリアは思わずアイと顔を見合わせた。永市がいては明日の話もろくに出来ない。

「何言っているのよ、それよりお腹空いたわ。何か買って来てよ」

アイが永市をじゃけんにあつかう。アイも同じ事を思ったらしい。永市はあからさまに嫌な顔をした。

「俺が買いに行くのかよ」

「あたしこの辺わかんないもの」わざとらしく肩をすくめる。「お正月だしおせちとか、寿司がいろいろね」

アイがハンドバッグから札たばを取り出し、そこから一万円札を一枚ぬく。永市がおどろいた様子でアイの札たばを見ていた。

「そんな大金、どうしたんだよ」

「ケイからぬすんできたのよ。好きに使って大丈夫だから、早く買って来てよ。マリアちゃんも、お腹空いたでしょ？」

うん、とお腹をさすりながら答えた。その様子に仕方なくお金を受け取ると、髪をかわかしにバスルームに戻っていった。テレビの雑音がやけに耳にこびりつく。

「明日まで、永市さんをどうにか留まらせる事も考えなくてはいいかもしれませんね。今にげられたらやっかいです」

アイもわかっていると笑みを浮かべながら、ハンドバッグの中の銃を確認した。

time39・それぞれの企み

永市に昼食を買いに行かせた後、二人はまた視線を地図に落とした。

「転移の場所と、正確の日時、未来に帰るまでの所要時間はどれくらいですか？」

アイがハンドバッグから小さなメモを取り出す。

「えっと、日時は一月二日の正午。転移場所はこの比叡山ふもと周辺。未来ではあの山周辺と、琵琶湖と呼ばれていたこの付近にあたし達の基地があるの。所要時間と言えば、車で移動する時間くらいね」

地図上では南の永市の家から、北の比叡山までかなりの距離がある。

「あたし達もそうだったんだけど、転移先と日付が多少前後してしまうと思うわ。あたし達も未来で自分達の基地から転移して来たんだけど、実際に着いた場所は京都駅の少し南のこの辺り」アイが地図を指す。「日付も四日ほどズレが生じたわ。本当はマリアちゃん
が転移された直後に着く予定だったの」

「結構不確かな所が多いですね」

「ええ。時空時差が生じるから、明日の正午っていう時間も結構あいまいかも。実際転移する場所で測定しなおさなきゃ、何とも言えないわ」

「では早めに転移場所に行く必要がありますね……取引場所は、どうしますか？」

「なるべく手荒なマネはしたくないけど、万一の場合もあるし、人目につかない所がいいわね」

二人は地図を食い入るように見つめた。山中に入ってしまったえば、人目につかないだろうが、そこまで車が通行出来るのが危うい。北の方はここより寒く、山となれば雪がつもっているはずだった。

「アイさん、見てください。ここにガーデンパークなんてのがありませんよ」

それは山のちょうど中腹辺りに小さく表示されていた。

「ここで待ち合わせしようって言うの？しゃれているけど、来客もいそうじゃない」

「今は年末年始です。休業している所が多いですよ」マリアは立ち上がって、勝手に永市のパソコンをいじり始めた。「その公園、今は冬期休園中です。四月まで開かないみたいですよ」

「へえ、なら都合いいわね。そこに行くまでどれくらいかかるの？」
「道路状況が分かりませんが、二時間もあれば余裕で着けると思います」

マリアは念のためにりれきをさく除する。そして地図を細部まで暗記し始めた。

「遠いけど、どの道未来でもここまで戻って来なくちゃならないから、しょうがないわね」アイがつけっ放しにされたテレビの力二を見つめる。「あー、お腹空いたわ」

マリアは思わずげん関の方を見た。永市さんは本当に昼食を買ってくるのだろうか。今ごろどこか遠くににげだしているのではないか。

「永市さん、どうしますか？事情を説明しても納得しませんよ」

アイもうーんと首をひねりながら、どうしようかと部屋をうろつろし始めた。やがて空腹の合図で動くのをやめると、ソファにどかっともたれかかった。

「そんなの考えるまでもないわ。寝ている所をしばらくあげて、あたしの運転で運んでいけばいい話じゃない」

「ずいぶんと乱暴なやり方ですね」マリアは永市がしばらくられている姿を想像し、顔を引きつらせた。「私が永市さんを見張る役割もかねて、ここからにげ出そうと話を持ちかけますよ。そこをアイさんがつかまえば、一応こうそくする理由も出来ます」

「マリアちゃんも、ずいぶん悪い女になったわね」
「そうですね、自分でも意外です」

二人の悪女は密かに笑いあった。

付近のスーパーは元旦休みの為、永市はこうして街中まで車を走らせていた。参拝帰りなのか破魔矢をぶら下げている連中が目立つ。新年ムードのお気楽さに永市はため息をこぼした。

「はあ、やってらんねえよ」

無残にも前のバンパーがへこみ、ボンネットがうつすらへこまされた愛車を運転席から降りるように見つめる。くそっ、あの女から修理代もせしめてやらねば。ハンドバッグに入っていた大金を思い出し、隙あらば盗んでやると永市はほくそ笑んだ。

このまま遠くまで逃げてやろうかとも思ったが、それをすれば自宅がただで済まされない。あの女に家中めちゃくちやにされるだろう。家には何百万とつぎ込んだ商売道具があるんだ、スタンド以外に壊されてはたまらない。

適当に寿司とお節の具材を取り揃えると、永市は急いで自宅へと車を走らせる。さて、あの女をどうやって追いだそうか。マリアと言うガキも邪魔だ。未来の兵器だか何だか知らないが、昨日の様子からして自分の味方になりそうもない。

昨日二人が深夜にひそひそと話し合っていたのも永市は知っていた。あのガキ、俺を蹴りつけやがって。ガキは何とかねじ伏せられるにせよ、問題はアイの方だった。またあの蹴りをくらっては一溜まりも無い。アイを取り押さえるチャンスがあるとすれば、全てが丸腰になる風呂場だ。流石に風呂場ではあの変てこな服を脱ぐだろう。永市は家にロープがあるかどうか頭の中で検証し始めた。

time 40 ・つかの間の幸せ

自宅に戻ってくると、待ちくたびれたようにアイがソファで寛いでいた。コスプレ衣装のままなので、一先お風呂には入っていないと安心する。マリアは大人しく床で体操座りをしていた。自分のいない間に状況が変化されてないかと、部屋全体を素早く見回す。

「遅い！もうおなかぺこぺこよ」

ビニール袋を奪うと、アイは予めスペースを確保したテーブルに昼食を並べる。とにかく腹ごしらえをしてから今後の事を考えるか。永市もしぶしぶ床に座り込むと、テレビを流しながら三人で食べた。

昼食後、アイは何ををすると言うこともなく、そこら中に積まれた雑誌をパラパラとめくりだした。マリアも暇そうにテレビを見ながら、欠伸をしている。

永市は仕事内容を確認するためパソコンに向かった。年末年始の今は休暇中だが、もうすぐ長期の撮影旅行が控えていた。安易に外に出られない今、自宅でカメラの整備をする他はなさそうだ。実家に帰る事も考えたが、こんな未来人と兵器の二人がいるという奇つ怪な状況は人生で二度と訪れないだろう。こんな面白い状況の中、帰省する方が勿体無い。もっと自分も楽しむべきだ。

永市はカメラを手に取ると、マリアに標準を定めた。このガキを何とか味方につけてアイと、ケイとやらを蹴散らすことが出来ないだろうか。それからこのガキを売り飛ばすのも悪くないな。今の時代なら相当の値打ちはあるだろう。

シャッターを切ると同時に、マリアがこちらを向く。そのむっとし

た表情が一瞬死んだ愛美を連想させ、思わずカメラを顔から放した。

「勝手に撮らないで下さい、びっくりしました」

「悪い悪い。マリアちゃんが可愛かったから、つい……な」

このマリアと言う女の子は、実は愛美ではないのか。永市は一瞬浮かび上がった妄想を即座に打ち消した。何を馬鹿な事を。ちゃんと一年前、自分は葬式に出てたではないか。

永市はパソコンに向かい直して、じつと二人を観察した。お互い気にかかる事なく適切な距離を保っており、二人には何事もなかったかのように見える。しかし、自分が風呂場から上がった様子を思い出しても、二人が何かしら打ち合わせをしていたのは確かだった。二人は自分をどうするつもりだろうか。本当に守ってくれるのか、それともケイって男に引き渡すつもりなのか。どちらにせよ死ぬのは御免だ。永市は二人が離れるチャンスをディスプレイ越しに待った。

望美は虚ろ気な表情でテレビを見ていた。テレビの会話などまるで頭に入って来ない。何せ自分は今、ケイの腕の中にいるのだから。まだ自分の胸が高鳴っているのが分かる。背中越しに聞こえてやしないかとふり向くと、ケイと目が合った。何かを確かめるようにまたキスを落とす。これで何回目だろうか。

「私、重くない？」

完全にケイに体重を預けたまま、二人でこたつに入っている。望美

が少し身体を動かすと、それを制するかのようにはケイが抱き止めた。自然と手が胸元を探っている。

「どうして私を抱くの。余計惨めな気持ちになるだけじゃない」

ケイの手に身を擦らせながら、望美は多少なりとも抵抗する。

「ふん、それで抵抗しているつもりか？」

望美の質問に答えようとはせず、ケイは首筋に舌を這わせて遊ぶ。その誘惑を振り解き、望美はケイと向き合った。

「真面目に答えて！こんなを事していても、マリアやアイちゃんが戻ってくるわけじゃない。ケイがいなくなるのなら、愛し合う行為自体無意味よ……」

どうしてケイが自分を抱くのか分からなかった。それでもケイに負けてしまう自分が悔しく、自然と涙が溢れる。

先程ケイから聞いた話だと取引は明日の十時、比叡山にあるガーデンパーク。ケイの持っている車と、元旦那の永市が取引される事になっている。ケイの話だとマリアの記憶がああ時の衝突で一部戻ってきたらしく、マリアはアイちゃんと未来に帰る方を選んだ。それも今の自分を動揺させていた。死ぬと分かっているのに何故未来に帰るのか。たった一週間しか共に過ごせなかったが、マリアの心境を分かってあげられなかった自分が悔しかった。

「悪い……望美には本当にすまないと思っている」ケイが優しく望美の頭を撫でた。「俺も自分の未来に焦っているんだ。だからお前を求めたのかもしれない」

「だからって……こんなの辛すぎるわ」

ケイの肩に顔を埋める。結ばれてからの後悔と罪悪感。それが望美の身体を支配していた。二人に残されている時間はほんの僅かなのかもしれない。ケイも、マリアも、アイちゃんも自分からいなくなってしまう。取り残されるのが怖かった。また一人で生きなければならぬのか、無駄に広いこの部屋で。

「永市を殺すの、待ってもらえないかしら」

ケイがここにいるのを確認するかのように望美は手を取り、自分と絡ませる。きっとケイはアイちゃんから永市が開放されたら、すぐにも始末してしまうだろう。でなければこんなにも自分を求めて来ないと分かっていた。

「それは難しいな。アイが余計な事を吹き込んだら、すぐに逃げ出すだろう。海外なんて行かれたら、それこそ探しようがない」
「そうよね、でなければ私を抱いたりしないわね」

そのままケイの身体にしがみつく。いつまでもこうしていたい、もっと一緒にいたい。自分でもどうしようもない程、ケイを愛していた。永市には一度も抱けなかった感情。愛しくて、苦しくてたまらない。この現状自体がもどかしい。

やがてどちらからともなく、また愛し合う。二人に残された時間を全て注ぎ込むかのよう。少しでも長く互いを覚えていられるように。

time 41 二人のマリア

しばらくしてアイさんがホテルに戻りたいと言い出した。だから永市さんに車を出すようにとお願いしている。

「いったん、シャワーを浴びに帰るわ」

「シャワーなら家にあるだろうが。それくらい貸してやるよ」

永市が風呂場を指すが、アイがろこつに嫌な顔をした。

「まさかとうさつでもするつもりじゃないでしょうね」

「するかよ、そんな自殺こつい！」

永市がはき捨てながら新しいタオルをアイに投げつけると、さつさと入れと手で追いやる。

「マリアちゃん、この男が風呂場に入ってきて来ないか見張っててよ！」

テレビを見ていたマリアにそう告げてから風呂場に向かう。シャワーから水が出る音を確認すると、永市がこちらに近づいて来た。

「なあ、マリアちゃん。今の内に二人でこつそり逃げようぜ」

このチャンスを待っていましたと言わんばかりに耳打ちする。マリアも素直にうなずいた。

「永市さんも同じ事を考えていたのですね。でも、今は駄目です。逃げるのなら今夜しかないでしょう」

そう言つて時計を見る。その仕草に永市がふしんな顔をした。

「取引とやらは明日なんだろ？ だったら早く逃げた方がいいじゃないか」

お前らの考えはお見通しだぞと言わんばかりに口元がゆがんでいる。マリアはそれをしれつと交わした。

「やはりあのけりで起きましたか。私にしつこく側で寝させて欲しいと志願したのは、実は見張るためですよね？」

「正解。俺は基本的に人間を信用しない質なんでね。それで、お前はどっちの味方なんだよ」

大きなごつい手で頭を押さえつけられる。深夜の会話をぬすみ聞きしていたか。マリアは永市の力に刃向かうことなく続ける。

「私も基本的に人間は信用しないようプログラムされています。人間は感情でどうとでも転ぶ人種。言葉などあつて無いような物。昨日は武器を所有しているアイさんから先に味方に付けただけです」
「じゃあ武器を持っていない俺は、味方にならないって訳か」

さらに力が加えられる。その程度でこわれるわけもないのに。マリアはふとお姉ちゃんがこの男とけっこんしたのか疑問に思った。

「それは違います。先に立場を左右させる人物から押さえたただけの事。私は未来に帰るつもりはありませんから」

永市がおどろいて手をのけた。マリアはそのまま真っ直ぐ永市をにらみつけてやる。

「うそつけ、お前昨日あいつに言ってたじゃねえか。未来に帰ると」「あれは私の本心ではありません。アイさんを安心させるためのうそ。どうして死ぬと分かって未来に帰らなければならぬのですか、バカバカしい」

この男から離れようとマリアは立ち上がる。思いもよらない態度にたじろぐ永市を横目で確認した。

「記憶にはないですが、私は未来の施設でかんきん状態に置かれていたと思います。身体にあざもやっとなげてきました」そう言いながら自分のうでを見せつける。「せつかく自由になれたのに、またひどい未来に帰るのは嫌です。私はここでお姉ちゃんと一緒に生きていきます」

そりゃそうだと永市は無理矢理うなずいてみせると、マリアの背中を軽くたたいた。

「ははは、それが普通の判断だよな」ちらつと風呂場の方に視線を向ける。「だったら取引の事、くわしく教えるよ」

自分をおどすように身体をだきよせられる。この男にまずは本当の事を言うべきなのだろうか。マリアの頭の中では二つの人格が入り交じっていた。

一つは兵器としての自分。アイさんと共に未来に帰り、計画を達成させなければいけない責務。そしてもう一つは人間として、つまり妹としての自分。このまま過去に居続け、お姉ちゃんと一緒に暮らしていきたい願望。この二つがまるでスイッチのごとく消えたり、現れたりしていた。

どちらを選択すればいいのか判断に迷っている。自分はどちらの味方に付けばいいのだろうか。とりあえず今は話を聞かれていたのを

理由に、本当の事を話した方がいいだろうとマリアは決めた。

「取引は明日の十一時。場所は比叡山にある今は閉園中のガーデンパークの駐車場。そこでケイさんの車と、貴方が取引されることになっています。こちらの出した条件は私達が未来に帰るまで、永市さんには手を出さないこと。つまり私達が未来に帰るまでは、貴方の生は保障されます」

「何だよ、そりゃ」永市はあまつている方の手でマリアを小突く。「お前らが未来に帰ったら、俺はケイって奴に殺されるって事じゃねえか」

「そうです。でも、私は未来に帰らない。明日の取引場所で少し暴れてみようと思います」

口に出してみても、自分は何を仕出かすつもりなのだろうと考え始めた。未来に、自分の運命にたいこうしようと言うのか。思わぬ思考の行き先に、マリアは薄ら笑いをうかべた。

「暴れるって、どうするんだよ」

「そうですね……お姉ちゃんを人質にして、二人が未来に帰らなければ自爆するってのはどうですか？明日の取引場所にはお姉ちゃんを必ず連れて来るように言いつけてありますし」

頭の中でシミュレーションを試みる。永市がとんでもないと制した。

「どうですか？じゃねえよ。自爆は未来でする計画なんだろ？過去で自爆されてたまるか」

「おどすだけですから、実際に自爆まではしませんよ。ただ万が一自爆した場合、確実に日本の半分は吹っ飛ぶでしょうね」マリアが悲しく付け加える。「私は歩く時限爆弾ですから」

「そんな事本当に出来るのかよ」永市があきれたように座りこむ。

「相手は二人とも軍隊の連中だぞ、お前が取り押さえられたら終りじゃないか」

その通りだった。防御プログラムはあっても、攻撃プログラムは一切組みこまれていないようだ。それに自爆出来るかどうかもさだかではない。こちらに転移された時の衝げきで上手く機能しない可能性もあつた。マリアはそれもそうですねと笑つてごまかした。

「やはり今夜逃げ出すのがだとうですね。少し問題もありますが」「問題？」

「まず私の身体に発信器が何か付けられている事です。ケイさんの車を使えば一瞬で居場所がばれてしまいます」

「はっ、そんな車で逃げまわつていれば問題ないだろ。現に望美だつて海外かどつか遠くに二人で逃げようとしていたじゃないか」

そうしてくれるのならそれでいい。しかしやっかいなのはアイさんの方だ。

「それと……アイさんをどう押さえるつもりですか？恐らく睡眠薬等は効かないですよ」

さすがに食べ物や警戒されている。現に永市の買って来たお寿司やお節も、アイは最後に手を付けていたではないか。二人ともだまりこむ。それが一番の課題だった。

「ならばるかどうにかして、身動きが取れないようにするしかないだろ」

簡単に言つてのけるが、この二人でアイを捕らえられるとは思えない。体術はトップクラスだろうし、奇跡的に捕らえる事が出来ても

簡単ににげ出されてしまうだろう。

「二人でアイさんを捕まえるのはまず無理です。どこかに呼び出し、そのすきに逃げるしかないでしょう」

永市には今夜、明日の取引の事で自分がアイを外に呼び出すと告げた。二人一緒に逃げるのは困難なため、やはりどちらかがぎせいになるしかない。となれば、殺されては困る永市を優先的に逃がしてやるしかないだろう。それにこの男がどういう人物なのか大体把握出来ている。

少し一人になりたい。マリアはトイレに行くと言をかけ、そのまま立ちつくした。両手をながめてみる。血色の良い手が付いていた。自分は、どうしたいのだろうか。どうすればいいのだろうか。自分は人間なのか、それとも兵器なのか。これは自分の意志なのか、それともプログラムなのか。二人の自分が頭の中でせめぎ合っている。わからない、わからない。どうすればいい、助けて、お姉ちゃん。思わず叫び出したい衝動を手の平で押し戻すが、その代わりに涙が一すじ流れた。

time 42・人生ゲーム

風呂場を一通りチェックしてから、アイは丁寧にモビルスーツを脱ぐ。下着も畳んで洗濯機の上に置くと、急いで熱いシャワーを出した。寒さで浮かび上がった鳥肌をゆつくりと綻ばせる。

「ケイ……」

鏡に写る自分の姿を見つめながらため息を吐く。こんなつもりじゃなかった。ただほんの少し意地悪したかっただけなのに。

アイは足元に置いてあった男用のシャンプーで髪を洗い始めた。大体ケイも悪いのよ、自分を頼りにしてくれないから。だから一人で任務を遂行しようとしただけじゃない。

アイは昨日の驚いたケイの顔を思い出した。マリアを車で引き飛ばした後、望美さんに真っ先に駆け寄ったケイの表情。あの時に自分は分かってしまった、ケイが望美さんを好きなのを。普段仏頂面であり感情を表に出さないだけに余計わかりやすい。

どうして、どうしてあのおばさんなのよ！悔しい、自分の方が未来ですつとずつと一緒になっていたのにな……！

「うわーん！」

シャワーの蛇口を最大限に出力して、アイは泣き叫んだ。自分は恋愛対象として見られていなかったのだ。今までチームで数々の任務を共にこなしてきたが、所詮上司と部下の関係。自分に優しく甘えさせてくれたのも、妹扱いされていたようなものだったのだ。

アイは頭を掻きむしるように泡を洗い流す。無性に悲しくなあって、嗚咽を漏らしながら壁に泣き崩れた。

どうして？望美さんを好きになってもどうしようもないじゃない。

ましてや永市を殺して自分も死のうとしていゝなんて、まさに無謀。そこまでして変えたい未来に、自分は帰る必要性があるのか。今までケイがいたからこそ、ここまで強くなれたのだし、生き延びて来られた。ケイのいない未来に、自分は帰りたいのか。上の連中に居場所を獲られていやしないか。今回の一連の任務だつて上が一枚噛んでいゝのかもしれない。

考えれば考えるほど、何もかも信用出来なくなつていた。これまで任務遂行を第一と考えてきたが、その任務自体がずれてきている。ケイには宮本の先祖を殺させ、自分にはマリアを未来に帰させる。もしかして上はマリアを殺すのを惜しんでいるのではないのか。あんなに精巧な人型兵器なんて、何処を探してもマリア一体だけだ。軍はマリアを他に利用したいが為に、ケイに永市を殺させたいのではないのか。もう疑いだしたら切りがなかった。

一頻り涙を搾り出すと、やはり一度未来に帰つて、真相を確かめようと腹をくくる。とにかく帰つてみなくては分からない。未来とは連絡の取りようがないのだから。アイは急いで身体を洗い流した。

お風呂から出るとマリアと、永市の両方を目視する。マリアは飽きもせずテレビを見続けているし、永市もパソコンに向かって何やら作業をしていた。何事も起きてないようだ。

アイは綺麗になつた身体でソファに深く腰をかけた。暇だ、もうすることがない。せつかく過去に来ていゝのだから、もっと外に出て遊びたい。アイが不貞腐れてその辺に転がっていた雑誌を蹴飛ばす。めくれたページでは裸同然の服を来た女の子がこれ見よがしに誘つていた。なんて如何わしい雑誌なの！アイは腹が立つてその雑誌を踏みつけた。

これでは望美さんを見張つていた時より状況が悪いではないか。今更ながらにアイは自分が招いた結果に悔しさを覚えた。望美さんな

らまだわがままに付き合ってくれるだろうし、マリアちゃんの世話も任せてしまえばよかった。それが今ではこの碌でも無い男と一緒にいなければならぬ。最初はあんなに自分に興味を持っていたくせに、今ではマリアちゃんにも興味があるらしく、時折ディスプレイ越しに視線を投げかけているのに気がついてた。

この変態野郎が。アイは心の中で軽蔑するとマリアを呼びつけた。小声で確認する。

「あいつに何か変な事されなかった？大丈夫？」

「大丈夫ですよ」マリア後ろを振り返って確認した。「それより、ゲームで遊びませんか？さっき永市さんから面白そうな物貰いました」

急々とこたつの上に乗っていた大きな箱を持ち出す。

「何それ、人生ゲーム……？」

箱から大きなボードと、沢山のカードやら紙幣、ルーレットが飛び出した。二人で興味津々にそれらを床に広げる。まず目に文字が書かれており、スタートとゴールもあったが、初めて見るタイプのすごろくだ。

「人生のゲームだなんて凄いです。ね、面白そうでしょ？永市さんも一緒にやりませんか？」

「何でそんな事しなくちゃならないんだよ」

面倒臭そうに永市が顔を上げた。

「明日まで時間もありませんし、それに大勢でやった方が楽しいです」

マリアが永市の腕を引っ張る。「それにルールも教えて下さい」

「何だよ、お前ら人生ゲームも知らないのか」

「すぐろくなら知っているわ。それに近い遊びなの？」

「まあ、その複雑バージョンみたいな物だな。未来には人生ゲームがないのか」

マリアと顔を見合わせる。少なくとも自分は聞いたことがなかった。嫌々ながらも永市がセッティングを始め、アイとマリアも家の模型を指で摘む。マリアの楽しそうな表情に、アイもこの遊びに付き合う事にした。過去での最後の思い出作りだと思えばいいか。

アイは永市の表情を盗み見た。この男が宮本の先祖であり、ケイの曾祖父だ。何処か似ているところはないかと探っていると、目が合った。

「何だよ、人の顔じろじろ見て」

「……別に。あんたが遊びに付き合ってくれるなんて意外ね」

「ふん、仕事も休みだしな。未来人と遊ぶ機会なんて滅多にないと思っただけだ」

永市が素っ気ない態度で準備を終える。こういう素直じゃない所がケイに似ていると思った。真相を聞き出すまで、この男は殺させないし、近づけさせない。たとえケイと戦う事になっても、自分は全力で潰しに行くだろう。

アイは明日の未来を覚悟しながら、ルーレットを回した。

time 43・逃走

永市は仕事の準備だと嘘を付いて、必要最低限の荷物を旅行用鞆に詰め込み始めた。アイとマリアの二人はまだ人生ゲームをしている。飽きないのかよ、あいつら。自分は二ゲーム程で手を引いたが、やつとルールや仕組みがわかってきたのか、二人とも真剣にルーレットを回している。どっちも子供だな。永市はその姿に何枚かシャッターを切ると、カメラも鞆の中にしまい込んだ。

「おい、終わったらちゃんと片付けとけよな。悪いが先に寝る」

夜の十時と寝るには早すぎるが、隣の簡易スタジオを崩して寝所を確保すると、襖越しに耳を傾ける。マリアの誘い文句を待っていた。

『アイさん強いですね、いつもいい目ばかり出しています』

『そう？マリアちゃんもそんな事言って、ルーレットの出る目、微妙に調整しているでしょ』

『あれ、分かっちゃいました？』

二人の笑い声が聞こえる。それじゃまともな勝負にならないじゃないか。永市はイライラしながらもマリアの合図を待った。

本当にあのガキは、俺を逃がしてくれるのだろうか。アイを自分が呼び出しますから、その隙に逃げて下さいと言われた。つまり自分一人で逃げるといふことなのか、それともアイを捕らえる必殺技か何かあるとでもいうのか。永市はマリアの行動がいまいち掴めなかったが、このままでは明日にも自分は取引されて殺されてしまう。それだけは絶対嫌だ。

永市は鞆を抱え込むとケイの姿を思い出した。自分に何の恨みがあ

ると言うのだ。誰かの先祖だか何だか知らないが、そんな理由で殺されてたまるか。もしかして望美にちよっかい出したのがまずかったか。あの二人は恐らく出来ている。自分が元旦那だからって、逆恨みもいいところだ。

永市は舌打ちすると、手帳を取り出してスケジュールを確認する。中から写真が一枚床にすり落ちた。愛美と望美がこちらを向いて笑っており、自分が家族であった最後に撮った写真だった。

また懐かしい物が出てきたな。永市はまじまじと写真を見つめた。やっぱりあのマリアってガキは愛美に似ている。どうしてまた愛美に心を縛られなければならない。死んだ人間をいつまでも哀れんだってしょうが無いじゃないか、自分はまだ生きているんだから。永市はむしゃくしゃして写真を破り捨てた。

『アイさん、少しお話があるのですが』

来た。永市は襖に張り付いて外の様子を伺う。

『話？何の話しよ』

『出来れば外で話したいのですが……永市さんに聞かれてはまずいので』

ばたばたと二人の足音がした後、玄関のドアが開く音がした。本当にあのガキは外に連れ出したのか。部屋の電気を消すと永市は窓のカーテンを少し開け、下の駐車場を覗く。外に出たならここを通るはずだった。しばらくして二人が外に出てくる。何か言い合う素振りを見せたが、しばらくすると駐車場を横切り、外の道路の方に出て行ってしまった。

「よくやった、あのガキ」

永市は急いで荷物を抱えて玄関先に飛びつく。靴を履いた所で、玄関の横にかけてあった車の鍵が無いことに気が付いた。

「ちっ……どつちかが車で逃げられないように鍵を持っていったな」

それがマリアでも構わなかった。永市は慌てて机の引き出しから車のスペアキーを取り出すと、一目散に駐車場へと向かった。注意深く辺りを見まわし、二人がいないのを確認してからエンジンをかける。とにかく友人の所にしばらくいさせてもらおう。永市は寒さで震える身体を押さえつけて、アクセルを踏み込もうとした。

「……………」

待てよ。この車で逃げたら、自分が逃げ出した事がすぐにはれるではないか。そうなったら、あのガキは酷い仕打ちに合わせられやしないか。見せられた無数の痣を永市は思い出した。が、邪念をすぐに取り払う。

「ガキの事なんて、どうでもいいじゃねえか。俺一人逃げれば充分だ」

永市はアクセルを名一杯踏み込むと、二人の消えた方とは反対方面に車を飛ばした。

駐車場まで来た二人は、互いに白い息を吐く。マリアは永市の部屋を一度確認した。電気は消えているが、おそらくこちらの様子を窓からうかがっているに違いない。

「アイさん、今日は星がきれいですね。明日は晴れそうですよ」

マリアがアイに上を向くよううながす。さて、ここからどうしよう。マリアはボンネットが少しへこんだ車を見る。アイが外にでる直前、万が一と車のかぎもハンドバッグに入れて持ち出してしまったので、永市はこの車で逃げられなくなった。スペアキーでも持っていれば話は別だが、それでも一度駐車場からアイさんを遠ざけなければならぬ。外に出るには一度ここを通る必要がある。マリアは寒いとつぶやいて、アイに近寄った。

「それで、話って何？」

ハンドバッグを両腕で抱え、寒さで顔を引きつらせながら素っ気なく尋ねる。マリアは一度背後を確認してから提案した。

「少し歩きますか？ここではあの窓から話し声を聞かれてしまうかもしれないですし」

二人は外から永市の部屋を見つめた。暗い上にカーテンもしかれているため、中の様子は分からない。アイが何かピンと来たように声をひそめた。

「分かった！マリアちゃん、あの男を逃がそうとしているでしょ」

「え……」

「永市が逃げたところをしばらく上げるチャンスを作ったって訳ね。だったらこの辺りに隠れていた方が良くない？」

そう言えば、アイには永市が逃げ出す所を捕まえた方がいいと提案していたのだった。

マリアの心がまたゆれる。今ならアイさんの味方にもなれるし、永市の味方にもなれる。どうしようと尻込みしていると、アイが何か暖かい物が欲しいわと言った。

「だったら私、肉まんが食べたいです」

一番近くのコンビニまで二、三分とかならない距離にかんばんが見える。

「そのすきに本当に逃げちゃったりしないかしら？」

アイがげげんそうに顔をしかめる。マリアは車のかぎもこちらが持っていますし、タクシーもこの辺りは走ってなさそうですからと、半ば強引にアイを歩道に連れ出した。これでは永市の方に加担してしまっている。自分も連れ出してくれる望みもないのに。あの男に逃げて、生き伸びて欲しいというのか。マリアは自分でもどうしたらいいか分からず、かんばん目指して歩き始めた。

「待って、マリアちゃん。どうしたのよ」

自分の異変に気がついたのか、アイが呼び止める。まだ永市の自宅から十数メートルしか離れていない。マリアはもう少し進んでからふり向こうとしたが、その前にアイに捕まってしまった。

「待ちなさい。今二人ともここを離れる訳にはいかないわ……マリアちゃん、少し変よ、どうしちゃったのよ」

「どうもしてないですよ。ただ、永市さんから少し離れたかっただけです」

これは本音だった。あれ以上あそこにいたら、自分の気持ちが変わりそうでおそろしかった。ここ二日間一緒に過ごした永市に対する心境の変化。絶対にそんな気持ちになってはならないのだが、今の自分の行動がそれを証明してしまっているのではないか。

「そっか、やっぱり男の人と一緒にいるのは良くないわね。マリアちゃんも年頃の女の子なんだし」

年頃の女の子。そう言われてマリアは気が付いた。この永市に対するどうにもならない感情。まさか、まさか自分はこの男の事がー。

「違う！そんなんじゃない！」

マリアは激しく首をふって否定する。今まであの男のどこに好きになる要素があったと言っただ。第一、お姉ちゃんも嫌っていたではないか。

「違うって、何よ。マリアちゃん、落ち着いて」

アイが自分をなだめるように両肩をゆする。その間にも思い出すのは、永市が自分に対して優しくしてくれた事だった。アイにしばらくたなわを解き、自分にタオルを差し出し、頭を優しくなでくれた。

なぜ、今さらそんな事ばかりが思い出されるのか。

マリアがうつろげに遠くを見つめると、一台の車がこちらに向かって走ってくるのが見えた。ヘッドライトが二人を照らし、まぶしさで目がくらむ。その車はマリアの隣で急ブレーキをかけて停止し、助手席が勢い良く開け放たれる。

「ガキ、早く乗れ！」

その声でマリアはとっさにアイを突き飛ばし、助手席に乗りこんだ。ドアを閉めようと伸ばした腕をアイにつかまれる。

「これは一体どういう事かしら」

おにの形相をしたアイに思わず息を飲んだ後、ものすごく強い力で引っ張られ、有無を言わずマリアは外に引きずり降ろされる。コンクリートの地面に寝かされ、あわてて起き上がった時には、永市もぐったりした様子で外に引きずり出されていた。

「永市さん！」

地面に打ち付けられた巨体を見てマリアはがく然とした。なんてパワーなのだろう。これが軍隊の力なのか。

「大丈夫よ、気絶させただけだから」アイが確認もかねて足でふみつける。「それより説明してもらおうかしら。どういう事か」

マリアは大きな力の前にくっするしかなかった。逃げるというわずかな希望が今、目の前で絶たれてしまったのだから。

翌朝、マリアと永市は後ろ手をしばられた状態でアイの前に座らされていた。

「もう信じられない！あんたはともかく、マリアちゃんまで逃げ出そうとするなんて」

イライラしたようにその辺りに積み上げられた雑誌を足でなぎ倒す。その様子に永市は悔しそうにくちびるをかんでこらえていた。昨日の自分の仕出かした行動にマリアは疑問をいだく。なぜ、あの時アイを突き飛ばしてしまったのだろうか。アイの味方でいられたなら、少なくともこの様にしばられる事はなかったはずだ。

「おい……しぼるのは俺だけでいいだろ。マリアちゃんは解いてやれ、元々俺がそそのかしたただけだ」

なだめつける様に永市は言ってくれたが、アイは知らんぷりしてジャケットを羽織ると、ハンドバッグを片手に外に飛び出してしまった。もうだめだ、アイさんから信用を得ることは難しいだろう。マリアはどうしたものかとしぼられた身体を見下ろす。これは基本の後手しぼり。二人で解けない事も無いが、解いた所でまた捕まるのがオチだった。

「またこのしぼり方かよ」

永市が鏡で自分の後ろ姿を確認する。その仕草にマリアは複雑な顔をした。

「どうして……助けに戻ったのですか？」

昨日から一番気になっていた事だった。本来なら逃げ切れてもいい時間を提供したはず。なのに、自分を助けに戻ったあまりこうして二人とも捕まってしまった。一人で逃げ出すとふんでいたが、とんだ計算違いがおきてしまったのだ。

「ふん……最初は俺一人で逃げるつもりだったさ。でもな、お前は見捨てられなかったんだ。もう二度と会えない気がして……俺もバカだな」

自分自身をあざ笑うと、荷物の入ったかばんを後ろ手のまま器用に開け始めた。何とか手が入る所まで口を開け、中からカメラを取り出して鏡の前で確認し始める。こんな状況でもカメラが大事なのか。

「そんなにそのカメラが大事なのですか？」

「まあな、俺の商売道具だ」軽くチェックし終わるとカメラを机の上に置く。「実は二回目なんだよ、アイちゃんにしばらくられるの」

永市は自分の状況に左右される事なく、部屋をうろろし始めた。自分の備品を確認して回っているのだと、マリアは気がつく。

「どうして、もう二度と会えないと思ったのですか？もしかして、私が永市さんの娘に似ていたからですか？」

永市の表情が一気にしぶくなる。はっとしてマリアはうつむいた。聞いてはいけない事を聞いてしまった。マリアがだまっていると、しばらくして永市が隣に座り直した。

「余計な事を言うな、ガキ。見捨てるのは一度だけで充分なんだよ」

お姉ちゃんが傷ついていたように、この男もまた何らかの形で傷ついていたのだろう。マリアはせっかくこの男がくれたチャンスを台無しにしてしまった事を後悔した。自然と涙があふれ、ほほを伝う。

「おい、泣くなよ。お前は何も悪くないだろ」

涙を止めようにも、両手がしばられているのでふくことも出来ない。マリアは上を向いて涙が流れるのを最小限におさえようと試みる。

「ほら、肩貸してやるからここでふけ」

永市が後ろを向いて左肩に来いと指示をする。マリアはその後ろ姿に素直に従うことにした。今なら、どうしてお姉ちゃんがこの男とけっこんしたのか分かる気がする。顔をほころばせると、マリアは永市にすがり付いた。

time 46 ・最後の喜び

望美が目覚ましてリビングに入ると、ケイはとっくに起きていたらしく、出かける準備をしていた。最初に出会った時のモビルスーツを着て、銃の整備をしている。

「おはよう」

眠い目を擦り、時刻を確認する。午前八時過ぎ。インターホンが鳴るわけでもないのに、望美は玄関の方を見つめた。待ち合わせの時刻は午前十一時だ。

「おはよう」顔を上げることなくケイは言う。「まだ早い、もう少し寝ていたらどうだ」

「ううん、自然に目が覚めたからこのまま起きるわ」

そのままリビングを横切り、洗面所で顔を洗う。今日がケイとアイちゃん、そしてマリアとのお別れの日だった。思い返せばこの数日間、自分はなんて濃い日々を過ごしてきたのだろうか。

完璧に目を覚まそうと、望美は気合を入れて頬を叩く。自分はマリアに何かしてあげられたのだろうか。何故かやりきれない気持ちで頭が一杯だった。今更どういふ顔をしてマリアやアイちゃん、そして永市と対面すればいいのだろうか。

着替えをし、化粧を施して外に出る身支度を整える。ケイがそれを待っていたかのように声をかけた。

「そろそろ出かけようと思うが、その前に何か食べていくか？」

あまり食欲はなかったが、ケイが何か食べたいと言ったのでトース

トを焼いてコーヒートを淹れてやる。これが二人で食べる最後の食事だと思つと、随分と侘しい気がした。

「元氣を出せとは言わないが、最後まで笑い顔を見せて欲しい」

ケイがコーヒートを啜りながら呟く。理不尽な要求だと望美は腹を立てたが、すぐにその気持は去つた。ケイがこの先生きていようが死のうが、二人の関係はこれで最後なのだ。

「じゃあ笑顔にさせてよ」

意地悪く笑つ。そう言つとケイが優しくキスしてくれるのを知つていた。

「待ち合わせ場所では何が起きるか分からない。最悪、アイと戦つ事もあり得るだろう。望美は二人が帰るまで、なるべく俺の近くにいろ、いいな」

「分かつた。でも、喧嘩別れなんてしないでよ。私、アイちゃんの事好きだから」

「分かつている。俺もどちらかと言つと平和主義者だ」

玄関でもう一度口づけを交わしてから、二人は外に出た。下のエントランスで待つように言われて五分後、ケイが二人乗り用の黒いへんてこな車に乗つて戻つてきた。

「やっぱりその車だったのね」

前に一度だけ公園前に止めてあつたのを覗き込んだ覚えがある。変なメーターにスイッチが沢山埋め込まれた黒い車。これが未来のタイムマシンののか。望美はバックトゥーザフューチャーと言つ映画

を思い出した。

「待たせたな、乗ってくれ」

「……やっぱり乗らなきゃ駄目よね」

思わず顔がひきつり、足が竦む。自分は一年前の交通事故以来、車には一切乗ってはいない。車に恐怖心を抱いており、外に出るのもマリアに出会う前は必要最低限に留めていた。でも、そんな自分からそろそろ脱出するべきなのかもしれない。望美は勇気を振り絞って助手席に乗り込んだ。

「顔色が悪いぞ、車酔い酷いのか？」

ケイが車を発進させながらミラー越しに確認する。

「……そうね、そんな所よ」

「そうか。気分が悪くなったら早めに言ってくれ」

望美は適当に頷くとなるべく遠くの景色を見るように心がけた。

目指すは比叡山中腹にあるガーデンパーク。今は閉園中の為、取引自体は駐車場で行うことになっている。無事に二人とも未来に帰れるのかしら。見たこともないタイムトラベルに期待と不安を抱きながら、車は穏やかに比叡山を目指す。

車に揺られて一時間弱。その間車内で二人が口を交わすことはなかった。もうお互いに語れる事は全て語ったつもりだった。無事、駐車場に辿り着くと望美は真っ先に車から降りる。うっすら積もった雪が、太陽に照らされて輝いていた。見渡す限り自分達以外誰もい

ない。まだアイちゃん達は着いていないようだ。

「まだ三十分くらい時間があるな……少し早く着き過ぎたか」

ケイは車に留まり、何やらグラフとにらめっこしながらスイッチを操作している。望美はケイを残して駐車場からふもとの景色を眺めた。ここ最近雪は降っていないが、それでも辺り一面銀白色がよく目立つ。望美は自然の濃い空気を何度か深呼吸して取り入れる。今日は風が少ない分、寒さが軽減された気がした。

「あんまり端の方に行くところ落ちるぞ」

ようやく車から、ケイがコートを羽織って出て来た。腰に拳銃が装備されているのを望美は素早く確認する。もしかしてここで永市を仕留めるつもりかもしれない。はっとして思わず息を飲む。

「どうした、突き落とされると思ったか？」

ケイが無理に笑って自分の髪を撫でる。急にケイがどこか遠くに行ってしまうような気がして、望美は反射的に抱きついた。

「……………」

まだ泣く訳にはいかない。望美は唇を噛みしめ、ケイが今ここにいる最後の喜びを確かめた。ケイも優しく望美を抱き寄せ、キスをする。

「これが、最後だな」

time 47・対立

数分後。二人が車内に戻り暖をとっていると、一台の車が駐車場に入ってきた。京都ナンバーの青いミニバン。ボンネットが少しへこんでおり、一目であの時ぶつかった車だと知れた。思わず身体が強張る。

運転しているのはどうやらアイちゃんらしく、助手席にはマリアがいるだけで、永市の姿は確認出来ない。後部座席の方を見たが、薄暗くてよく見えなかった。ケイの車に対抗するかのようになり、数メートルの距離を置いて真正面に車が止められた。

「随分早いじゃない、お二人さん」

アイが髪を掻き上げながら車から降りる。マリアと永市は出て来ない。不思議に思いながらも、ケイと望美は車内から出た。

「久しぶりだな、アイ」

ハンドバッグを抱え、腕組みしているアイにそう呼びかけた。ケイが数歩近づく。両者睨み合って、互いの腹の中を探っている様子だった。一瞬アイと目が合う。自分を睨みつけるような視線に望美はたじろいだ。

「どうも。取引の前にお別れ会でもしようかしら」

アイが助手席の方に回ってドアを開けると、マリアが申し訳なさそうに出てきた。よく見ると縄で拘束されている。

「マリア！」望美が駆け出そうとしたのをケイが制した。「アイち

「やん、これは一体どういう事なの！」

望美の叫びを無視してアイがマリアの縄を解いてやる。行きなさい、とアイに後押しされてマリアがようやく顔を上げた。自分と目が合った瞬間、マリアは泣きながら望美に飛びつく。思わずアイを睨みつけた。

「拘束するなんて酷いじゃない！今までマリアを監禁でもしていたわけ？」

望美の一喝にアイが笑った。

「まさか。人生ゲームとやらで楽しく遊んであげていたのよ、昨日逃げ出すまでわね」

少し泣いて落ち着きを取り戻したマリアが顔を上げてごめんなさいと呟く。

「私が悪いの。だからアイさんを責めないであげて」

「マリア……」

昨日マリア達に何が起こったのか分からないが、とにかく名一杯抱きしめてやる。そういえばマリアの記憶が、少し戻っていたはずだった。

「マリア、記憶が戻ったって本当？」

「うん……」望美の差し出したハンカチで涙を拭く。「少しだけど、自分の使命を思い出したの」

未来で自爆すると言う、恐ろしい計画の事か。望美は再度確認した。

「それでも、マリアは未来に帰りたいの？」

真つ直ぐ充血した瞳を見つめる。マリアはしばらく躊躇った後、静かに頷いた。

「それが私の運命だから。未来の日本を救う為にも帰らないと」「そう……」

マリアの髪を優しく撫でてやる。この子を未来に返したくないのは、自分のエゴだったのか。殺されるから未来に帰りたくないだろうと考えた自分は浅はかだった。記憶の戻ったマリアとは、もう二度と姉妹には戻れない気がした。

「お姉ちゃん……少しの間だったけど、ありがとう。お姉ちゃんに出会えて、私……」

マリアがしゃくりあげながら、声を絞り出す。その様子に望美も涙を流した。

「私もマリアに出会えて良かった。もつと一緒に遊びたかったし、もつといろんな事を教えてあげたかった……私こそ、ありがとう」

これが永遠の別れになるだろう。寂しいが、マリアの未来はマリアが決めた事。もう何も口を出不さいと望美は口を結ぶ。

「そろそろ別れの挨拶は済んだかしら」アイが間合いを見計らって声をかける。「ケイ、正確な転移時刻は何時何分なの？」

「午前十一時二十六分。後三十分くらいだ。早めに来て正解だったな」

ケイが運転席のグラフを覗き込んで確認する。アイが分かったと頷いて右手を差し出した。

「先に車の鍵を頂戴。ケイ、本当に未来に帰らないつもりなの？」

ケイがポケットから青い球を取り出し、アイに投げ渡してやる。

「ああ、そのつもりだ。二人だけで未来に帰ってもらおう」

お互いにまた見つめ合う。ケイが今更気がついたように言った。

「そう言えば永市はどうした。まだ車の中にいるのか？」

「そうよ。あたしたちが帰るまで、こっちの車の鍵は渡さないわ」

アイがハンドバッグから二つの鍵を取り出し、見せびらかす。ケイが分かったと手を上げた。

「教えて、ケイ。永市の暗殺は上層部も一枚噛んでいる事なの？」

ケイは黙ったまま何も答えようとはしない。上手く逃げる言葉を探しているのか、それともアイの言う通りなのか。相変わらずの仏頂面からはどちらとでも見て取れた。

「昨日電話で話した通りだ。もうお前に教えることは何も無い」

ケイの言動にアイが声を荒げる。

「あれで納得しろと言うの？そんなにあたしは信用ないのね！」

アイが素早くハンドバッグから黒い拳銃を取り出し、真つ直ぐケイに向ける。ケイも遅れをとる事なく腰から銃を引き抜いた。少しの間合いをおいて、互いに銃を突き付け合う。

「二人とも止めて！何考えているのよ！」

望美の叫びが閑散とした空気に響き渡る。ケイの目が一瞬、こちらを向いた。

「お姉ちゃん、危ないから隠れて」

マリアに引つ張られて車の陰に隠れる。このまま殺し合いでも始めるつもりなのか。冗談じゃない。望美は固唾を呑んで車の背後から二人の表情を伺った。二人とも緊迫した表情のまま微動だにしない。

「俺を撃つのか、アイ」

ケイがロツクを外しながら問いた。

この距離なら外さないわ」

アイもロツクを外しながら言う。

「ふん、銃の腕は俺の方が上だ」

「あら、ここに来て少しは鈍ったんじゃない？」

「……お前に勝ち目は無い、無駄な事は止める」

「……そうかしら」

アイが小馬鹿にしたように笑う。ケイもつられて笑みを浮かべた。二人とも気が触れたのか、こんなのおかしい。望美は二人が銃を下ろしてくれないものと祈りながら、ひたすらマリアと身を縮めているしかなかった。

永遠に続いたような長い睨み合いの後、アイが呆れたようにため息をついた。

「もういいわ、わかった。ケイはあくまでも真実を言わないつもりなのね」アイが銃をハンドバッグにしまう。「それなら自分で帰って確かめてくるまでよ……今までお世話になりました」

アイが深々と頭を下げ、望美とマリアもその綺麗なお辞儀姿に驚く。あのアイがあっさり頭を下げるなんて。本当に忠実な部下だと思いが知らされた瞬間だった。

「こちらこそ世話になったな。最後の任務をアイと一緒に遂行出来て良かった」

ケイもあっさり腰に銃を収める。今のはアイなりのケジメのつけ方とでも言いたかったのか。望美は腰が抜けたようにマリアとその場で腰を降ろした。なんて面倒な二人なのだろう。ここまでしなれば、互いに素直になれないらしい。急に緊張の糸が解け、冷や汗がどっと溢れるのを肌で感じた。

「全く……冷々させないでよ」

額にうつすら浮かんだ汗を手で拭う。アイが中々頭を上げようとなない。それが涙を堪えているからだと思美は悟った。

「アイちゃん……マリアとは、未来で仲良くしてよね」

マリアの頭を撫でながら声をかけてやる。やっこのことでアイが重い頭を持ち上げると、そこには笑顔が隠されていた。

「わかっているわよ、望美さん。迷惑かけっぱなしでごめん。マリアちゃんも、縛ったりして悪かったわ。二人ともありがとう」

今までのアイとは別人のようだ。これがアイなりの誠意なのだろう。マリアも気を許したらしく、ゆっくりと立ち上がった。

「アイさんの所に戻るね。お姉ちゃん、ありがとう」

「ええ。二人とも仲良くしなきゃ駄目よ」

望美も笑ってマリアの後ろ姿を見届けてやる。ケイとアイが睨み合った時はどうなることかと思っただが、お互い理解し合えたようだ。

望美もゆっくりと起き上がって二人の姿を確認した。アイがハンドバッグをボンネットの上に置いて、マリアを抱きしめている。あっちの方がよっぽど姉妹らしく見えるではないか。車の窓ガラスに映った自分と比較して思わずため息を漏らした。

転移時刻十分前。アイとマリアの二人が車に乗り、ケイが運転席の外から操作の指示をしている。タイムトラベルってどんな感じなのだろう。有名なネコ型ロボットの話にでてくるような感じなのかしら。

一人手持ち無沙汰になった望美は、車の後方に回った。すでに車のエンジンはかけられ、小さな車体からは低い唸り声が聞こえる。トランクラしき所も窓も無いため、後ろからでは中の様子を伺うことは出来ない。これでは駐車も出来ないのでは？

「後方はどうやって確認するのかしら」

気になって車体後部に近づく。よく見ると上部にカメラが備え付け
てあるようだ。何とか中の様子が見られないものかと試しにへばり
ついてみたが、エンジンの振動が伝わってくるだけだった。

これがもうすぐ目の前から消え、時空を移動するという。本当、ど
うなっているのだろう。望美はアニメや映画で得た知識を張り巡ら
せた。少なくとも自分が生きている内に未来旅行に行けることはな
さそうだ。いや、もしかしたらケイ達よりも、もっと先の未来から
先客が来ているのかもしれないが。

「ふふ、こんなに近くにいたら危ないわね」

少し離れていた方がいいだろう。望美が数歩後ろにさがった所で突
然、銃を突き付けられた。

time 49 ・死にたがり

「軌道に乗れば、後は自動操縦に切り替わるから安心しろ。寝ていても百五十年先の未来に着く」

「うーん……所要時間はどれくらいかしら」

アイが座席に大きく持たれる。

「さあな。時間なんてあつて無いような物だろう」ケイが欠伸をしますアイを無視して、マリアに話しかけた。「後の事は任せた。いざとなればお前が運転する方が早く着くかもしれないな」

マリアが笑ってそれに応じる。アイが不貞腐れたようにそっぽを向き、急に真剣な顔で尋ねた。

「ケイ。望美さんの事、好きなんでしょ？」

「……………」

ドアを閉めようとした手が思わず止まる。突然何を言い出すのか。

「……………あたしもケイの事、好きだった。片思いのまままで終わっちゃったけど」アイが慈悲を込めた顔で笑う。「望美さんの事、任せたわよ」

「アイ……………」

どう声をかけて良いのか分からず戸惑っている内に、目の前でアイがシートベルトを締めつけた。それが拒絶を意味しているように感じて、ケイはその場から動けなかった。

「あ、あいつの車の鍵渡さなきゃ」

アイが思い出したように声を上げる。

「どこにしまったんだ？」

「ハンドバッグの中よ。そう言えばボンネットの上に」

アイが永市の車を指したが、バッグらしき物は見当たらない。

「あれ？座席に置いてきちゃったかしら」

「待っている、確認してくる」

ドアを閉め、永市の車に近づく。フロントガラスから見る限り、アイのバッグは座席にもなさそうだ。

ふと後部座席の方を覗く。人らしき姿も見当たらず、代わりに解けたロープが見えた。直感的に銃を引き抜く。

「動くな！」

後方から聞こえたハスキーな男の声。間違いない、永市だ。自ら拘束を解き、車から逃げ出していたのだ。

「アイの奴、詰めが甘いぞ」

一人ぼやき、ケイは後ろを確認出来ないかと車のフロントガラスを覗いた。しかし真上に近い太陽は、光を反射するだけだった。強みのある声からして、永市は恐らく銃を持っている。アイのハンドバッグが最悪な形で見つかりそうだ。

「ゆっくり、こっちを向くん」

永市に指示され、ケイはどうしたものと思考を張り巡らす。声の遠さからして、自分とはまだ距離があるはずだ。素人の永市が自分を当てる確率は低い。振り向いた瞬間に、永市の腕か足に一発撃ち込むしかなさそうだ。まだ、あの男は殺せないからな。

ケイは銃をかまえたまま、ゆっくりと振り向いた。アイ達に乗せた車の後方で、望美が永市に銃を突き付けられていた。

「望美っ……！」

「ごめんなさい、ケイ」

望美が半泣きで自分を見つめる。自分から離れるなと言っておきながらこの様とは。ケイは舌打ちして狙いを定めてみるが、やはり望美が盾となつては永市を撃てる訳がない。

「お姉ちゃん！」

車に乗っていたマリアも気が付いたらしく、ドアを開けたが、永市が銃を向けて制す。

「ガキは車に乗ってる！俺はこの男と話があるんだ」

マリアにドアを閉めさせ二人でこちらに近づく。流石にアイも二人が車の前まで来ると状況を理解したらしく、車内で真っ青になっていた。

「俺に何の話だ」

ケイは銃を構えたまま、なるべく落ちつきを装いながら状況判断をする。ケイと永市の二人は車の間で互いに向かい合う。先程のアイ

と向かい合った時より距離は近いが、望美を避け、永市を死なない程度に撃つ芸当など出来そうにもない。せめて武器だけでも奪えないだろうか。

「ふざけるな！何で俺があんたらの未来の為に殺されなきゃならぬい、悪いがお断りだ！」

そう叫ぶと永市が銃を自分の方に向け。その距離、およそ六メートル。この距離なら連射でもすれば容易に当てられるだろう。

「そうだな、俺も好きであんたを殺す訳じゃない……本当にすまない」

一瞬だけ望美の方を見る。最後の言葉は望美にも向けた謝罪だった。望美はされるがまま、永市に抱き寄せられている。こんな非常事態でも嫉妬と言う感情は出てくるものらしい。ケイは自分に笑い出しそうになった。

「何がすまないだ、理由を説明しろ。俺がお偉いさんの先祖だか何だか知らないが、本当はそれだけじゃないだろ」

永市の探るような視線に、ケイは首を傾げる。

「どうしてそう思うんだ」

「お前、初めてよく見たが俺に似ているんだよ！」

「……………」

驚いた。もしかしてこいつは直感的に気付いているのかもしれない。口の中が急速に乾くのを感じて、思わず固唾を飲む。

ケイは真っ直ぐ永市の瞳を見つめた。そうだ、そうだよ。あんたと

は血縁関係だ。そして笑う。

「俺の名は、永市恵一郎。お前の曾孫だ」

望美は驚愕の事実を聞かされたように目を見開いて見せたが、当の永市は平然としてケイの顔を見つめていた。

「ふん……どうせそんな事だろうと思ったよ。お前と初めて玄関先で顔を合わせた時、誰かに似ていると思ったんだ。まさか俺にこんなハンサムな曾孫がいたなんてな」嫌味たつぷりに永市が笑う。「だったら俺を殺したら、あんたも死ぬことにならないか？」

その通りだ。ここで血を途絶えたなら、未来の自分は存在しない。宮本も、真理愛もだ。自分は恐らく消えるだろう。だが、それでいい。それが未来の為に一番犠牲の少ない方法であり、尚且つ自分の死に理由付けが出来る。

「そうだ。だが、それでいい」

「何だよ、そりゃ。お前は死にたがりか」

死にたがり。その通りだ。言われて初めて気が付いた。そうか、自分は死にたかったのか。

ようやく知った真実に、ケイは周囲を見渡した。未来で何度も危ない任務をこなし続け、戦場に向かったのも実は死にたかったからなのか。自分は自殺願望者だったのか。

何が任務だ、何が未来を変えに来ただ。いくら偉そうな事を言っても、自分の死を正当化したいが為の嘘に過ぎない。マリアを逃がしたのも、軍に逆らいたかったのもあるが本質は違う。軍に追われ、死にたかったからだ。上の命令を受け、マリアを逃がした罪と引き換えに永市の暗殺を承諾したのも、死にたかったからだ。自分は、

なんて単純な事に気がつかなかったのだろうか。そうか、そうだったのか。

「ふっ……ふはははっ！」

高らかな笑い声に皆驚く。思わず涙が零れ落ちそうになり、慌てて空いている左手で顔を覆い尽くした。未来に呆れていたのではなく、自分に呆れていたのだ。そんな単純な事だったのか。

少し落ち着きを取り戻してから、望美の顔を食い入るように見つめた。この女を好きになったのも、きつと許しが欲しかったからに違いない。

「おい、気でも狂ったのかよ」

ケイの変貌ぶりに思わず永市が声をかける。望美も怖々とした目でこちらを見つめていた。

「悪い……こちらの話だ。お前を殺せば、俺も死ぬる」

銃を強く握りしめ、再び標準を定める。狙いは永市京介、ただ一人だ。

「それなら自分一人で死んでくれ。俺はまだまだやりたい事が山ほどある。てめえの我儘に付き合えるか」永市が銃で望美の頭を小突いた。「お前、こいつの事好きだろ？」

何を今更。ケイは微笑ましい表情で永市を見下す。

「何だ、お前もまだ好きなのか」

「ふん……悪いが俺は商品としてだがな」

互いに睨み合った後、永市が望美の頭に銃を押し付ける。その黒く冷たい、歪な塊に震え、望美は静かに涙を流した。

「銃を捨てる！こいつに死なれては困るだろ！」

「止める！」ケイも思わず叫ぶ。「わかった……お前が生きたいのは充分わかったから、望美を離すんだ」

ここで逃がしてもまた捕まえればいい。時間はいくらでもあるんだ。ケイが諦めて銃を捨てようとした瞬間、望美が叫んだ。

「ケイ、撃つて！」永市の腕を掴むと、身動きが取れない様後ろ手で抱き着く。「私ごと撃つて！」

「何馬鹿な事言ってるんだ！」

永市も望美の大胆な行動に驚き、必死で振り払おうとする。

「もう疲れたの！これ以上失いたくないのに、みんな行ってしまおう！残されるのなら、いつそ死んだ方がましよ！」永市の抵抗に泣きながらしがみつく。「あんたも早く私を殺しなさいよ！憎かったんじゃないの？愛美じゃなくて私が生きているのが！」

その言葉に気が触れたのか、永市が望美を引き離し、思いっきり顔を引つ叩く。乾いた音と共に、望美がコンクリートの地面に転がった。

「そんなにお前も死にたいのか！言っとくけど俺は、お前らがいなくなつて清々したぜ！」

地面に横たわつた望美に銃口が向けられた。

もう限界だ。ケイは静かに銃を構えると、永市の拳銃目がけて撃つ。見事それは命中して、永市の右手と共に地面に落ちた。

「あ？」

永市が不思議そうに落ちた自分の手首と銃を見つめる。ケイは容赦なく啞然としている永市にもう一発撃ち込んだ。それは左胸に食い込まれ、永市がよろけてその場に倒れ込む。真っ赤な血がゆっくりとコンクリートと交わり、赤黒く染まっっていく。

「永市さんっ！」

車に乗っていた二人も血相を抱えて飛び出した。真っ先にマリアが永市の元に向かう。

「しっかりして下さい！永市さんっ！」

望美も慌てて起き上がると、すぐ側で横たわっている永市の姿を見て忽然とした。

「嫌あ　　っ！！！」

悲鳴を上げ、言葉にならない羅列が飛び交う。そんな望美とは裏腹に、マリアが冷静に永市の服を脱がし、傷の具合を分析している。自分が血塗れになるのをお構いなしに応急処置を施そうとしたその手が、永市の残っていた左手に阻止された。

「もう……いい……」

「動いては駄目です！出血を止めれば何とか　　泣きながらマリアが叫ぶ。「何とかしますっ！」」

永市が虚ろな目で周囲を見渡している。まるで最後の景色を少しでも自分の中に取り入れようとしているようだ。
あの出血具合からして、もう死ぬのは確実だった。ケイは無言で銃をしまつと、自分の両手を眺めた。

自分は、どのように消えてしまふのだろうか。

time 50 ・永市の死

苦しい。息をする度に激しい痛みが身体に走る。

「しつかりしなさいよ！永市っ！」

顔に大粒の雨が降りかかった。少し塩っぱい。何だ。虚ろげな目を精一杯こじ開けると、泣き腫らして痩せこけた望美がこちらを見ていた。

なんて不細工な面だ。そう言ってやりたかったが、言葉が出なかった。なんて事だ。もはや痛みは感覚となり、思考とは別の所で点-inし始めている。もうすぐ、死ぬのか。意外と冷静な自分に唇が歪む空が青い。今日はこんなにもいい天気だったのか。ぼんやりと宙を眺め、最後に思い出されたのはあの頃の自分だった。自分と、望美と、愛美の三人で食卓を囲っていた日々。もう全てが懐かしく、愛おしくて遠い存在となってしまった。あの頃に戻れたのなら。あの頃に戻れたのなら、今こうして横たわっていることもなかっただろう。それがどうしてこうなってしまったのか。不意に黒髪の少女と目が合った。必死で何かを訴えているが、自分の耳ではもはや何と言っているのか聞き取れない。視界がぼやけ、意識が遠のいていくのを感じる。せめて、せめてこれだけは伝えなくては。永市は最後の力を振り絞り、ゆっくりと口を動かした。

「ごめん……な……愛………」

これが自分の運命なのか。閉ざされた瞳は、もう二度と光を浴びる事はなかった。

マリアが永市の額に手を当て、優しく瞳を閉じてやる。悔やむように首を振り、その場を離れようとはしない。それは望美も同じだった。

「ケイ！約束が違うじゃない！」佇むケイにアイが罵倒した。「どうして今、止めを刺したのよ！」

お互い他人の死に慣れすぎたのか、ケイとアイの二人は永市の死に涙を流すことはしなかった。

「お前も約束が違った。永市は車から逃げ出したんだ、お前の詰めが甘い」

アイが胸ぐらを掴んできたかと思うと、突然左頬に激しい衝撃を感じた。同時に頭がくらくらし、思わずその場で尻もちを付く。口の中が切れ、鉄の嫌な感じが口いっぱいに広がる。殴られたのだと気がつくまでに、若干の時間を要した。

「ケイが消える前に一発殴っておきたかったのよ。あー、清々した！」

両手でパンパンと痛みを払い除ける。ケイは左頬を抑えながら、ぼんやりと永市の死体を見つめた。確かに今、自分は永市に止めを刺すべきではなかった。右手首を飛ばした所で永市を取り押さえるべきだったのだ。

「悪い……約束を破った」

ケイは自分でも訳が分からなくなり、頭を抱える。無意識に止めを刺してしまった。そして永市は死んだ。自分は間違った事をしてしまったのか。自分は、消えてしまうのか。

「あの死体、どうしよう」

アイが自分の心境とは他所に、のんびりと他人事のように呟く。それから周囲を見渡した。

「あれ？昼間なのに急に暗くなったわよ」

アイに言われて顔を上げると、確かに周囲が薄暗い。まだ昼過ぎだった筈だ。

「ケイ！あれ見て！」

アイがそう叫んで空を指す。空には月の何倍はあるであろう巨大な球体が浮かんでおり、それが日光を遮っていた。

これは一体どういう事だ？先の見えない未来がケイ達を襲い始めた。

time 51 変えられた未来

『空に突如現れた巨大な物体ですが、先程専門家の分析から徐々に地球に近づいて来ている事が分かりました。早急の解明を必要とし、尚且つあの物体をどのように回避させるのかが問題となっております。国民の皆様はくれぐれもパニックにならないよう、落ち着いて的確な情報を元に行動して下さい……』

永市の車に備え付けられたカーナビから、はつきりとしたアナウンスーの声で現状が告げられた。どうやら突如空に現れた大きな球体が、地球に向かってきてきているらしい。

「どついう事よ！こんな大きなのが衝突したら、地球自体お終いじゃない！」

永市の車に乗って、テレビにしがみつきながらアイが喚く。一方ケイは車にもたれかかるようにぐったりと座っていた。きつと自分のせいだと咎めているに違いない。自分が永市を、重要人物の先祖を殺してしまったから、この地球ごと殺されるのだと。

望美は二度と動かない永市の死体を見た。永市は、ケイの先祖でもあった。自分がケイに惹かれたのは、永市の血が混じっていたからなのか。

顔にハンカチがかけられており、その横でマリアが何やら復唱している。弔いの詠唱なのか、それとも復活の呪文か。どちらにせよ、この状況には似付かわしくない気がした。一通り泣き枯らした瞳には、もう同情の色しか浮かばない。

ケイの事を恨んでいる訳ではない。むしろ結果的に自分を助けてくれたのだから、感謝しなければならぬ。望美は重い足取りでケイの前に立った。

「ケイ……さつきは助けに来てありがとう」

声をかけても、顔を上げる素振りも見せない。しかし、この状況でほおっておく訳にもいかない。

「全部貴方のせいじゃないわ。私も勝手な事して永市を挑発させた……この状況は私も同罪よ」

身体に触れようと手をのばす。既に別人となってしまうたケイを、自分は救えるのだろうか。

『これで、最後だな』

ケイの言葉を思い出し、望美は手を引く。駄目だ、今のケイに触れてはならない。

「いや……俺が止めを刺したからだ。俺が未来を変えたから、地球の未来が変わってしまった」

覇気のない口調とため息。ケイは完全に抜け殻のようになつてびれてる。望美もどうしたものかと肩をすくめ、空を見上げた。巨大な球体が太陽を覆い隠し、昏間なのに薄明るい夜のような。

「あの物体、何とかならないかしら」

「無理だな。規模が大き過ぎる。大気圏でも燃え残って、地球を殺しにくるだろう」

すなわち世界の終り。まさかこんな形で人類の滅亡が実現するとは。望美は遙か遠くに点在する街を見下ろした。今頃世の中全体がパニ

ツクに陥っているに違いない。誰がどう見ても世界の終りを予感させる事態だった。

「そうよ！あたし達だけ先に未来に帰ればいいじゃない」アイが閃いたように顔を上げた。「ね、マリアちゃんもそう思うでしょ？」

問われたマリアは顔を上げると、静かに首を振った。

「この状況で未来に帰っても、恐らく地球自体が無くなった先の未来にしかたどり着けません。私達は車で宇宙をさまようだけになります」

「そんなあ！」アイががっくりして座席にもたれかかった。「じゃあ、あの物体をどうにかしない限り、あたし達未来に帰れないじゃない！」

泣き叫ぶアイを横目にマリアは立ち上がると、ケイの車の運転席側に乗りに込んだ。何やらスイッチを色々動かしている。気になった望美はマリアの元に行き、窓の外から覗き込む。

「マリア、何しているの？」

「あの物体の大きさと速度、地球到達時間を計算出来ないかと思って」血の乾いた指が忙しなく動きまわる。「直接情報回路に接続した方が早いですね」

何やら勝手に決断すると、マリアは車を降りてぐったりした抜け殻のケイの元に向かう。

「ケイさん、しっかりして下さい。永市さんが死んだのと、空に巨大物体が出現したのは明らかに関連しています。だったらあれも何とかするしかない、そう思いませんか？」

マリアがケイの腕を引っ張る。ケイが嫌そうに顔を上げた。

「何とかするって、どうするつもりだ」

「私があん物の破壊します」

マリアがはっきりとした口調で述べた。ケイが気付いたように目を見開く。

「だが……それではお前が死ぬぞ。それにあの大きさを破壊出来るとも限らない。ましてや記憶の欠落があったように、何処か損傷を起こしてでもしたら」

「それを今から計算するのです。早く起きて下さい」

マリアは無理矢理ケイの身体を立たせると、永市の死体を避けて車に戻ってきた。望美も何だか複雑な状況でマリアを見守る。マリアは未来で起こす予定の計画を、あの球体に向けて実行しようと言うのだ。

「私の何処かに端子は付いていますか？」

マリアが車の下部から黒いコードを引っ張り上げる。

「ああ。首の後ろ、髪の毛の生え際だ」

ケイが丁寧にマリアの後ろ髪を掻き分け、黒いコードをねじ込む。思わず望美は目を瞑った。恐る恐る目を開け、マリアとケイのやり取りに耳をすます。

「かなり高性能なコンピューターを積んでいますね。流石時空を移

動するだけあって、この耐久性なら大気圏でも大丈夫そうです」

「そうか。あの物体付近まで移転出来そうか？」

「それは何とも……物体の情報が少なすぎますが、一応上空にも転移は出来るようです」

マリアは目を瞑ってぶつぶつと何やら呟く。テレビを見入っていたアイが、悲鳴を上げた。

「あの物体の到達時間、およそ六時間後ですって！」

世間の状況も気になった望美は、アイの所に小走りで向かった。一緒にテレビを食い入るように見つめる。

『突如空に現れた巨大物体は、後六時間後に地球に到達する模様です。尚、あの大きさでは大気圏でもかなり燃え尽きる事なく地球に到達するであろうと見込まれ、人類が始まって以来の危機的状況とも思われます』

心なしかアナウンサーの声が震えている。望美は他のチャンネルもチェックしてみるが、どれも同じような特番に切り替えられ、皆口々に世界の終りだと嘆いていた。

「何よ、永市が死んで、過去が変わったから世界も終わるって言うの？ やっぱり未来をそう簡単に変えちゃいけないかったんだわ！」

祈るように手を合わせ、肩を震わす。望美は思わずアイに聞いた。

「ケイの事、責めたりしないの？」

一瞬どういう意味かと首を傾げてから、向こうの車に乗っているケ

イを見た。

「起きちゃった事だもの、今更責めた所でどうにもならないわ。一発殴ったらすつきりしちゃった。それに永市を逃がした責任があたしにもある。実は永市を縛ったの、二回目だったのよ。だから逃げられたんだわ。それにあの時ケイが永市を殺していなかったら、望美さんが今頃あそこに横たわっていたのかも知れない」

二人でハンカチをかけられた永市を見る。永市は自分に銃を突き付け、盾にし、殺そうとした。しかしその経緯に至るまでは皆に責任があると言いたいのだろう。確かに自分もケイから離れるなど言われていながら、勝手にうろろ出歩いていた。こうなったのは、本当に運命としか言いようがないのではないか。

望美はマリアを見た。あの子は真っ先に永市の元に行き、何とか助けようとしていた。今だってこの状況を何とかさせようと躍起になっている。自分は、一度未来を諦めてしまった。あの時、ケイにも永市にも死なせて欲しいとせがんだ。なのに生き残ってしまった。これが自分の運命なのか。

「ところで、あの二人は何をしているの？」

アイが不思議そうに向こうの車に乗っている二人を伺う。望美がマリアの計画をここで実行するつもりなのよと説明してやると、アイの顔に焦りが現れた。

「あの車ごと自爆するつもり？ だったら、あたしはどうやって未来に帰るのよー！」

自分の意志とは裏腹に、勝手に物事が進行している。アイが車のドアを勢い良く開けて、ケイ達の元に走り、何やら口論し始めた。望

美も黙ってついて行く。

「待つてよ！それじゃあたしはここに残れって言うの？過去で生きると？冗談じゃないわ！」

「でも今この状況を何とかしない限り、ここでの未来もありませんよ」マリアが顔を上げずに冷たく言い放つ。「計算、出ました。転移は今から約十分後。身体及び記憶の損傷で害する不爆発の可能性

2・75%。目標到達地点に上手く転移できる可能性

76・43%。見事破壊し、地球に隕石が到達しない可能性

0・04%」

「嘘！だったらどの道終りじゃない！」

アイががっくりとその場で膝を折る。マリアは更に続けた。

「細かい隕石は大気圏でも燃え残り、多少なりとも地球に落ちてしまえます。落ちる場所にもよりますが、あくまでもクレーターレベル。地球壊滅までには至りません」やっと顔をあげ、マリアが笑う。「大丈夫、この星は救えます。救ってみせます」

マリアの導き出した結果に、望美は綻びを見せた。

「良かった、じゃあ地球は助かるのね」

「はい」

力強く頷くマリアに、アイちゃんも安堵の表情で答えた。一方ケイは納得しない表情で反論する。

「しかし……あの物体を破壊して地球壊滅を阻止したとしても、その先の未来に絶望的な出来事が訪れるかもしれない」

ケイの言葉に一同は返す言葉が見つからなかった。確かにあれ以上厄介な物が再び出現し、地球を襲うかもしれない。未来の保障など何処にもないのだ。

「そうかもしれませんが、そうでないかもしれませんが」胸に手を置き、心音を確かめながら息を吐く。「しかし、今を精一杯生き残るのが、人間ではありませんか？」

マリアの問いに皆顔を見合わせた。そうだ、自分達は人間。今を生きている人達。今を生きずに未来があるというのか。アイがマリアに膝まずき、まるで女神に許しをこうかのように呟く。

「そうよね。今を生きられるのなら、もう未来でも過去でも構わないわ。マリアちゃん、あたしはどうしたらいいの？」

怯えているアイにマリアは優しく微笑む。

「アイさんは過去で生きる事になります。同じくケイさんも。その覚悟だけしておいて下さい」

「待て！」ケイがマリアの言葉を遮り、か弱い肩を掴む。「俺が運転してマリアを自爆地点まで連れて行く。この責任は俺にも償わせてくれ」

「ケイ……」

望美はケイの瞳を見た。この状況に対してなのか、死に対してなのか。とても怯え、微かに唇も震えている。マリアはケイの心情を悟ったのか、肩に乗せられた大きな手を優しく包みこんだ。

「それは駄目です。ケイさんはここで生きるのです。そして、罪を

償って下さい」マリアが永市の死体に目をやった。「私がこの車を乗っ取り、操作します。そして助手席にはあの方を」

マリアの指す方向には、もう二度と起き上がらない永市が横たわっていた。

「あの死体を連れてどうするつもりだ。派手に火葬でもする気が」

ケイが冗談交じりで尋ねたが、マリアは真剣に頷いてみせた。

「その方が処理に困らないでしょう」言ってから気がついたように振り向く。「もしかしてお姉ちゃんは、こっちで火葬したい？」

ううん、と望美は首を振ってから微笑む。

「永市も連れてってくれるのね。ありがとう。マリアはあの男の事、嫌いじゃなかったの？」

マリアがうーんと少し考えてから笑った。

「お姉ちゃんやアイさんは嫌っていたけど、私はわりと好きだったかな」

意外な回答に、望美とケイは顔を見合わせた。

「そっか。だったらあいつも、少しは浮かばれるかもね」

time 52 次の世界へ

死んだ永市を乗せ、マリアは時空へと旅立った。時空時差を挟んで
小一時間後、突如現れた巨大物体は見事爆発に成功した。

静かな爆発音と共に、細かな破片が辺り一面に火花をちらつかせな
がら落ちて行く。なんて穏やかな爆発なのだろう。これが夜だった
ら綺麗に見えただろうな、と望美は思った。

地球の未来は救われた。小さな少女の手によって。しかし、その少
女を知る者は、ここにいる三人しかない。

「はあー、無事自爆出来たみたいね。ありがとう、マリアちゃん！」
空に勢い良く手を振る。アイのその勇ましい気持ちの切り替え方は、
逆に微笑ましいくらいだった。

「アイちゃんはいつでも元気ね。すごいわ。その元気があれば、こ
こでも生きていけるわよ」

アイが「そうですか？」と笑って答えた。そして思い出したように
手を差し出す。

「望美さん、仲直りして下さい。これからいろいろとお世話になり
そうですし」

望美は差し出された手を躊躇う事なく握った。

「分かっている。私こそアイちゃんを出し抜いて悪かったわ。そう
だ、アイちゃんの本当の名前、教えてくれる？」

アイが胸を張って、自慢気に答えた。

「あたしの名前は相川奈緒美。コードネームは苗字から取っていたの」

「そう。素敵な名前ね」

望美は手を繋いだまま、後ろを振り返った。ケイが二丁の拳銃を取り出し、血で染められたコンクリートの上に立っている。

「ケイ、貴方はどうするの？」

しばらく動かないように止まっていたが、やがて吹っ切れたのか、笑って答えた。

「一先これらを持って警察にでも出頭してみるか。戸籍も何もない俺がまともに取り扱ってもらえるかどうかわからないがな」空を見上げ、話しかける。「マリアに言われた通り、罪を償ってくる。いつ自分が消えるか分からないけどな」

ケイはそう言って歩み出した。私達とは反対の方向に。その背中に投げかけるように叫ぶ。

「大丈夫よ、きっと。私達が待っているから！」

望美は空いている方の手で下腹部をさすった。そこに新たな可能性を感じ取っていたからだ。

一カ月後、望美は妊娠した。ケイの子に違いなかった。それをアイ

に告げたら、悔しがりながらも祝福してくれた。

「ねえねえ望美さん、名前どうするの？男の子？それとも女の子かな？」

まだ気が早いわよ、と望美は笑って下腹部を撫でる。外は小春日和らしく、光から暖かみを感じられた。少し散歩でもしたくなる天気だ。望美はこたつから出ると身支度を始めた。

「少し外に出ない？ランチでも食べに行こうよ」

「いいわね。暇過ぎてこたつに入っていたら、今日も寝る所だったわ。あたしも早く仕事見つけなきゃ。今週の求人情報誌ついでに貰ってこよー」

アイは最初こそ戸惑い、しばらく落ち込んでいたものの、今では前向きに仕事探しを始めている。アイなりの未来をこれから見つけようとしていた。

望美はお腹を冷やさないようにと、こっそり腹巻を服の下に忍ばせる。そしてもう一度下腹部をさすった。自分は絶対に、女の子だろうと思った。そしてその名を呟く。

「行くよ、マリア」

終わり

t i m e 5 2 ・次の未来へ（後書き）

四人のお話はこれでおしまいです。ここまで読んでくださり、誠にありがとうございました。数々のいたらない点もございますが、読者様あつての原作です。感想を聞かせてもらえたら嬉しいです。それではまた次の作品で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5662q/>

私と小さな未来抗争

2011年8月5日16時02分発行